

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第10輯

近畿自動車道和歌山線建設に伴う

# 滑 瀬 遺 跡

—— 発掘調査報告書 ——

大阪府教育委員会  
財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

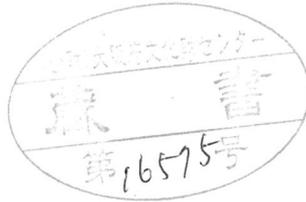
1987

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第10輯

近畿自動車道和歌山線建設に伴う

# 滑 瀬 遺 跡

—— 発掘調査報告書 ——



大阪府教育委員会  
財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

1987



滑瀬遺跡遠景（北から）



独立丘陵検出遺構（北から）



平野部検出遺構（南から）



独立丘陵斜面部堅穴住居址（北から）



8号住居址炉址（炉堤）



磨製石器



## 序 文

大阪府の南端、泉南市に所在する滑瀬遺跡は、風吹峠を越えて和歌山県に通ずる場所を占地しています。遺跡は谷底低地と独立丘陵上にまたがり、弥生時代の集落としての内容をもちますが、こうした遺跡の性格が判明してきたのはそんなに古いことではありません。

すなわち、関西国際空港のアクセス道路のひとつとしての近畿自動車道と和歌山線の建設に先立って、埋蔵文化財の試掘調査が実施されたことに端を発します。昭和60年6月のことでした。そののち同年9月から発掘調査をつづけたところ、低地部において弥生時代の竪穴住居跡が見つかり、泉南地方では数少ない弥生時代の集落遺跡の様相があきらかになってきました。さらにそのときの状況で、近接する丘陵上にもおなじ時代の遺跡がひろがるのが予測されたため、第2次の試掘調査をおこなったところ、やはり丘陵上にも低地部と同時期の竪穴住居跡が良好な状態で姿をあらわしました。

発掘調査の成果については、本報告書にくわしく記述しているところでありますが、いくつかの問題点にふれておきたいと思います。第一に、弥生時代中期末から後期初頭にかけての集落が、ほぼそっくり調査されたことです。第二に、集落がおよそ20mの比高をもつ低地部と丘陵上の二ヵ所にまたがって存在していたことです。第三に、このように、日常生活には不便と思われる面積の狭い丘陵上に立地する集落については、その時期ともあいまって「倭国の乱」との関連が充分考えられます。「逃げ城」「見張り台」「のろし台」などといったような性格を持っていたかもしれません。

その当否はともかく、この遺跡が多く歴史的な課題をもっていることは、もはや明確なことといえるでしょう。今後、本報告書にまとめられたデータをもとに、さまざまな分析が試みられることを願ってやみません。なお最後になりましたが、調査に協力された日本道路公団大阪建設局や地元の各位、調査を実施された(財)大阪府埋蔵文化財協会の方々に感謝の意を表するとともに、これからの文化財行政にたいする理解と援助をお願いする次第であります。

昭和62年1月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 吉房康幸

## 序 文

本協会が関西国際空港建設に伴う各種公共事業に先立つ埋蔵文化財の発掘調査を実施する機関として設立されて2年目を迎え調査事業を行う必要な体制をも充実することができたことは、大阪府教育委員会をはじめ近畿の各府県市教育委員会のご指導並びにご支援の賜ものであります。

今回、報告いたします滑瀬遺跡は、泉南市信達六尾に所在しており、近畿自動車道と和歌山線建設に先立つ発掘調査でありまして、昭和60年度に試掘調査・発掘調査を、昭和61年度に前年度において調査を残した地域の発掘調査と遺物整理を、日本道路公団大阪建設局から委託を受けて実施した調査事業であります。

本遺跡の調査は、昭和60年度に遺跡範囲の確認調査を行い当初土器の散布が認められる程度の遺跡であったが調査の結果弥生時代から平安時代にかけての集落跡であることが明らかとなり道路予定地部分全域の発掘調査を行うことになり、引き続いて調査を実施したが用地等の問題で当初予定した範囲の一部について調査着手が遅れ昭和61年度にかけて調査を行った。

今回の調査結果については、弥生時代の竪穴式住居址十数棟が丘陵頂上部と斜面地並びに谷地形部に所在していることが確認された。

これら竪穴住居址がほぼ一時期に作られたものと思われ、また住居址の構造の中でも炉の構造が山向うの紀伊地方の影響を強く受けた集団が居住していたものと考えられる。

特に泉南地方では、これほど多数の住居址が確認されたことは弥生時代後期の集落のあり方についての研究資料を提供され今後の研究がより進展するものと期待される。

本調査を実施するにあたり、日本道路公団大阪建設局・日本道路公団大阪建設局岸和田工事事務所・大阪府教育委員会・泉南市教育委員会、その他地元関係者に多大のご協力、ご支援をいただいたことに深く謝意を表します。今後も本協会の調査事業にご支援、ご指導をお願い申し上げます。

昭和62年 1月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会  
理事長 浅野素雄

## 例 言

1. 本書は近畿自動車道と歌山線建設工事の着工に先立つ発掘調査のうち、泉南市信達六尾地内に所在する滑瀬遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、大阪府教育委員会および財団法人大阪府埋蔵文化財協会が、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて実施したものである。
3. 本書には、発掘調査に先立って実施した試掘調査の結果も併せ記載した。
4. 現地調査は大阪府教育委員会文化財保護課指導のもと、財団法人大阪府埋蔵文化財協会調査課（課長 井藤 徹）が担当した。各年度の担当は以下の通りである。

昭和60年度 調査課第三班（班長 渡辺昌宏）、技師 富加見泰彦 宮野淳一 岡本圭司

昭和61年度 調査課第五班（班長 岩崎二郎）、技師 富加見泰彦 岡本圭司
5. 調査は、昭和60年6月1日から同年7月31日まで試掘調査を実施し、その結果を受けて、同年8月15日から昭和61年2月28日まで1次調査（A地区・B地区）、昭和61年5月24日から同年9月30日まで2次調査（C地区）を実施した。
6. 調査の実施にあたっては、日本道路公団岸和田工事事務所、信達郷共有林組合、地元信達六尾地区、信達金熊寺地区、および泉南市教育委員会に格別の御配慮を受けた。

また、調査中、及び報告書作成については、大阪大学助教授 都出比呂志氏、大阪市立大学教授 粉川昭平氏、奈良県立橿原考古学研究所指導研究員 堀田啓一氏、同研究所 寺沢薫氏、大阪府立鳳高等学校教頭 石部正志氏、泉南市教育委員会社会教育課 仮屋喜一郎氏、社団法人和歌山県文化財研究会 土井孝之氏、兵庫県教育委員会 山本三郎氏、岸和田市教育委員会 近藤利由氏から有益な御教示を得ることができた。
7. 報告書の作成については、富加見・宮野・岡本が共同で行った。
8. 本調査では、理化学的な分析業務を次の諸機関、諸氏に委託し、実施した。
  - (1)花粉・珪藻分析……………総合科学株式会社
  - (2)熱残留磁気測定……………夏原技研
  - (3)プラントオパール分析……………宮崎大学 藤原宏志氏

## 凡 例

1. 本書に掲載した遺構実測図の方位Nは、すべて座標北を示している。
2. 本書に使用している地区割方法は、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が国土座標（第VI系）を基準に独自に設定したものである。具体的には本文中に記す。
3. 本書に掲載した遺跡分布図には、国土地理院発行の5万分の1地形図「岸和田」および「粉河」を使用した。また、地形分類については、同院発行の5万分の1土地条件図「岸和田」を基にした。
4. 本調査においては遺跡の航空測量を実施し、20分の1の平面図を作成している。遺構の全体配置図はそれを基に作成した。
5. レベル高はT.P.（東京湾標準潮位）による。
6. 遺物実測図の縮尺は、土器については3分の1、石器については実寸・2分の1・4分の1とした。
7. 本文の記載にあったては、前記の地区割呼称とは異なる、本遺跡独自の地区呼称を併用している。これについても本文中に記す。
8. 土層断面の色調および土器胎土の色調については、『新版 標準土色帖』5版 1976年（日本色研事業株式会社）の色片との比較で記載している。
9. 図化した土器の内、その土器の質によって断面を以下の様に分類、表現した。  
弥生土器、黒色土器、土師器は黒くぬりつぶし、瓦及び瓦質土器は斜線、須恵器、陶磁器は白ヌキで示した。  
尚、黒色土器は燻べている部位を網目トーンで示した。
10. 遺構及び遺構番号は、当協会独自の呼称を使用したのが、報告書作成時に土壇、溝、堀、住居址等の呼称に変更した。

# 本文目次

序文	
例言	
凡例	
第1章 調査の経過	（富加見） 1
第1節 調査に至る経過	
第2節 既往の調査	
第2章 遺跡の位置と環境	（岡本） 3
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第3章 調査の方法	（岡本） 11
第4章 調査の成果	（富加見・宮野・岡本） 13
第1節 層序	
第2節 弥生時代	
第3節 平安時代	
第4節 中世	
第5節 近世以降	
第5章 まとめ	（富加見・宮野・岡本） 121
付章	127
1. 滑瀬遺跡焼土試料の考古地磁気学的検討	
2. 滑瀬遺跡1号住居址焼土の考古地磁気測定	
3. 花粉化石等微化石分析業務委託報告	

# 挿図目次

第1図 滑瀬遺跡位置図	第5図 遺跡地名表
第2図 調査地区	第6図 地区割図
第3図 周辺の地形	第7図 B地区（谷）東西方向断面図
第4図 周辺遺跡分布図	第8図 B地区（谷）南北方向断面図

第9図	C地区(丘陵)東西方向断面図	第39図	13号住居址出土遺物
第10図	A-2地区南北断面	第40図	9号住居址出土遺物(3)
第11図	B地区東西断面	第41図	10号住居址平面図
第12図	C地区8トレンチ東西断面	第42図	10号住居址出土遺物
第13図	1号住居址平面図	第43図	11号住居址平面図
第14図	1号住居址炉平面図	第44図	12号住居址テラス平面図
第15図	弥生時代遺構配置図	第45図	12号住居址テラス出土遺物(1)
第16図	P6遺物出土状態	第46図	12号住居址テラス出土遺物(2)
第17図	1号住居址出土遺物(1)	第47図	14・15号住居址平面図
第18図	1号住居址出土遺物(2)	第48図	14・15号住居址炉断面図
第19図	2号住居址平面図	第49図	14号住居址出土遺物(1)
第20図	2号住居址出土遺物	第50図	14号住居址出土遺物(2)
第21図	3号住居址平面図	第51図	14号住居址テラス出土遺物
第22図	3号住居址炉平面図	第52図	14号住居址出土遺物(3)
第23図	3号住居址出土遺物	第53図	14号住居址出土遺物(4)
第24図	4号住居址平面図	第54図	14号住居址出土遺物(5)
第25図	4号住居址出土遺物	第55図	15号住居址出土遺物
第26図	5号住居址平面図	第56図	掘立柱建物跡1平面図
第27図	5号住居址出土遺物(1)	第57図	掘立柱建物跡2平面図
第28図	5号住居址出土遺物(2)	第58図	掘立柱建物跡3・4平面図
第29図	6号住居址平面図	第59図	掘立柱建物跡3出土遺物
第30図	6号住居址炉平面図	第60図	掘立柱建物跡5平面図
第31図	6号住居址出土遺物	第61図	溝2・3平面図
第32図	7号住居址平面図	第62図	溝5平面図
第33図	7号住居址出土遺物	第63図	溝5出土遺物
第34図	8号住居址平面図	第64図	溝6平面図
第35図	8号住居址出土遺物	第65図	溝7・8平面図
第36図	9, 13号住居址平面図	第66図	溝9・10平面図
第37図	9号住居址出土遺物(1)	第67図	溝9出土遺物
第38図	9号住居址出土遺物(2)	第68図	溝11平面図

第69図	B地区土壌群	第99図	包含層出土遺物(3) C地区②
第70図	土壌1出土遺物	第100図	包含層出土遺物(4) C地区③
第71図	自然流路出土遺物(1)	第101図	包含層出土遺物(5) C地区④
第72図	自然流路出土遺物(2)	第102図	平安時代遺構配置図
第73図	自然流路出土遺物(3)	第103図	溝1出土遺物
第74図	自然流路出土遺物(4)	第104図	溝2出土遺物
第75図	自然流路出土遺物(5)	第105図	包含層出土遺物
第76図	自然流路出土遺物(6)	第106図	堀状遺構断面図
第77図	自然流路出土遺物(7)	第107図	堀状遺構延長部出土遺物
第78図	自然流路出土遺物(8)	第108図	B地区、A-6地区VI層出土遺物
第79図	自然流路出土遺物(9)	第109図	B地区、A-6地区V層出土遺物
第80図	自然流路出土遺物(10)	第110図	中、近世遺構配置図
第81図	自然流路出土遺物(11)	第111図	B地区、A-6地区IV層出土遺物(1)
第82図	自然流路出土遺物(12)	第112図	B地区、A-6地区IV層出土遺物(2)
第83図	自然流路出土遺物(13)	第113図	中世包含層出土遺物・石器(1)
第84図	自然流路出土遺物(14)	第114図	中世包含層出土遺物・石器(2)
第85図	自然流路出土遺物(15)	第115図	石組平面図、立面図
第86図	自然流路出土遺物(16)	第116図	土壌1出土遺物
第87図	自然流路出土遺物(17)	第117図	A-1・2・3地区II層出土遺物
第88図	自然流路出土遺物(18)	第118図	A-1・2・3地区I層出土遺物
第89図	自然流路出土遺物(19)	第119図	B地区、A-6地区III層出土遺物
第90図	自然流路出土遺物(20)	第120図	B地区、A-6地区II層出土遺物
第91図	自然流路出土遺物(21)	第121図	B地区、A-6地区I層出土遺物
第92図	自然流路出土遺物(22)	第122図	近世以降包含層出土遺物・石器
第93図	自然流路出土遺物(23)	第123図	採集資料
第94図	自然流路出土遺物(24)		
第95図	自然流路出土遺物(25)		
第96図	自然流路出土遺物(26)		
第97図	包含層出土遺物(1) A・B地区		
第98図	包含層出土遺物(2) C地区①		

## 図版目次

- 巻頭図版一 a 滑瀬遺跡遠景（南から） b 独立丘陵検出遺構（北から）
- 巻頭図版二 a 平野部検出遺構（南から） b 独立丘陵斜面部竪穴住居址（北から）
- 巻頭図版三 a 8号住居址炉址（炉堤） b 磨製石器
- 図版一 a 独立丘陵検出遺構（北から） b 平野部検出遺構（北から）
- 図版二 a 独立丘陵山頂部検出遺構（西から） b 独立丘陵斜面部検出遺構（北西から）
- 図版三 a 1号住居址（南から） b 1号住居址拡張前（西から）
- 図版四 a 1号住居址壁溝（東から） b 1号住居址炉址（西から）
- 図版五 a 2号住居址（西から） b 2号住居址遺物出土状態（北西から）
- 図版六 a 3号住居址（東から） b 3号住居址（南から）
- 図版七 a 3号住居址炉址（北から） b 3号住居址遺物出土状態（西から）
- 図版八 a 4号住居址（東から） b 4号住居址（南から）
- 図版九 a 5号住居址（南から） b 5号住居址（西から）
- 図版十 a 5号住居址炉址（西から） b 5号住居址遺物出土状態（南から）
- 図版十一 a 6号住居址（南から） b 6号住居址（西から）
- 図版十二 a 6号住居址炉址（東から） b 6号住居址土層断面（西から）
- 図版十三 a 7号住居址（南から） b 7号住居址（西から）
- 図版十四 a 7号住居址土層断面（西から） b 8号住居址（東から）
- 図版十五 a 8号住居址（北から） b 8号住居址・溝12（南から）
- 図版十六 a 8号住居址埋土堆積状況（南から） b 8号住居址炉址（東から）
- 図版十七 a 9・13号住居址（北から） b 9・13号住居址（南から）
- 図版十八 a 9・13号住居址埋土堆積状況（南から） b 9・13号住居址炉址（北から）
- 図版十九 a 10号住居址・テラス状遺構（北から） b 11号住居址（東から）
- 図版二十 a 11号住居址（北から） b 12号住居址・テラス状遺構（北から）  
c 12号住居址・テラス状遺構出土遺物（南から）
- 図版二十一 a 14号住居址（北から） b 14号住居址（西から）
- 図版二十二 a 14・15号住居址・テラス土層断面（南から） b 14・15号住居址炉址

断面（東から）

- 図版二十三 a 14・15号住居址炉址（東から） b 掘立柱建物跡1（北から）
- 図版二十四 a 掘立柱建物跡2（西から） b 掘立柱建物跡3・4（西から）
- 図版二十五 a 掘立柱建物跡5（西から） b 溝1 86年度検出（西から）  
85年度検出（南から）
- 図版二十六 a 溝2・3（南から） b 溝4（西から） c 溝5（西から）
- 図版二十七 a 溝6（南から） b 溝7・8（北から） c 溝9・10（北から）
- 図版二十八 a B地区土壌群（南から） b 自然流路（北から）
- 図版二十九 a 自然流路（南から） b 自然流路遺物出土状態（西から）
- 図版三十 a 平安時代 溝1（南から） b 平安時代 溝1土層断面（南から）
- 図版三十一 a 平安時代 溝2（北から） b 平安時代 溝2土層断面（南から）
- 図版三十二 a 中世柱列（東から） b 石組遺構（東から）
- 図版三十三 a 堀状遺構（北から） b 堀状遺構土層断面（北から）
- 図版三十四 a 鋤溝（東から） b 進入路の調査（北から）
- 図版三十五 土器(1) a 1・2・3・4号住居址出土遺物 b 5・6・10・13号住居  
址出土遺物
- 図版三十六 土器(2) a 8号住居址出土遺物 b 9号住居址出土遺物(1)
- 図版三十七 土器(3) a 9号住居址出土遺物(2) b 9号住居址出土遺物(3)
- 図版三十八 土器(4) a 12号住居址テラス出土遺物(1) b 12号住居址テラス出土遺物(2)
- 図版三十九 土器(5) a 14号住居址出土遺物(1) b 14号住居址出土遺物(2) c 14号  
住居址テラス出土遺物(1)
- 図版四十 土器(6) a 14号住居址テラス出土遺物(2) b 溝5出土遺物
- 図版四十一 土器(7) 自然流路出土遺物(1)
- 図版四十二 土器(8) 自然流路出土遺物(2)
- 図版四十三 土器(9) a 自然流路出土遺物(3) b 自然流路出土遺物(4)
- 図版四十四 土器(10) a 自然流路出土遺物(5) b 自然流路出土遺物(6)
- 図版四十五 土器(11) a 自然流路出土遺物(7) b 自然流路出土遺物(8)
- 図版四十六 土器(12) a 自然流路出土遺物(9) b 自然流路出土遺物(10)
- 図版四十七 土器(13) a 自然流路出土遺物(11) b 自然流路出土遺物(12)
- 図版四十八 土器(14) a 自然流路出土遺物(13) b 自然流路出土遺物(14)

- 図版四十九 土器(15) a 自然流路出土遺物(15) b 自然流路出土遺物(16)
- 図版五十 土器(16) a 自然流路出土遺物(17) b 自然流路出土遺物(18)
- 図版五十一 石器(1) 1：1号住居址，2・3：5号住居址，4・5：7号住居址，6・7：9号住居址
- 図版五十二 石器(2) 1：12号住居址，2～9：14号住居址
- 図版五十三 石器(3) 1：14号住居址，2：15号住居址，3：溝5，4：ピット，5：土壙1
- 図版五十四 石器(4) 自然流路
- 図版五十五 石器(5) 自然流路
- 図版五十六 a 弥生時代包含層出土遺物(1) b 弥生時代包含層出土遺物(2)
- 図版五十七 石器(6) 弥生時代包含層
- 図版五十八 土器(17) 溝1・溝2
- 図版五十九 土器(18) a 平安時代包含層出土遺物 b 中世包含層出土遺物(1)
- 図版六十 a 中世包含層出土遺物(2) b 中世包含層出土遺物(3)
- 図版六十一 石器(7) 1：弥生時代包含層，2～9：中世包含層
- 図版六十二 石器(8) 使用痕 1～6：砥石，7：石庖丁，8・9：叩石，10：台石

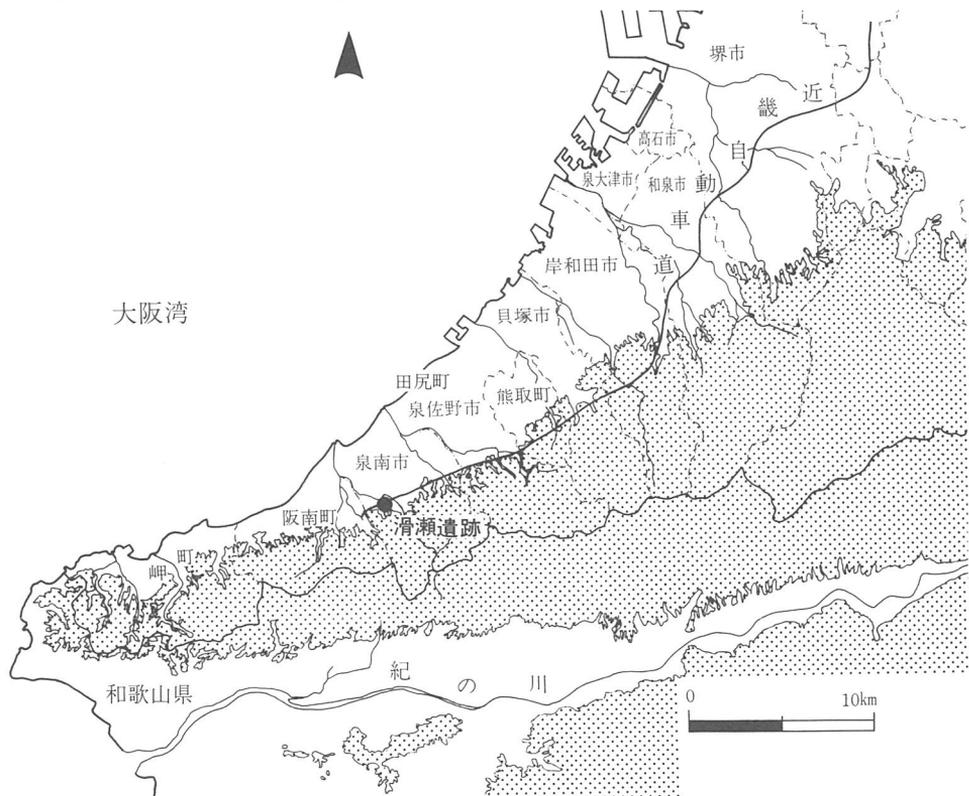
# 第1章 調査の経過

## 第1節 調査に至る経過

滑瀬遺跡は泉南市信達六尾なめんじよ しんだちむつおに所在し、奈良時代を中心とした複合遺跡として周知されていたところである。

発掘調査は、関西国際空港建設に伴う各種公共事業の一つである近畿自動車道と和歌山線建設に先立って行われた。

遺跡は金熊寺左岸きんゆうじの独立丘陵を中心として立地している。しかしこれまでに調査されたことがなく全容が明らかでなかったため、1985年6月～7月にかけて路線予定地内の平野部に限り試掘調査を実施した。その結果、弥生時代を中心とした遺跡であることが判明し、これを受けて9月～1986年1月に本調査を行った。さらに2月には丘陵部の試掘調査を行い、丘陵上にも遺構が存在することが確認されたため1986年6月～9月にかけて独立丘陵部の調査を実施した次第である。



第1図 滑瀬遺跡位置図

## 第2節 既往の調査

試掘調査は、近畿自動車道と歌山線建設予定地内を、第1次として1985年6月～7月にかけて平野部を、第2次として翌年2月に独立丘陵をそれぞれ行った。

以下概略を記すと、第1次では水路を挟み両側に幅2mのトレンチを計6本設定した。

東側トレンチでは、床土を除去するとすぐ地山となるが、一部弥生時代の遺物包含層と掘立柱建物跡と思われる規則性のある柱列と南北に延びる溝状遺構を検出。

西側トレンチでは、東側の状況とは対象的で堆積が厚く、現表土から約1.6m下で弥生時代の溝状遺構を検出し、さらにその上層では平安時代の遺物包含層と溝状遺構、中世の遺物包含層を検出した。

第2次では基本的に丘陵のほぼ中央部を第1次トレンチを延長させ、かつ縦断する恰好で設定した。

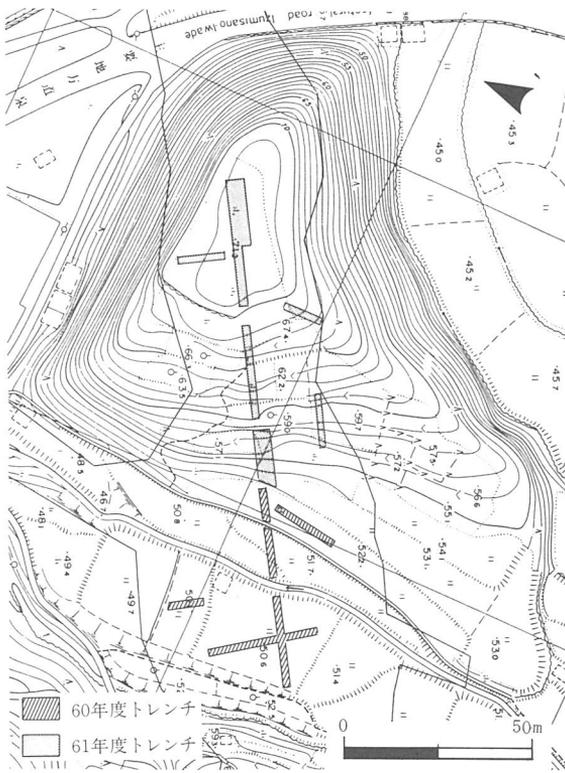
その結果、山頂部では住居址と考えられる円形の落ち込みと柱穴跡、山頂部から斜面部への傾斜変換点で、堀状遺構を検出した。斜面部では溝状遺構と柱穴跡を検出した。山頂

部は腐植土を除去するとすぐに地山となり、斜面部では40～100cm程の土砂が堆積していた。遺物は山頂部では若干の弥生土器と中世土器を検出し、斜面部では弥生土器が多く出土している。特に丘陵裾部において顕著であった。

この試掘結果を持って昭和60年8月～翌年2月にかけて平野部の本調査を実施し、昭和61年7月～9月にかけて丘陵部の本調査を実施したもので、本調査では予想以上の成果をあげることができた。

### 引用文献

『財団法人大阪府埋蔵文化財協会ニュース第1号』1985年 大阪府埋蔵文化財協会



第2図 調査地区

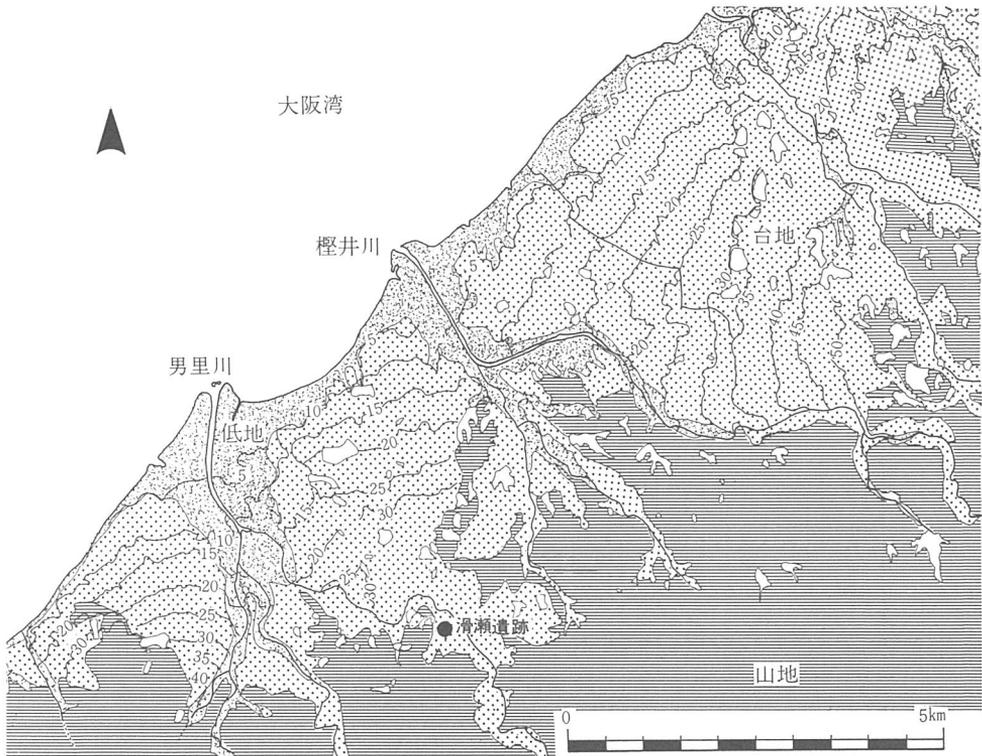
## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

泉南地方は西を大阪湾、東を和泉山脈に挟まれ平野部は少なく、和泉山脈より派生する丘陵部、段丘部が大半を占める。

段丘部は、高位段丘・中位段丘・低位段丘の三つに分類されるが、その境は明瞭でない。丘陵部・高位段丘は、ゴルフ場・新興住宅地に利用されている。中位段丘には樽井の市街地を乗せるものがある。段丘部で最も発達しているのは低位段丘であり、段丘部の大半を占め、田畑・集落として利用されている。

河川は北に榎井川、南に男里川が和泉山脈の水源を受け止め泉南市域を区切って流れる。両河川とも上流の丘陵部、高位段丘部を激しく侵蝕しており、樹枝状に入り組んだ谷地形を呈する。下流域では氾濫原がよく発達しており、弥生時代以降生活空間として利用されている。<sup>(1)</sup>



第3図 周辺の地形

海岸線は侵蝕のため男里川・榎井川等の流れ込みにより三角洲が発達している。

土壌は、丘陵部は残積性未熟土、段丘部は灰色台地土壌・黄色土壌が多くを占める。いずれも養分に乏しく、生産性の低い土壌である<sup>(2)</sup>

気候は、比較的穏やかで雨が少ない瀬戸内式気候の範疇に入るが、大阪府内では雨量の多い部類に属する<sup>(3)</sup> 泉南地方の風向きは年間を通じて南風が多いが、大阪湾・淡路島・紀伊水道・和泉山脈等、起伏に富む地形のため、風向きが一定しないのが特色である<sup>(4)</sup>

人口は、大阪府の中で少ない部類に入る<sup>(5)</sup>

(1) 地理的・歴史的環境は広瀬和雄氏の報告に詳しい。広瀬和雄「遺跡の環境」泉南市教育委員会編『男里遺跡発掘調査報告書』泉南市文化財調査報告書 第二集 1978年

(2) 大阪府農林技術センター編『大阪府土壌図集』 1976年を参照

(3) 大阪府土木部河川課『大阪府の雨量』 第7集 1985年

(4) 大阪府企業局編『南大阪湾岸整備事業の環境影響について』 1974年

(5) 大阪府企画部統計課『大阪府の人口動向 基礎資料編』1982年によると、泉南市の人口は1981年度で54,387人、31市中30番目、人口密度は1980年度で1198.6で31市中30番目、44市町村中37番目、大阪府における人口割合は1981年度で0.6%である。

## 第2節 歴史的環境

泉南地方は、大阪と和歌山を結ぶ要所であり、古くから開けていたと考えられる。以下、遺跡を中心に各時代の概観を述べることにする。

旧石器時代の遺物は、今回の調査で滑瀬遺跡からナイフ形石器が出土している。すでに、旧石器時代の終りには、泉南地方の山麓部は、生活の場となっていたと考えられるが、現状では、その具体的様相を述べることは難しい。

縄文時代に入ると、草創期では玉田山古墳・蓮池遺跡から有茎尖頭器、海宮宮池遺跡より木葉形尖頭器が出土している。前期では、フキアゲ山東遺跡から北白川下層Ia式が出土している。玉田山・寺田山・岩崎山からも石器が出土していることが報告されており、これら出土地が近接する丘陵部に位置するため、一連のものと考えられているが、詳細は明らかでない。以上の縄文時代の遺物は、表面採集、包含層のものであり、草創期から中期にかけて、この地域で遺構は検出されていない。



第4図 周辺遺跡分布図

番号	遺跡名	種類	時代	番号	遺跡名	種類	時代
1	東山	寺跡	中世	74	西国分	跡寺	代
2	散	跡	古墳	75	西国分	跡寺	代
3	ノ倉根	池	時	76	西国分	跡寺	代
4	日鏡	塚	時	77	西国分	跡寺	代
5	波羅	密寺	時	78	西国分	跡寺	代
6	根野	池	時	79	西国分	跡寺	代
7	根野	池	時	80	西国分	跡寺	代
8	根野	池	時	81	西国分	跡寺	代
9	根野	池	時	82	西国分	跡寺	代
10	根野	池	時	83	西国分	跡寺	代
11	根野	池	時	84	西国分	跡寺	代
12	根野	池	時	85	西国分	跡寺	代
13	根野	池	時	86	西国分	跡寺	代
14	根野	池	時	87	西国分	跡寺	代
15	根野	池	時	88	西国分	跡寺	代
16	根野	池	時	89	西国分	跡寺	代
17	根野	池	時	90	西国分	跡寺	代
18	根野	池	時	91	西国分	跡寺	代
19	根野	池	時	92	西国分	跡寺	代
20	根野	池	時	93	西国分	跡寺	代
21	根野	池	時	94	西国分	跡寺	代
22	根野	池	時	95	西国分	跡寺	代
23	根野	池	時	96	西国分	跡寺	代
24	根野	池	時	97	西国分	跡寺	代
25	根野	池	時	98	西国分	跡寺	代
26	根野	池	時	99	西国分	跡寺	代
27	根野	池	時	100	西国分	跡寺	代
28	根野	池	時	101	西国分	跡寺	代
29	根野	池	時	102	西国分	跡寺	代
30	根野	池	時	103	西国分	跡寺	代
31	根野	池	時	104	西国分	跡寺	代
32	根野	池	時	105	西国分	跡寺	代
33	根野	池	時	106	西国分	跡寺	代
34	根野	池	時	107	西国分	跡寺	代
35	根野	池	時	108	西国分	跡寺	代
36	根野	池	時	109	西国分	跡寺	代
37	根野	池	時	110	西国分	跡寺	代
38	根野	池	時	111	西国分	跡寺	代
39	根野	池	時	112	西国分	跡寺	代
40	根野	池	時	113	西国分	跡寺	代
41	根野	池	時	114	西国分	跡寺	代
42	根野	池	時	115	西国分	跡寺	代
43	根野	池	時	116	西国分	跡寺	代
44	根野	池	時	117	西国分	跡寺	代
45	根野	池	時	118	西国分	跡寺	代
46	根野	池	時	119	西国分	跡寺	代
47	根野	池	時	120	西国分	跡寺	代
48	根野	池	時	121	西国分	跡寺	代
49	根野	池	時	122	西国分	跡寺	代
50	根野	池	時	123	西国分	跡寺	代
51	根野	池	時	124	西国分	跡寺	代
52	根野	池	時	125	西国分	跡寺	代
53	根野	池	時	126	西国分	跡寺	代
54	根野	池	時	127	西国分	跡寺	代
55	根野	池	時	128	西国分	跡寺	代
56	根野	池	時	129	西国分	跡寺	代
57	根野	池	時	130	西国分	跡寺	代
58	根野	池	時	131	西国分	跡寺	代
59	根野	池	時	132	西国分	跡寺	代
60	根野	池	時	133	西国分	跡寺	代
61	根野	池	時	134	西国分	跡寺	代
62	根野	池	時	135	西国分	跡寺	代
63	根野	池	時	136	西国分	跡寺	代
64	根野	池	時	137	西国分	跡寺	代
65	根野	池	時	138	西国分	跡寺	代
66	根野	池	時	139	西国分	跡寺	代
67	根野	池	時	140	西国分	跡寺	代
68	根野	池	時	141	西国分	跡寺	代
69	根野	池	時	142	西国分	跡寺	代
70	根野	池	時	143	西国分	跡寺	代
71	根野	池	時	144	西国分	跡寺	代
72	根野	池	時	145	西国分	跡寺	代
73	根野	池	時				

第5図 遺跡地名表

縄文時代の後期になり、泉州地方の遺跡数は増加する。泉南地方では、三軒屋遺跡が出現する。

晩期には船岡山遺跡が加わり、三軒屋遺跡と共に、樫井川流域の洪積段丘上に生活空間が存在したことが窺える。

弥生時代に入ると、遺跡数はさらに増加、拡大する。

前期後葉に樫井川の旧河道に面した低位段丘の縁辺に船岡山遺跡が縄文時代から引き続き展開する。三軒屋遺跡では鋤が検出されており、縄文時代に引き続き存続したことがわかる。

中期中葉には、男里川流域の沖積段丘、旧河道の氾濫原上に男里遺跡が出現する。樫井川流域には、旧河道左岸沖積段丘上に道池遺跡、右岸に三軒屋遺跡、夫婦池遺跡が各々、新たに出現、継続して存在する。この内、三軒屋遺跡では、円形プランを呈す竪穴住居址、溝、土器棺、柱穴群等が検出されている。

中期後葉になり、樫井川及び新家川の左岸の丘陵上に新家オドリ山遺跡、向井山遺跡が出現する。新家オドリ山遺跡からは、中期後葉から後期にかけての住居址が10数棟検出されている。向井山遺跡からは、中期後葉の方形周溝墓が確認されている。滑瀬遺跡も、この頃出現したものである。その他、丘陵部に位置する遺跡としてオドリ山東遺跡、オドリ山南遺跡等オドリ山遺跡群、孤池遺跡がある。

後期に入ると遺跡が衰退するが、船岡山遺跡、船岡山南遺跡、夫婦池遺跡、男里遺跡が、前代と同様旧河道に面した沖積段丘に存在する。

以上のことから、弥生時代前期には船岡山遺跡を中心に、樫井川旧河道、低位段丘部が開発される。中期中葉になると、男里川流域も開発が始まる。中期後葉になり、遺跡数は増加するが、旧河道の氾濫原、低位段丘部に立地するものと丘陵上に立地するものに分かれる。後期に入ると、丘陵上の遺跡は消滅し、低地のものが残ることがわかる。

古墳時代の集落立地も弥生時代からの生活を踏襲し、沖積段丘の縁辺を利用して灌漑した様であるが詳細は不明である。その他、松原遺跡、羽倉崎遺跡等、海浜部に遺跡が認められており漁業と深くかかわったことと思われる。

当地域には前期古墳は存在しない。

古墳群は、樫井川左岸の丘陵上にフキアゲ山東古墳群、新家古墳群、兎田古墳群が存在し、男里川左岸の丘陵上に、高田山古墳群、玉田山古墳群が分布する。フキアゲ山東古墳群は、当地で現在確認されている一番古い古墳群で、5世紀末葉に出現する。新家古墳群

は小円墳4基が存在し、いずれも河原石積の竪穴式石室、横穴式石室を埋葬施設にしている。鉄釘の出土により、木棺の使用が推定されている。兎田古墳群は7基の小円墳で群集墳を構成する。高田山古墳群は4基からなるが現在は消滅している。玉田山古墳群は、2基からなる古墳群で、1号墳からは金環・銀環が出土している。しかしながら当地には大規模な古墳は存在せず、その政治的基盤は弱かったと考えられる。

白鳳期には、海会寺・禅興寺が建立される。海会寺は、樫井川左岸の洪積段丘中位面に立地し、この時期の集落を伴って出現する。法隆寺式の伽藍配置をとり、山田寺式、川原寺式の軒丸瓦が出土している。禅興寺は、樫井川右岸の船岡山遺跡や三軒屋遺跡が存在する比較的早くから開けた地域に出現する。海会寺が遺跡の分布密度の低い所に突然集落と共に現れるのに対し、禅興寺は比較的遺跡の分布密度の高い地域に出現し、在地勢力の元で建立されたと考えられるであろうことは真に興味深い。

平安時代後期に、光平寺、林昌寺、仏性寺、檀波羅密寺等が次々と建立される。

寺院に比べ確認されている平安時代の集落址は数が少ないが、北野遺跡、湊遺跡の存在が確認されている。

中世の遺跡は、鎌倉時代の掘立柱建物が男里遺跡で検出されている以外実態が明らかになっていない。

平安時代末期から戦国時代にかけて、当地に兎田荘、新家荘、信達荘があった。滑瀬周辺の信達荘は、平安末期摂関家領であったが、鎌倉時代に入り近衛家の支配下となった。南北朝以後根来寺大伝法院領となり、豊臣秀吉により根来寺が焼き打ちされるまで存続すると考えられる。

滑瀬遺跡沿道の根来街道は、秀吉が根来寺を攻め昇った道で、林昌寺・金熊寺のみならず、周辺の集落も戦火を被っている。

近世に入り当地は木綿・甘蔗などの換金作物の栽培が栄えとなり、以後、紡織加工産業の一翼を担う様になる。

以上、手短かに泉南地域の遺跡を中心とした動向を概観した。泉南の遺跡は不明な点が多く課題は多い。

本稿作成にあたり下記の文献を参照した。

大阪府史編集専門委員会編『大阪府史』第1巻 1978年

大阪府史編集専門委員会編『大阪府史』第3巻 1979年

泉南市史編纂委員会編『泉南市史』史料編 1982年

阪南町史編纂委員会編『阪南町史』上 阪南町役場 1977年

泉南市教育委員会編『男里遺跡調査報告書』泉南市文化財調査報告書 第二集 1978年

泉南市教育委員会編『男里遺跡発掘調査報告書』II 泉南市文化財調査報告書 第三集  
1982年

泉南市教育委員会編『男里遺跡発掘調査報告書』III 泉南市文化財調査報告書 第四集  
1982年

泉南市教育委員会編『泉南市向井山遺跡発掘調査報告書』 1972年

泉佐野市教育委員会編『三軒屋遺跡』 1972年

泉佐野市教育委員会編『三軒屋遺跡－昭和54年度の調査－』 1980年

泉佐野市教育委員会編『三軒屋遺跡－82－1区の調査』泉佐野市埋蔵文化財発掘調査報  
告II 1982年

泉佐野市教育委員会編『船岡山遺跡B地点発掘調査報告書－84－3区の調査』 泉佐野  
市埋蔵文化財発掘調査報告V 1985年

阪南町教育委員会編『玉田山遺跡発掘調査報告書－大阪府泉南郡阪南町自然田所在』  
阪南町埋蔵文化財発掘調査報告I 1982年

角川日本地名大辞典編纂委員会編『角川日本地名大辞典』27 大阪府 角川書店  
1983年

### 第3章 調査の方法

調査は、試掘2回、本調査2回に分けて行われた。

調査の地区割りは、新平面直角座標の第VI座標系を使用し、遺跡の位置を表示した。

地区割りの呼称は、新版2,500分の1の大阪府都市計画地形図（以下、都市計画地形図と略称する）の横軸-X軸、縦軸-Y軸（縦軸は座標北を示す）を使用し、都市計画地形図を12等分している500×500mの区画をA～Lで呼称し（第6図①）、この500m区画を25等分して100×100mの区画を作成し、01～25までの数字で示す（第6図②）。この100mの区画を更に縦横25分割、625等分し、4×4mの区画を作り（第6図③）、縦方向（X軸）を先に、横方向（Y軸）を後にして、行列を大文字のアルファベットで呼称・表記する（例）。5桁の記号で示す。今回の調査対象地は、都市計画地形図の大B-2-8に当たる。

X、Y座標軸設定の割付作業は、測量会社に委託し、3級基準点を基に設定した。

尚、調査地が3地区に分割されたことと、地形の変化を考慮し、上記の地区呼称の他、A-1～A-6、B-1～B-3、Cと、大きく10地区に区分した（第6図）。

掘削方法は、バックホーによる表土の機械掘削を行い、床土以下は人力掘削によった。

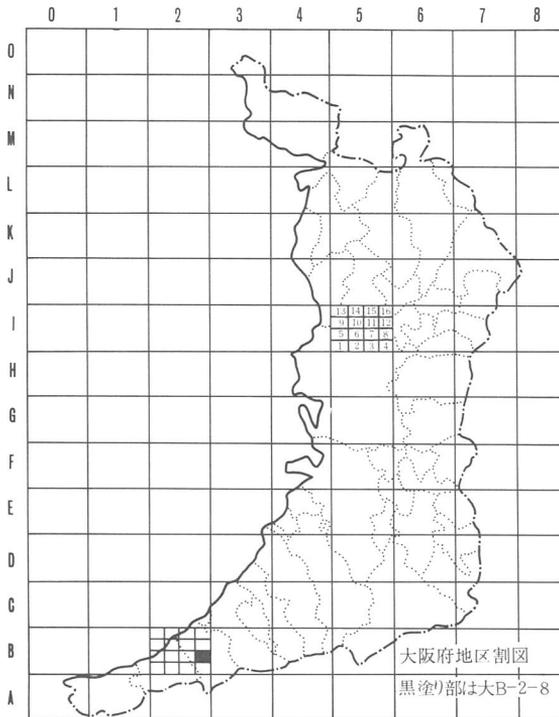
調査は、表土除去の後、各層の上面で遺構検出を行った。一部、地山確認の断ち割りを行った。遺構には、随時土層観察用の畦を設定した。

平面図の実測は、4×4mの方区画の地区割りの交点杭から位置関係、方位の決定を行い、縮尺は1/20を基調とした。尚、最終遺構面において、航空写真測量を行い（合計4回）1/20、1/100の全体図を作成した。

土層断面図の実測は、平面図と対応させるべく1/20を基調とした。水準の表記は、T.P.を使用した。土層の色調は『新版標準土色帖』により、土質は粒径区分によった。

写真撮影は、35mm一眼レフ小型カメラ、6×7cm中型カメラ、4×5インチ大型カメラを併用して撮影した。フィルムは、カラーズライド、モノクロームを使用した。又、5段2連、8段2連の足場を設置し、撮影の補助とした。航空測量用フィルムを使用し、モザイク写真のパネルを作成した。航空測量に乗じて上空から斜め写真を撮影した。

遺物は、地区（4m方区画）・層位・取り上げた日ごとに分類し、洗浄した後、以上のことを注記した。接合、復元を行った後、代表的な遺物を選別し、実測、写真撮影を行い本報告書に掲載した。



500mの区画

<b>A</b>	<b>B</b>	<b>C</b>	<b>D</b>
<b>E</b>	<b>F</b>	<b>G</b>	<b>H</b>
<b>I</b>	<b>J</b>	<b>K</b>	<b>L</b>

①

100mの区画

01	02	03	04	05
06	07	08	09	10
11	12	13	14	15
16	17	18	19	20
21	22	23	24	25

②

(例)大B-2-8 A 19 GM

地形図の標題 500m 100m 4m



③

第6図 地区割図

## 第4章 調査の成果

### 第1節 層 序

滑瀬遺跡は和泉山脈から派生した丘陵地帯に存在している。特に、遺跡中心部は独立丘陵頂部から斜面、谷筋部分に展開しているため、崩落堆積、谷筋の自然埋没、後世の整地と、複雑な堆積過程を経ている。また、現況においても調査区中央に北流する水路が存在し、調査区全体の基本的な層序を述べることはむずかしい。従って、谷筋、斜面、丘陵頂部に分け、それぞれについて説明する。記述は調査の進行に合わせ、上位から行う。

谷は南から北にのびており、調査開始時点では段状の畑地として利用されており、標高は南端でT.P. 52.4m、北端でT.P. 49.7mを測る。表土は耕作土と床土よりなり、厚さ0.2～0.25mを測る。耕作土をI層、床土をII層とする。

III層は、10Y 7 / 1～10Y 8 / 1（灰白）の砂礫をわずかに含むシルト層で、各段それぞれに堆積している。Fe斑、Mn斑が観察でき、水平堆積であることから水田であったと考えられる。層厚は南部では0.3mほどで単層であるが、北部では0.5mで、鉄分の集積状況により3層に分層した。

IV層は、10Y 6 / 1（灰）～5 B 6 / 1（青灰）～5 B G 6 / 1（青灰）を呈する砂礫混じりシルト層で、III層と同様に、基本的に各段に水平に堆積する。層厚0.3～0.4mで、均質な層相と考えられるが、Fe線状痕、Mn斑の状況により分層が可能である。砂礫は主に上位に含まれているが、これは耕起によるものと判断でき、還元層、Fe、Mnの存在等から水田層であることは確実である。

V層は、N 5 / 0～N 6 / 0（灰）を呈する粗砂・砂礫混じりシルトで、層厚0.2～0.4mを測る。南端の上面でT.P. 51.5m、北端上面でT.P. 49.8mと、谷口に向かい緩やかに傾斜している。耕作に伴う段状の削平により部分的に削られているが、基本的に谷中央全域に堆積する層である。基盤層（地山）の小ブロック、炭片を含んでいる。

VI層は南端には存在せず、途中から北端に至るまで堆積している。南端部はV層によって削平されているものと考えられる。色調は5 B 5 / 1（青灰）～5 B 7 / 1（明青灰）を呈する粗砂・砂礫混じりシルト～粘質微砂層であるが、下位のFeの集積層、中位の細砂・砂礫のラミナを挟む層、上位の粘質微砂層と、大きく3層に大別できる。層厚 0.1～0.3 m、南から北にわずかに傾斜を持つ。

中位のラミナを含む層の上面には、人と牛の足跡が見られる。

VII層としたものは、5 B 5 / 1 ~ 5 B 6 / 1 (青灰) の粗砂・砂礫・小亜角礫を多量に含むシルト層であるが、南端部は一部下位の N 5 / 0 (灰) の小礫を多量に含む粘質シルトをも含めてVII層としている。北端には存在していない。層厚 0.2 ~ 0.4m を測り、北に緩やかに傾斜している。

VIII層も砂礫を多量に含むシルト層で、一部完全な砂礫層となる。10 B G 5 / 1 (青灰) であるが、鉄分の集積により赤褐色を呈している。層厚は 0.1 ~ 0.2m ほどで、調査区中央部分にのみ堆積していた。

IX層~XIV層は、弥生時代自然流路内の堆積層である。

IX層は 5 B 6 / 1 (青灰) を呈する、砂礫を含む粘質シルト層で、部分的に N 2 / 0 (黒) を呈する。調査区南半にのみ堆積する。

X層は10 B G 4 / 1 (青灰) 粗砂・砂礫混粘質シルトで、IX層と同様、南半の一部に堆積している。層厚は約 0.2m である。

XI層は南半の地山直上に堆積しているもので、5 B 7 / 1 (明青灰) を呈する粗砂・砂礫を多量に含むシルト層で、層厚 0.1 ~ 0.4 m を測る。炭片、弥生土器を多量に包含している。XI層はXIV層によって削られており、北半はXIV層が地山直上に堆積している。

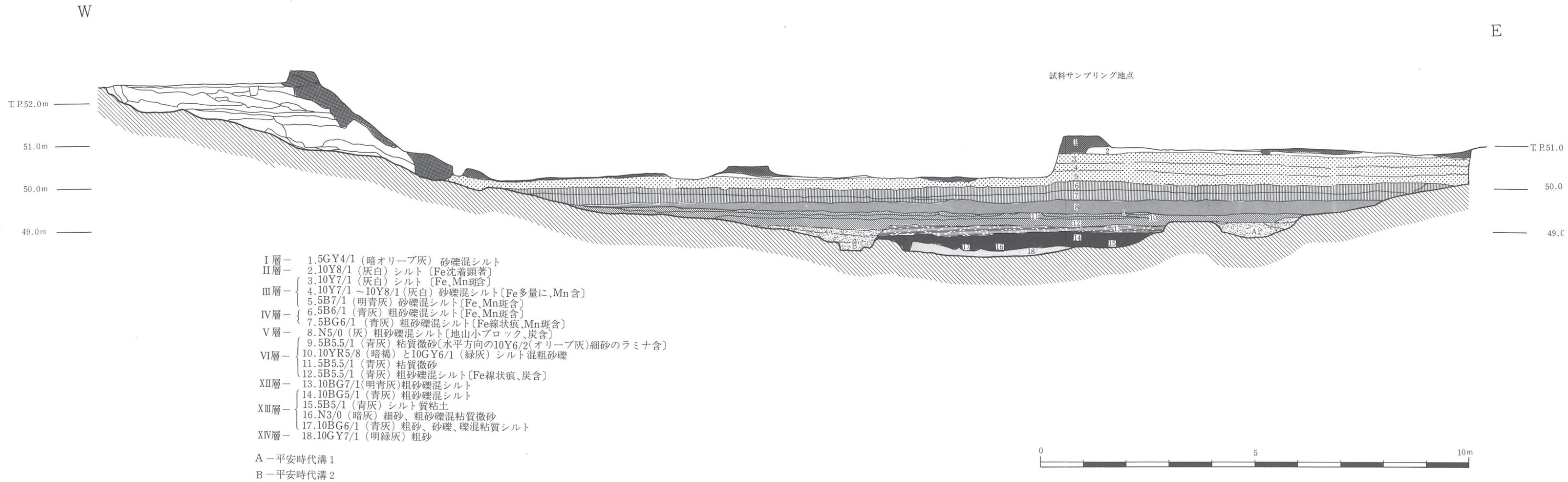
XII層は10 B G 7 / 1 (明青灰) 粗砂・砂礫混シルトで、地山層の小ブロック土を含む。

XIII層は10 B G 2 / 1 (青黒) ~ 10 B G 5 / 1 (青灰) 粗砂・砂礫混粘質微砂~シルト~粘質シルト層で、弥生土器、石器を多量に包含している。層厚は 0.2 ~ 0.4m を測る。

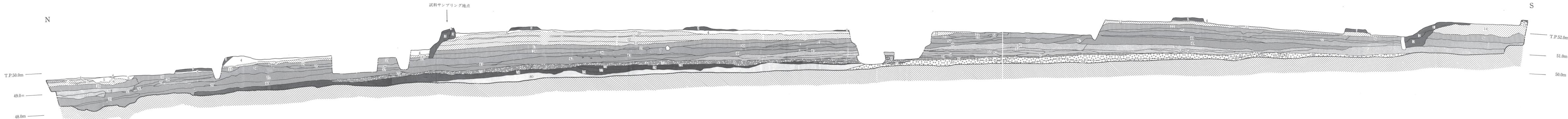
XIV層は 5 B 6 / 1 (青灰) 砂礫混シルト質粘土で、北端部では極めて薄くなり、砂礫層となっている。層厚は 0.1 ~ 0.4 m ほどである。弥生土器を多量に含んでいる。弥生時代自然流路の河床面(地山面)レベルは南端でT.P.51m、北端でT.P.48.4mを測る。

以上、谷筋部分の基本的な層序について記したが、埋没過程を復元的にまとめると次のことが考えられる。

谷が開析され、東側丘陵の先端部が独立丘陵となったのは地質時代にさかのぼると考えられるが、ここで問題となるのは、谷の最深部にあたる弥生時代河川の最下層が遺物包含層となり、直下に地山面が露呈することである。当然、それ以前の堆積を想定しなければならず、地山直上のXI層、XIV層も過去の堆積を削り取るだけの流勢は考えられない。人為的な地業についても考慮せねばならない。自然河川の堆積はIX層までで、それを切るようにVIII層の砂礫層が堆積する。この段階で流路は埋没し、谷部分全域が不整合面となっている。

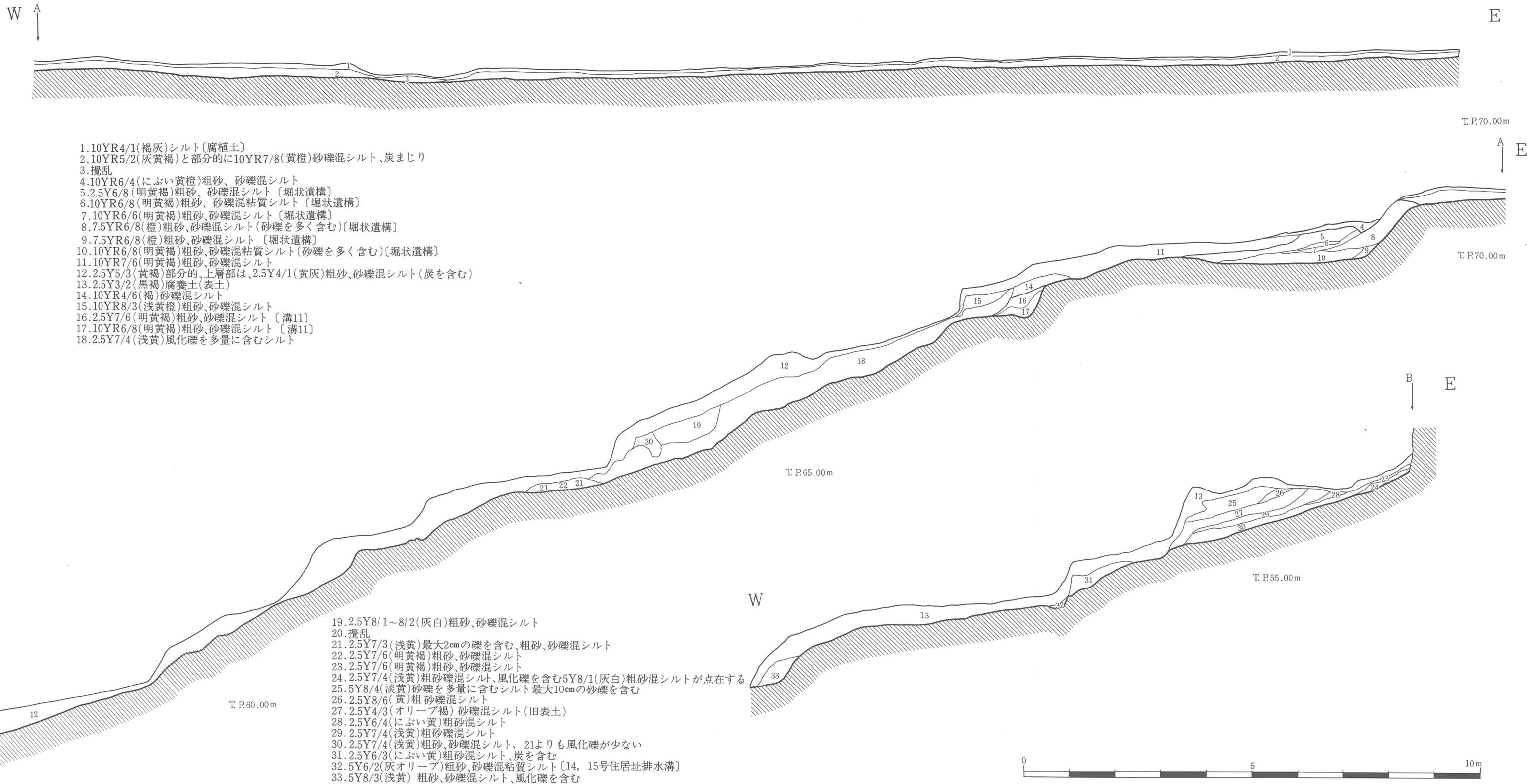


第7図 B地区(谷)東西方向断面図(1/80)



- |  |  |  |   |   |  |
|--|--|--|---|---|--|
| <p>I層— 1.5GY4/1(暗オリーブ灰)とN4/0(灰)～N7/0(灰)砂礫混シルト<br/>2.25Y7/4(浅黄)と5B8/1(明青灰)礫(5mm大)混シルト〔Fe含〕<br/>3.10Y8/1(灰白)とN7/0(灰白)砂礫混シルト〔Fe多量に含〕</p> <p>II層— 4.25Y8/1(灰白)と10Y8/1(灰白)シルト〔Fe多量に、Mn含〕<br/>5.25Y7/1(灰白)砂礫混砂質土〔Fe含〕<br/>6.5Y8/1(灰白)粘質土〔Fe,Mn含〕<br/>7.5Y8/3(淡黄)シルト〔Fe含〕<br/>8.5Y7/1(灰白)シルト〔Fe含〕<br/>9.25Y8/1(灰白)粘質土〔4よりFe多量、Mn少量含〕</p> <p>III層— 10.10Y7/1(灰白)砂礫混シルト〔Fe,Mn混含〕<br/>11.10Y7/1(灰白)砂礫混シルト〔Fe少量含〕<br/>12.10Y7/1 10Y8/1(灰白)砂礫混シルト〔Fe多量、Mn含〕<br/>13.5B7/1(明青灰)砂礫混シルト〔Fe,Mn混含〕<br/>14.10Y8/1(灰白)粗砂、礫(5cm大)混シルト〔Fe,地山ブロック含〕</p> | <p>15.10YR7/1(灰白)と5Y7/1(灰白)礫混シルト〔Fe、炭少量含〕<br/>16.5Y7/2(灰白)シルト〔Fe含〕<br/>17.5BG6/1(青灰)と10Y8/1(灰白)粗砂、礫混シルト〔Fe,Mn混多量に含〕<br/>18.5BG6/1(青灰)粗砂、礫混シルト〔Fe線状痕、Mn混含〕<br/>19.5BG6/1(青灰)粗砂、礫混シルト〔Fe線状痕、Mn混含〕<br/>20.5BG7/1(明青灰)とN7/0(灰白)粗砂、礫混シルト〔Fe線状痕、炭含〕<br/>21.5BG7/1(明青灰)粗砂混シルト〔Fe線状痕、地山小ブロック、炭含〕<br/>22.5B7/1～5B8/1(明青灰)粗砂、礫混シルト〔Fe、Mn多量に含〕</p> <p>IV層— 23.記入なし<br/>24.10Y8/1(灰白)粗砂、礫混シルト〔Mn含〕<br/>25.5B7/1(明青灰)粗砂、礫混シルト〔Fe,Mn多量に含〕<br/>26.5B8/1(明青灰)と10Y6/1(灰)粗砂、礫(7cm大の亜角礫)混シルト〔Fe,Mn含〕<br/>27.10Y6/1(灰)粗砂、礫(7cm大の亜角礫)混シルト〔Fe含〕<br/>28.5Y6/1(灰)シルト〔Fe、炭少量含〕<br/>29.5Y6/1(灰)シルト〔28よりFe多量に含〕</p> | <p>30.25Y5/1(黄灰)シルト〔Fe含〕<br/>31.5Y6/1(灰)礫混砂質土〔Fe含〕<br/>32.5Y5/1(灰)礫混砂質土〔Fe含〕<br/>33.5Y5/1(灰)礫混砂質土</p> <p>V層— 34.N5/0(灰)～N7/0(灰)砂礫混シルト〔Fe,炭少量、地山小ブロック少量含〕<br/>35.5Y6/1(灰)シルト<br/>36.N5/0(灰)と5BG6/1(青灰)粗砂礫混シルト〔砂礫少量含、地山小ブロック、炭含〕<br/>37.75Y3/2(オリーブ黒)砂質土<br/>38.10Y5/1(灰砂質土)<br/>39.75Y7/1(灰)シルト<br/>40.5B5.5/1(青灰)粗砂、礫混シルト〔Fe線状痕、炭含〕<br/>41.5B5.5/1(青灰)粘質微砂〔水平方向の10Y6/2(オリーブ灰)細砂のラミナ含〕<br/>42.N6/0(灰)粗砂粘質シルト〔地山小ブロック含〕<br/>43.10BG7/1(明青灰)細砂粘質シルト〔Fe線状痕、炭含〕<br/>44.5B5/1(青灰)粗砂粘質シルト〔地山小ブロック含〕<br/>45.10GY7/1(明青灰)粗砂、礫粘質シルト〔砂礫多量に含〕<br/>46.5B7/1(明青灰)粗砂、礫混シルト〔Fe,Mn多量に含、地山小ブロックを少量〕<br/>47.10BG7/1(明青灰)粗砂、礫混シルト〔Fe,Mn混含〕<br/>48.N5.5/0(灰)砂礫粘質シルト〔Fe、Mn含〕<br/>49.5B6/1(青灰)粗砂粘質シルト〔Fe線状痕有〕</p> | <p>50.5P5/1(紫灰)と10BG6/1(青灰)粗砂礫混シルト質粘土〔Fe,Mn,3cm大の礫、地山小ブロック含〕<br/>51.10BG5/1(青灰)と5P5/1(紫灰)粗砂礫粘質シルト〔粗砂、亜角礫、角礫多量に含〕<br/>52.N6/0(灰)粗砂、礫粘質シルト〔粗砂、亜角礫を部分的に多量に含〕<br/>53.N5/0(灰)粗砂、礫粘質シルト〔亜角礫多量に含〕<br/>54.N5/0(灰)礫混シルト質粘土〔3～5cmの亜角礫、地山小ブロック少量含〕<br/>55.75YR6/8(橙)粗砂、礫混シルト〔砂礫多量に含〕<br/>56.10BG6/1(青灰)砂礫混シルト<br/>57.10YR7/8(黄橙)砂礫混シルト<br/>58.10YR7/8(黄橙)砂礫混シルト<br/>59.5BG6/1(青灰)砂礫粘質シルト<br/>60.10BG4/1(青灰)粗砂礫粘質シルト</p> <p>VII層—<br/>VIII層—<br/>IX層—<br/>X層—</p> | <p>61.5GY3/1(オリーブ灰)粗砂、礫混シルト<br/>62.25Y6/4(にぶい黄)粗砂、礫混シルト〔砂礫多量に含〕<br/>63.5B7/1(明青灰)粗砂、礫混シルト〔砂礫多量に含、炭含〕<br/>64.5B7/1(明青灰)粗砂、礫混シルト<br/>65.5B7/1(青灰)細砂粘質シルト<br/>66.5GY7/1(明オリーブ灰)粗砂、礫混シルト<br/>67.75GY7/1(明緑灰)粗砂、礫混シルト<br/>68.N7/1(灰白)と2.5Y7/6(明黄褐)粗砂、礫混シルト<br/>69.N7/1(灰白)粗砂、礫混シルト<br/>70.25Y3/6(黄褐)粘質砂質土<br/>71.10BG7/1(明青灰)粗砂、礫混シルト<br/>72.10BG4/1(明青灰)粗砂、礫粘質シルト〔砂礫多量に含〕</p> <p>XI層—<br/>XII層—</p> | <p>74.10BG5/1(青灰)細砂、粗砂、礫混シルト<br/>75.10BG7/1(明青灰)と5B4.5/1(青灰)粗砂、礫粘質土<br/>76.5B5/1(青灰)粗砂、礫粘質シルト<br/>77.10BG6/1(青灰)粘質微砂<br/>78.25GY8/1(灰白)と7.5GY7/1(明緑灰)と5B4/1(暗青灰)粗砂、礫混シルト質粘土〔砂礫多量に含、炭含〕<br/>79.10BG6/1(青灰)と5B4/1(暗青灰)粗砂、礫混シルト質粘土〔亜角礫含〕<br/>80.10GY7/1(明緑灰)と5B4/1(青灰)粗砂、礫混シルト質粘土</p> <p>XIII層—<br/>XIV層—</p> |
|--|--|--|---|---|--|

第8図 B地区(谷)南北方向断面図(1/80)



1. 10YR4/1(褐灰)シルト〔腐植土〕
2. 10YR5/2(灰黄褐)と部分的に10YR7/8(黄橙)砂礫混シルト、炭まじり
3. 攪乱
4. 10YR6/4(にぶい黄橙)粗砂、砂礫混シルト
5. 2.5Y6/8(明黄褐)粗砂、砂礫混シルト〔堀状遺構〕
6. 10YR6/8(明黄褐)粗砂、砂礫混粘質シルト〔堀状遺構〕
7. 10YR6/6(明黄褐)粗砂、砂礫混シルト〔堀状遺構〕
8. 7.5YR6/8(橙)粗砂、砂礫混シルト(砂礫を多く含む)〔堀状遺構〕
9. 7.5YR6/8(橙)粗砂、砂礫混シルト〔堀状遺構〕
10. 10YR6/8(明黄褐)粗砂、砂礫混粘質シルト(砂礫を多く含む)〔堀状遺構〕
11. 10YR7/6(明黄褐)粗砂、砂礫混シルト
12. 2.5Y5/3(黄褐)部分的、上層部は、2.5Y4/1(黄灰)粗砂、砂礫混シルト(炭を含む)
13. 2.5Y3/2(黒褐)腐養土(表土)
14. 10YR4/6(褐)砂礫混シルト
15. 10YR8/3(浅黄橙)粗砂、砂礫混シルト
16. 2.5Y7/6(明黄褐)粗砂、砂礫混シルト〔溝11〕
17. 10YR6/8(明黄褐)粗砂、砂礫混シルト〔溝11〕
18. 2.5Y7/4(浅黄)風化礫を多量に含むシルト

19. 2.5Y8/1~8/2(灰白)粗砂、砂礫混シルト
20. 攪乱
21. 2.5Y7/3(浅黄)最大2cmの礫を含む、粗砂、砂礫混シルト
22. 2.5Y7/6(明黄褐)粗砂、砂礫混シルト
23. 2.5Y7/6(明黄褐)粗砂、砂礫混シルト
24. 2.5Y7/4(浅黄)粗砂礫混シルト、風化礫を含む5Y8/1(灰白)粗砂混シルトが点在する
25. 5Y8/4(淡黄)砂礫を多量に含むシルト最大10cmの砂礫を含む
26. 2.5Y8/6(黄)粗砂礫混シルト
27. 2.5Y4/3(オリーブ褐)砂礫混シルト(旧表土)
28. 2.5Y6/4(にぶい黄)粗砂混シルト
29. 2.5Y7/4(浅黄)粗砂礫混シルト
30. 2.5Y7/4(浅黄)粗砂、砂礫混シルト、21よりも風化礫が少ない
31. 2.5Y6/3(にぶい黄)粗砂混シルト、炭を含む
32. 5Y6/2(灰オリーブ)粗砂、砂礫混粘質シルト〔14、15号住居址排水溝〕
33. 5Y8/3(浅黄)粗砂、砂礫混シルト、風化礫を含む

第9図 C地区(丘陵)東西方向断面図(1/80)

る。この面から、旧流路の肩部分を利用して平安時代の溝が構築されている。この面も後にはⅦ層の砂礫に覆われており、不安定な時期であったと考えられる。Ⅵ層には先述のように人・牛の足跡が残っており、耕作面であったことが推定できるが、足跡は砂礫によって埋められており、その上位に微砂層があることから、短時期ではあるが冠水状態であったことが推定される。Ⅴ層については遺構もなく土層観察だけでは土地利用は判断できない。Ⅳ層・Ⅲ層は水田層と考えられる。Ⅳ層は中世に比定できるが、現況で見られる段は、この時期から造られたものである。以降、現代に至るまで耕作地として利用されていた。

1号～3号住居址を検出した斜面部分は、大きくⅠ～Ⅲ層に分層できる。

Ⅰ層は耕作土、Ⅱ層は床土、Ⅲ層は斜面からの崩落堆積である。現況は谷に向かって東から西に段築成されており、基本的にはⅡ層直下に弥生時代遺構面が遺存し、部分的にⅢ層の下位になっている。原地形（地山面）は谷中央に向かって比較的ゆるやかに傾斜している。標高は、地山面でT.P. 51.00mである。

斜面裾部から谷全体を見渡すと、緩やかな傾斜であり、弥生時代流路も兩岸の住居を隔絶するようなものではない。

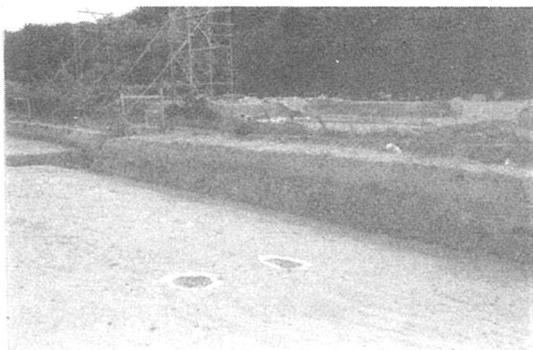
独立丘陵部は調査区東側に位置する。もとは西側の丘陵部とつながっていたと思われるが、開析され独立した。標高は山裾部北端でT.P. 51.00m、山頂部でT.P. 71.20mである。調査以前は権木林で、松・竹・栗・柑橘類の果樹園として利用されていた。

山頂部は開墾による削平を受け、表土が15.0cm程積もるのみである。斜面は頂上からの土が流積し、下に行くほど堆積が厚くなり山裾では最大 1.2mも積もる。堆積状況はトレンチ部を境とし、北側の斜面は表土直下が地山であり、南側の斜面は表土直下に黄褐色系の砂質シルトが堆積する。

その堆積状況も山頂部からの崩れ、開墾により斜面を切り込みテラスを築成されたため、不整合な堆積を示す。

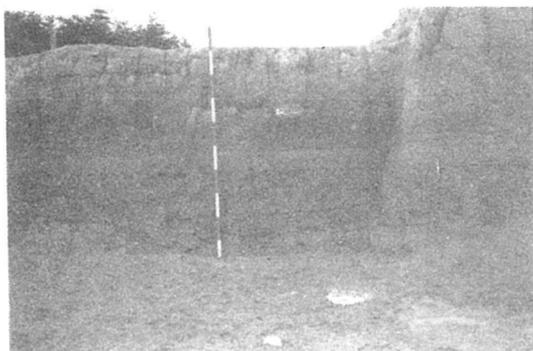
斜面裾部はシルトの色調が淡黄色系に変わる。

地山も各地点で異なり、上方では赤褐色系の礫混シルトか風化礫、中位・下位はシルト質であった。



第10図 A-2地区南北断面

A-2地区中央付近から南北方向を望む。遺構面は弥生時代遺構面で、写っている柱穴は掘立柱建物跡3。



第11図 B地区東西断面

B地区の谷中央部(最深部)のII層以下の写真。下位から約60cmが、弥生時代の自然流路にあたる。



第12図 C地区8トレンチ東西断面

C地区、試掘調査時の8トレンチの北側断面。独立丘陵上位から、谷部を望む。

## 第2節 弥生時代

**概要** 遺跡は通称「ナメクジ山」と呼称されている金熊寺川左岸に位置する独立丘陵を中心とした西側平野部を含めた一帯である。今後の調査によっては、さらに居住域が広がる可能性は十分に考えられる。

昨年来の発掘調査では、実態が不明であった当遺跡が、弥生時代中期末～後期初頭にかけての集落遺跡であることが判明した。主な遺構としては竪穴住居址、掘立柱建物跡、溝、土壇や同時期の自然流路等が検出されている。

以下、遺構・遺物について記述する。

### 1号住居址（第13～18図、図版3・4・35・52）

調査区A-2地区北端部、独立丘陵緩斜面裾部に位置する。後世の削平を受け壁体はすでに無いが、炉、柱穴が検出されたこと、炉の周り半径3.0m強で溝が廻ることから住居址と判断した。直径7.4mの円形の平面プランを持つと考える。

床面は表土直下に検出された面と、その5cm下に検出された面の2面検出したが、半分以上が削平されている。床質は下面が軟らかいシルト質の地山で上面は床を張り、床土に焼土、炭を多く含む。床のレベルは等高線にそって南西方向へ傾く。

壁溝と思われる溝が20～30cm、深さ5～15cmで廻り、山側が一部切れる。この溝の内側に幅2.0mの溝が下面の床に伴い検出された。因って、この住居址は拡張されたと考える。

炉は2段になっており、作り変えられたと考えられる。

上面は95×80cmの平面プランを呈し、深さ19cm、平坦な底部を有す。埋土は橙色の粗砂、砂礫混シルトである。多量の炭を含む灰白色シルトが混じる。

下段は直径40cmの円形プランで、深さ41cmで逆円錐状にすぼみ底部は平坦となる。埋土は4層に分かれ、全て炭を含み、1層以外は地山の土が混じる。埋土の状況から下段の炉が上段の炉を切る。上段の炉が古いと考えられ、下面の床と対応すると考える。

上段の炉の東側には、長さ2.2m、深さ8～18cmの溝が存在する。溝底のレベルは炉側が高く壁溝に向かうにつれ低くなる。

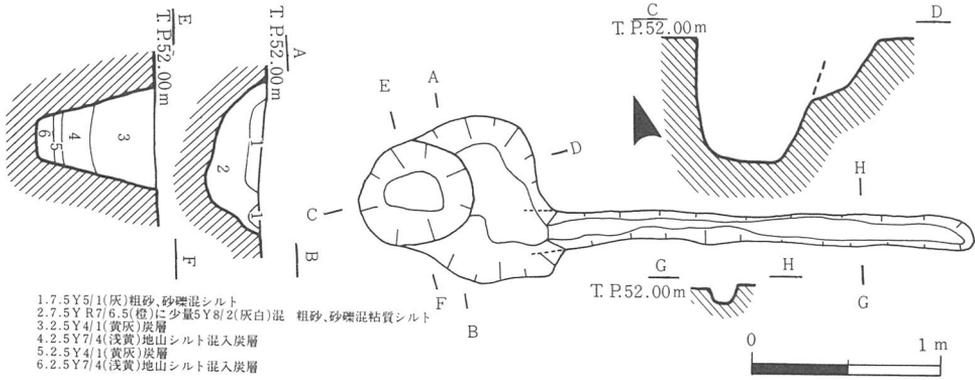
下段の炉にも溝が付設されていた形跡が断面に見えるが何れのものか確認できなかった。

柱穴は24基検出した。内5基（柱穴1、柱穴2、柱穴3、柱穴4、柱穴5）は焼土内より検出され下面に対応する。

遺物は焼土中、壁溝、炉より土器93片、石鏃1点が出土した。



第13図 1号住居址平面図



第14図 1号住居址炉平面図

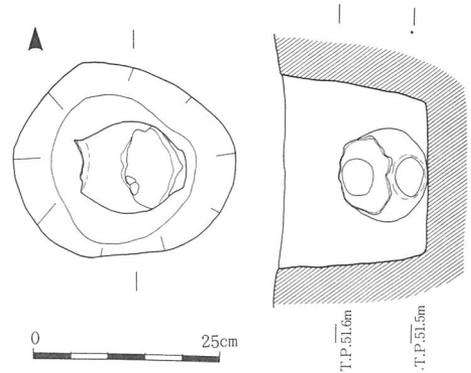


第15図 弥生時代遺構配置図

尚、柱穴6よりほぼ完形の壺がやや傾いた状態で出土した。

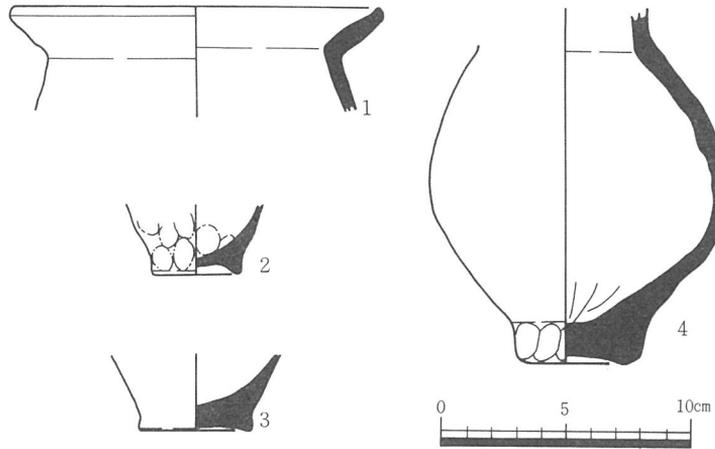
床面には焼土塊の入った小土壌が5基検出された。これを野鍛冶跡と考え、熱残留磁気測定を行ったが、焼成温度は450°Cであることを測定し、可能性は低い。

この住居址山側に幅0.7~1.0m、深さ30cmの溝と、その後方1.5mに、東側の斜面部を段状に掘り込んだ長さ6.0m、たちあがり42cmのテラスが存在する。



第16図 P 6 遺物出土状態

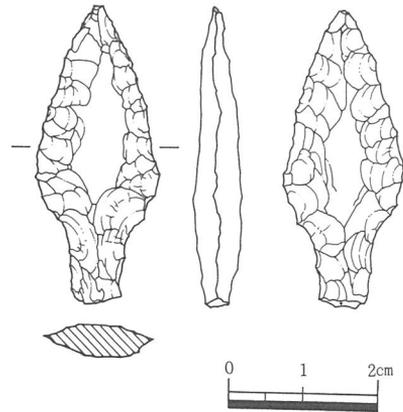
近接する溝は溝1の延長に当たると考えられる。残存長は5.90mである。テラスは他の住居址の例から考え1号住居址に付設するとも考えられるが、削平を受けており、住居址との関係は不詳である。



第17図 1号住居址出土遺物(1)

出土遺物 (第17・18図、図版35・52)

1は口縁径15.0cmを測り、やや受口状を呈する。2・3は甕の底部であげ底である。胎土中には白色砂粒を多く含む。2は鉢の可能性もある。4は柱穴から出土した壺である。出土状況からは転がり落ちたものと考えられる。口縁部は欠損し、器表面も剝離のため不詳。底部に指頭痕が残る。内面はナゲ調整。胎土中には暗灰色・白色の砂粒を多く含む。底部は比較的厚く、あ



第18図 1号住居址出土遺物(2)

げ底となっている。石器は石鏃1点がある。凸基有茎式石鏃で、住居址床面やや上位から検出した。両面とも中央に素材剥離面を残し、周縁に両縁加工を施す。長さ3.95cm、厚さ5.75cm、重量3.1g。

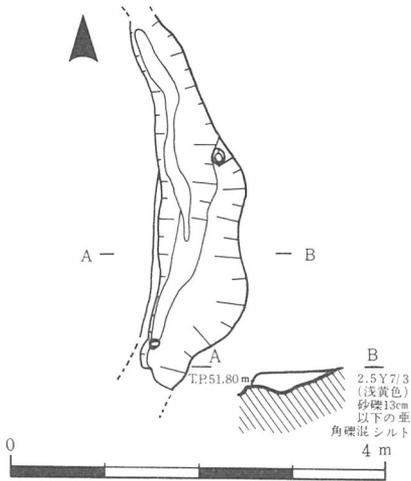
2号住居址 (第19・20図、図版5・35)

調査区A-2地区、A-3地区の境、1号住居址と、3号住居址の中間に位置する。自然流路の右岸の平坦面に構築される。

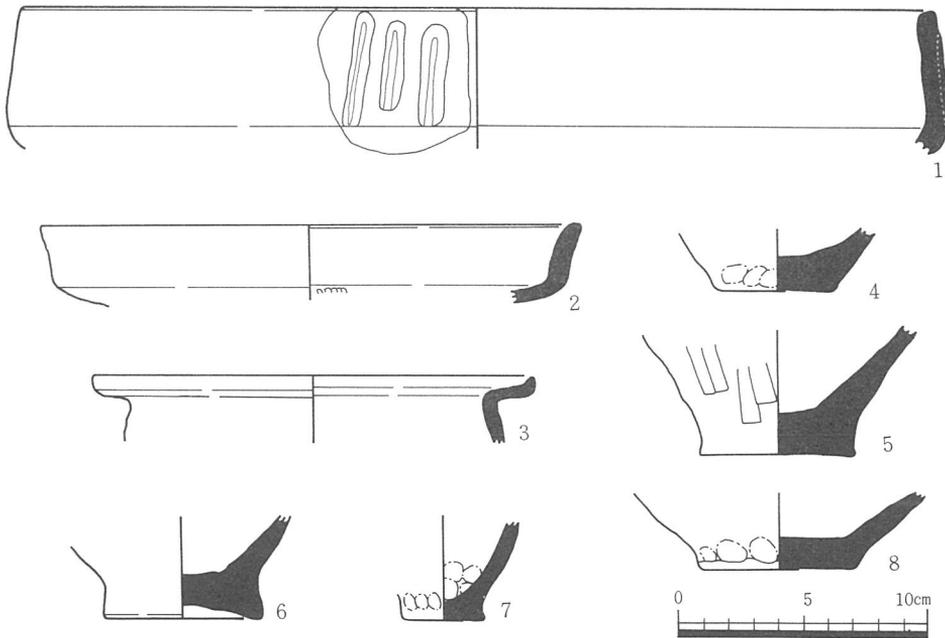
西側が削平され、4.0×1.0mの凹みとして残るのみである。炉、柱穴等は検出されず、床面も確認できなかった。しかし、凹み部が壁溝の崩れと考えられること、円形に想定復元した時、6～7mの直径を持つ様に考えられること、1・3号と等間隔であることから、一応住居址と考えた。

遺物は、全て弥生土器、破片数にして921片有る。甕・壺・高杯が確認された。

出土した土器はいずれも破片で、一塊となり出土したが、整理作業の結果、接合できるものはほ



第19図 2号住居址平面図



第20図 2号住居址出土遺物

とんど無く、住居址としてもその廃絶後に投棄したと思われる。

### 出土遺物（第20図、図版35）

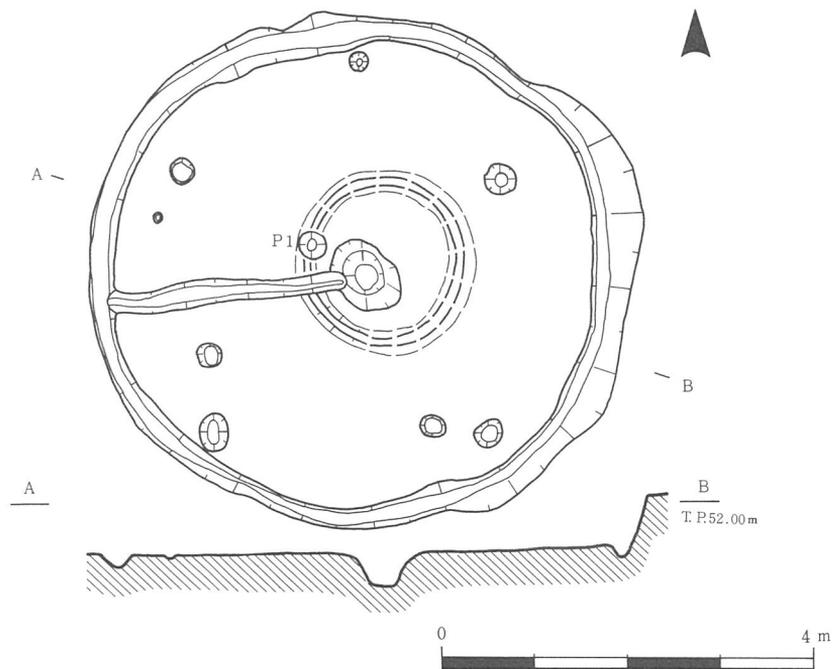
遺物はその出土状態からすれば東側から流れ込んだ状態で検出されている。器種は無頸壺・高杯・甕等で住居址の残り具合からすれば比較的土器は出土している。

1は台付無頸壺と考えられる口縁径36.6cmの大型品である。口縁部には3本以上の棒状浮文を有し、内外面とも不明瞭ではあるがヘラミガキによって調整されている。胎土中には1mm大の白色・黒色粒を含み、色調は外面が7.5YR 8/2（灰白）である。2は口縁径22.2cmを測る高杯で脚柱部は欠損している。杯部は浅く、口縁部はやや外反する。チョコレート色を呈し、胎土中に角閃石を含む。3は受口状を呈する甕で口縁径18.1cmを測る。底部は5点出土しているがそのうち4～6は甕の底部で、中にはあげ底のものも含まれる。7は鉢？で8は壺の底部である。

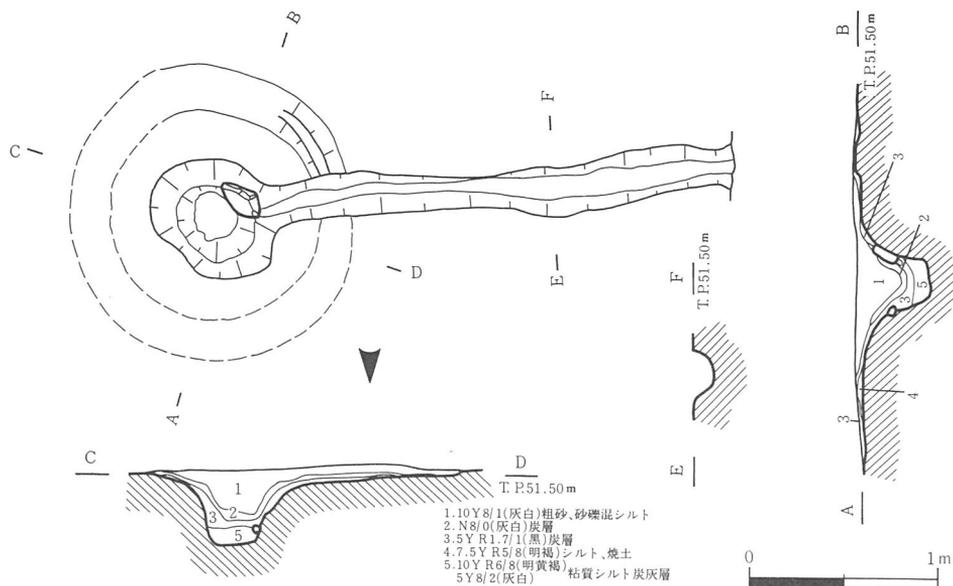
### 3号住居址（第21～23図、図版6・7・35）

調査区A-3地区南端、自然流路の右岸の平坦地に位置する。炉、柱穴、壁溝、壁体の一部が検出された。平面プランは正円に近く、直径約6.0mを測る。

壁は高さ65～70cmで、東側に全体の1/4程残る。たちあがりの角度は80度、壁体直



第21図 3号住居址平面図



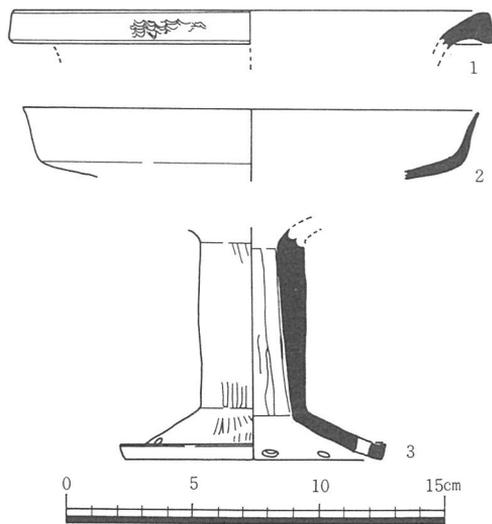
第22図 3号住居址炉平面図

下に幅15~30cm、深さ15~20cmの壁溝が全周する。

床は拳大の礫の入った黄橙色の非常に硬い地山を掘り込み形成される。床面は若干の凹凸を持ち、全体に西側に傾斜する。

床面の中央に平面プラン75×55cm、深さ36cm、底の平たい炉が地山を掘り込み構築されている。炉の周囲には径約1.4m、高さ2~3cmの土堤状の隆起帯を持ち、この隆起帯を切るように、低位方向へ溝が延びている。炉の埋土は4層に分層される。上から2層~5層にかけ灰・炭が入る。1層は25cm程積もって埋土の半分を占める。2層、3層の灰・炭は、炉の周辺2mに渡り検出された。掻き出された形跡を見る。

柱穴は、8基検出された。深さは、17cm (炉の横の柱穴1) が最深で、10cm以下がほとんどである。柱の位置・間隔から考え、支柱穴は4~5本と考える。



第23図 3号住居址出土遺物

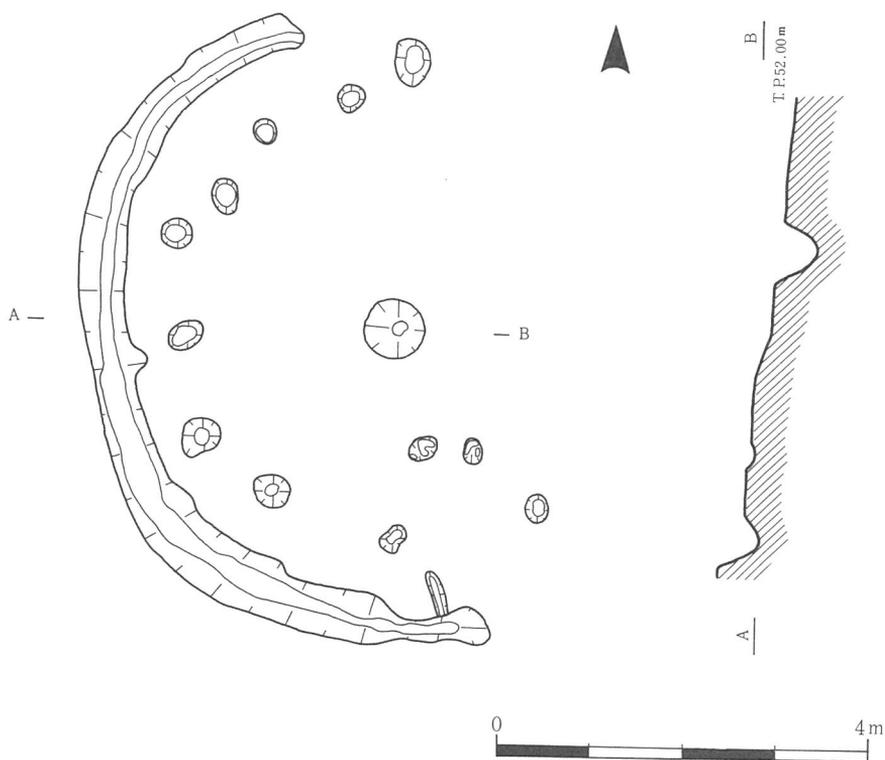
遺物は主に壁溝内より出土した。

#### 出土遺物（第23図、図版35）

壺、高杯が出土している。1・2は床面直上で3は周溝内からの出土である。1は口縁径19.6cmで端部に波状文を施文した生駒西麓の土器である。2は口縁径18.7cmの浅い高杯でやや外方向に開く。3は棒状の脚柱部で裾部には6個の円孔を穿つ。

#### 4号住居址（第24・25図、図版8・35）

B-1地区南部、東側の緩斜面裾部、自然流路左岸に位置する。炉、壁体、壁溝、柱穴を検出した。西側を半分以上欠くが、直径5.4~6.0m程の円形のプランを有すると考えられる。



第24図 4号住居址平面図

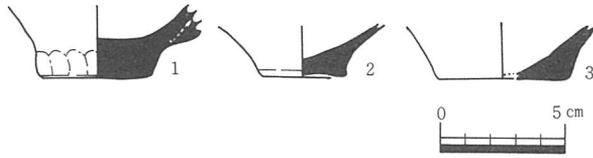
壁は西側に高さ15~20cm程が残る。壁体直下に深さ10~15cmの溝が廻る。

床は砂質シルトの地山を掘り込み構築される。

炉は平面プラン80×70cmの楕円形を呈し、深さは約45cmである。

付設溝は削平により消失した可能性はあるが定かではない。

柱穴は14基検出された。深さは15～50cmで一定しない。他の住居址より本数が多く間隔も狭いため、建て替えられた可能性もある。建て替えとした場合、柱穴は5～7本と考えられる。



**出土遺物** (第25図、図版35)

**第25図** 4号住居址出土遺物

床面からの出土はなく、埋土中から 170点の土器が検出されている。そのうち図化できたのは3点である。1は把手付鉢、2は甕、3は甕あるいは甗と考えられる。

**5号住居址** (第26～28図、図版9・10・35・52)

丘陵山頂部には約 840 m<sup>2</sup>のやや蒲鉾形をした平坦地が存在するが、この平坦地の中央から僅かに北側に下ったところに位置している。

住居址のプランは、北壁が斜面につくられた住居址の通例の如く検出時は半月形を呈していたが、本来は円形を呈していたと推測される。径は東西壁で測ると5.7mとなり、山頂の他の住居址よりは1m前後大きな規模を持っている。

壁はやや粘土質で流紋岩の風化土の地山を掘り込み、その傾斜角は床面に対して89度とほぼ垂直にたちあがる。南壁のたちあがり約25cmで、他の壁に比べて残りが良い。

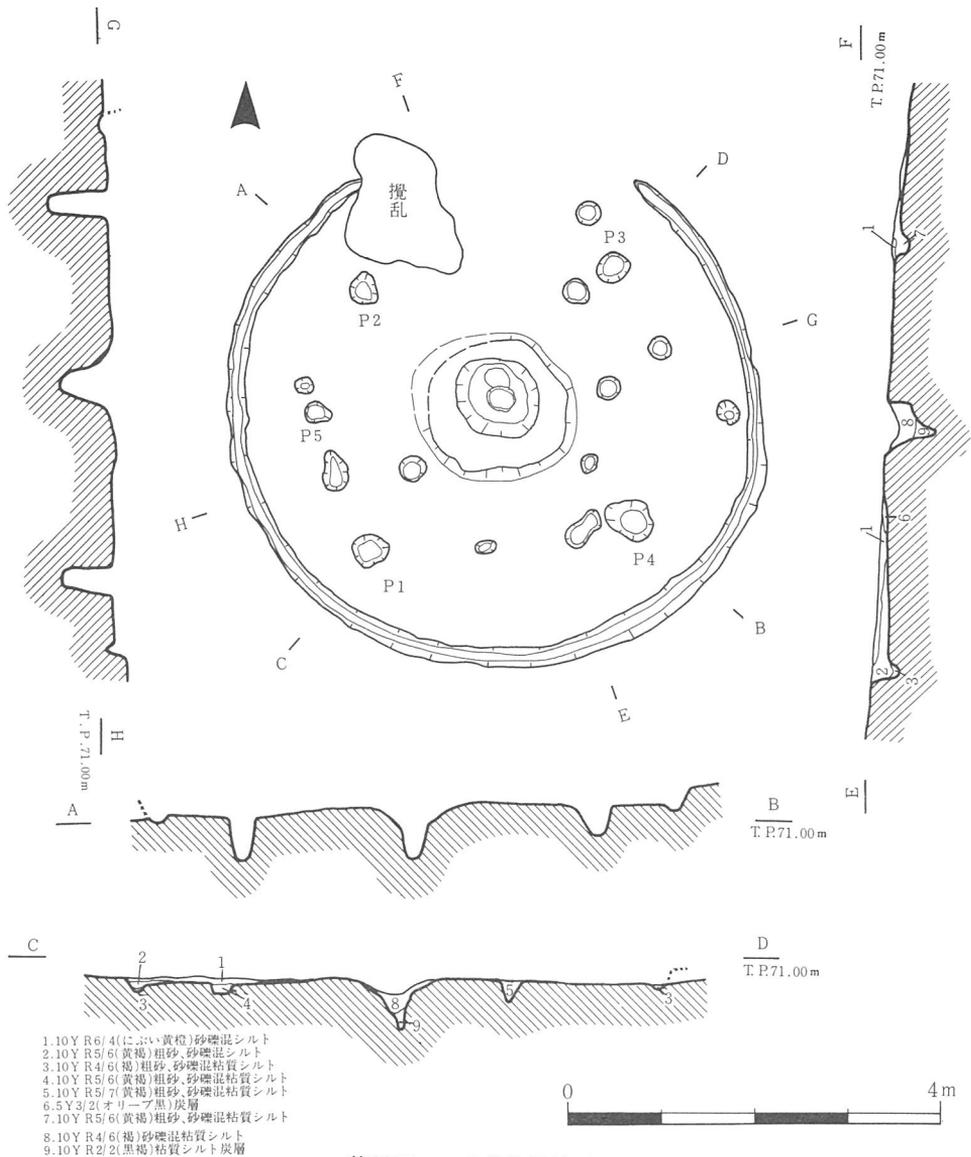
壁の直下には幅20～30cm、深さ10cm前後の壁溝が北壁を除いて巡っている。

床面は北側部分は現状では僅かに傾斜するものの本来はT.P.71.1m 前後で水平であったと思われる。床は硬く締まっているが壁溝付近はそれほどではない。床面積は約23m<sup>2</sup>の規模を有している。

住居址の中央には径0.87×0.85m、深さ0.57mの炉を有し、炉を取り囲むように径約1.5m、幅約20cm、高さ2cmの隆起帯(炉堤)が存在する。隆起帯の内側は炭が一面に付着し、炉の内部にまで広がり、壁面や炉底にまで及んでいる。隆起帯の外側と床面の一部に焼土の痕跡は認められるものの炉の内側にはその様な痕跡は認められない。

炉跡の占める面積は約2.3m<sup>2</sup>で、床面積の1/10にあたる。

柱穴は多数検出しているが、これらのうち規模・位置等から考えて主柱穴とみられるのは4個で、4本柱であったと推測される。P1は径0.32m、P2は0.26×0.32m、P3は0.3×0.4m、P4は0.43×0.51mを測り、そのうち最も深い柱穴がP1の0.62m、浅いのがP2の0.48mである。各柱穴間を計測すると、P1～P2が2.7m、P2～P3が2.7m、P3～P4が2.8m、P4～P1が2.7mとほぼ同様の値を示している。

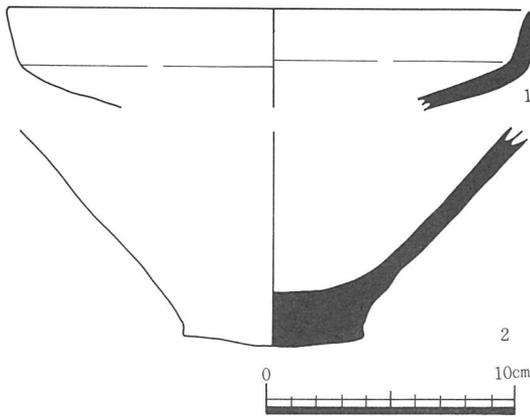


第26図 5号住居址平面図

尚、主柱穴の内側にも規則性を持つ柱穴が存在する。これは主柱の補助的な役割を果たした柱穴跡であろうと推測される。

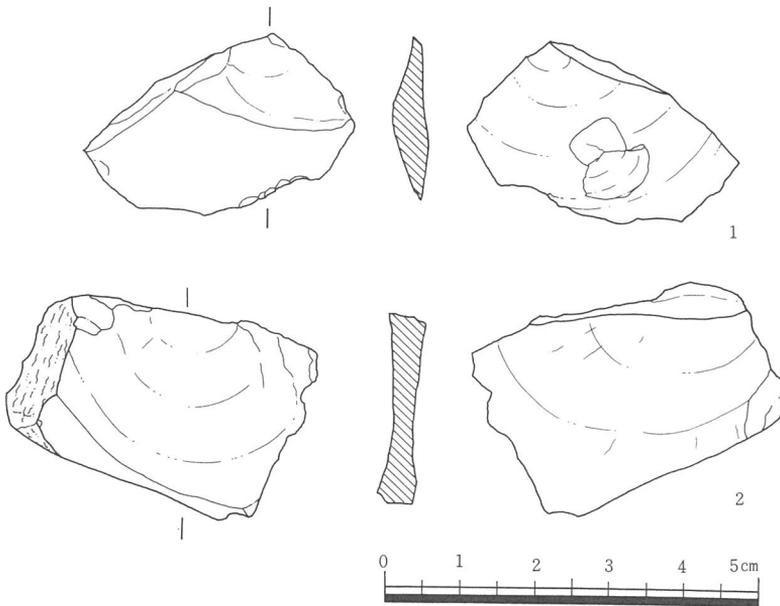
住居址の埋土は、壁溝を含め、3層に分層が可能である。1層は10Y R 6 / 4（にぶい黄橙）2層は10Y R 6 / 5（黄褐）、壁溝内は10Y R 4 / 6（黄褐）で共に粗砂・砂礫混シルトで、炭の混入が比較的多い。大まかには黄褐色系の埋土であるといえる。

出土遺物（第27・28図、図版35・52）



第27図 5号住居址出土遺物(1)

土器は P5 の柱穴から出土した高杯と、壁直下の床面から出土した壺の底部等がある。高杯は口縁部が上方へ屈曲してたちあがるタイプで径は21.2cmを測る。調整はヘラミガキが一部に残っている。色調はいわゆるチョコレート色を呈し、生駒西麓産とみられる胎土を持っている。壺は剥離のため調整は不明であるが、平底の底面には2～3個の靫とおぼ



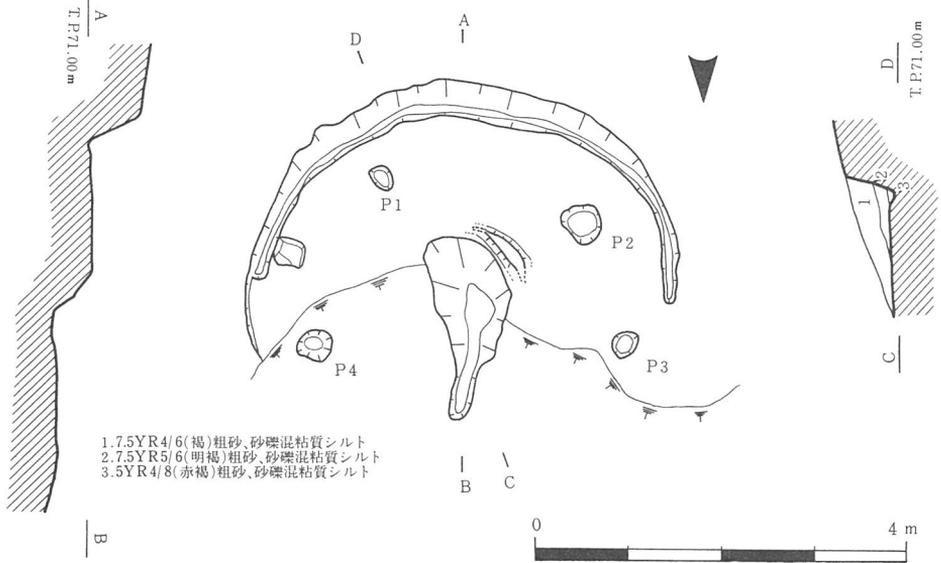
第28図 5号住居址出土遺物(2)

しき圧痕が認められる。

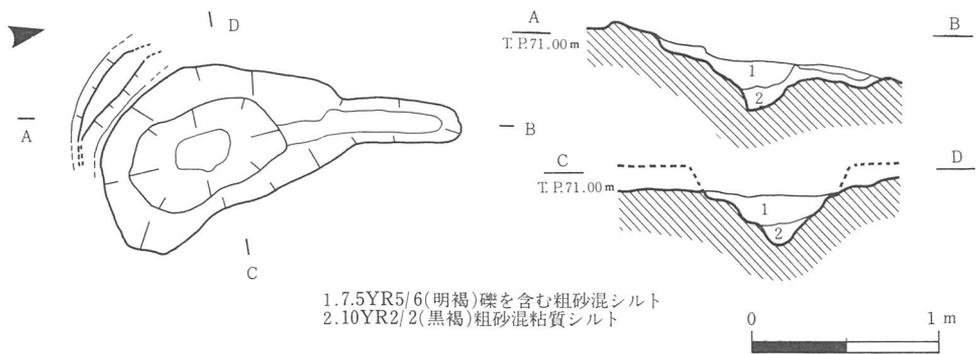
石器は2点検出した。1は細部調整のあるチャートの剥片である。横長剥片の末端縁辺に、細部調整が見られる。長さ2cm、幅3.57cm、重量3.7gを測る。壁溝から出土。本遺跡の打製石器のうち、唯一のチャート製である。2は横長剥片。背面左側縁および末端に原礫面が残る。打瘤は除去されている。長さ1.57cm、幅3.63cm、重量9.1gを測る。サヌカイト。

6号住居址 (第29～31図、図版11・12・35)

山頂部北東隅に位置し、5号住居址の東7.5mの距離にある。住居址のプランは5号同様斜面につくられたため検出時は半円形を呈していたが、本来は円形を呈していたと推測される。約1/3を検出した。径は図上で復元すると4.6mを測る。埋土は壁溝を含め3層に分層ができるが、共に褐色系統で粗砂・砂礫混じりの粘質シルトで炭を混入している。



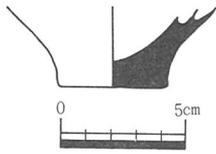
第29図 6号住居址平面図



第30図 6号住居址炉平面図

壁は床面に対して88度とほぼ垂直にたちあがる。南壁が残り良く約0.5mを測る。直下には幅約20cm、深さ約8cmの壁溝が巡る。

床面は本来 T.P.71.0m 前後であったと思われる。床面は硬く締まっているが、壁溝付近はそれほどではない。床面積は復元すると約16㎡の規模を有している。住居址の中央には、長軸1.36m、短軸0.76m、深さ0.28mの炉を有する。炉底には厚さ12cmの炭が堆積し、炉の北側には排水用とみられる溝が取り付けられている。炉の周りには隆起帯（炉堤）の痕跡が僅かに残っている。



第31図 6号住居址出土遺物

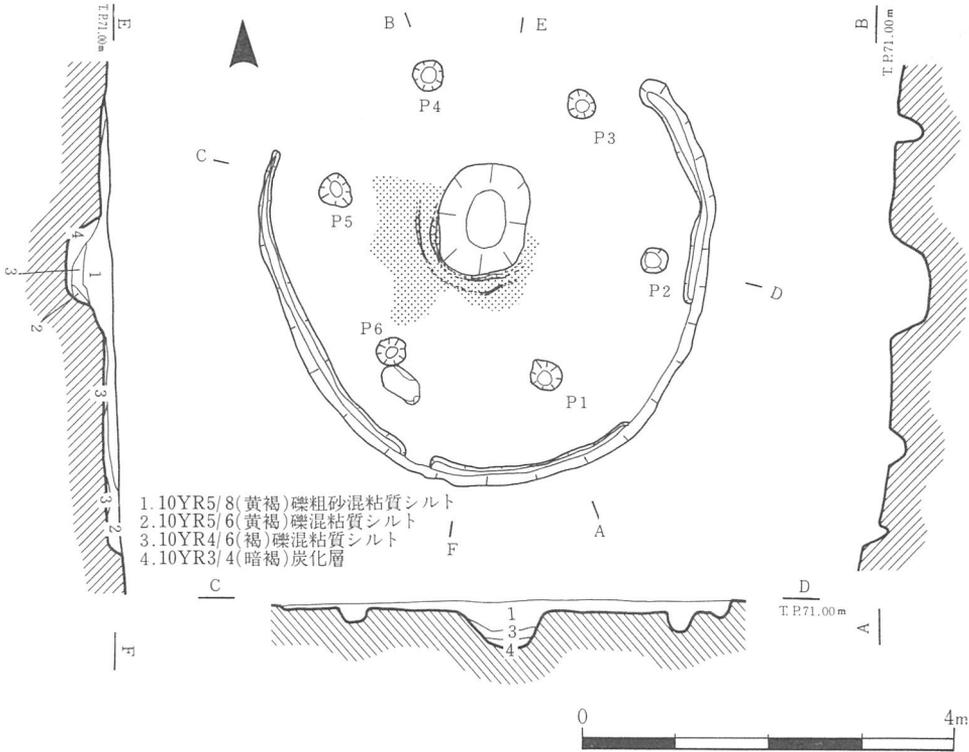
柱穴は4個検出している。P1は径0.3m、深さ0.28m、P2は径0.46m、深さ0.32m、P3は径0.27m、深さ6cm、P4は径0.43m、深さ6cm、で各柱穴間はP1～P2が2.4m、P2～P3が1.4m、P4～P1が1.9mを測り、かなり不揃いの値を示している。本来の柱は5～6本であったと推測される。

出土遺物（第31図、図版35）

甕の底部が1点床面直上で出土している。

7号住居址（第32・33図、図版13・14・52）

5号住居址の西約5mに位置している。住居址のプランは、5・6号住居址と検出状態



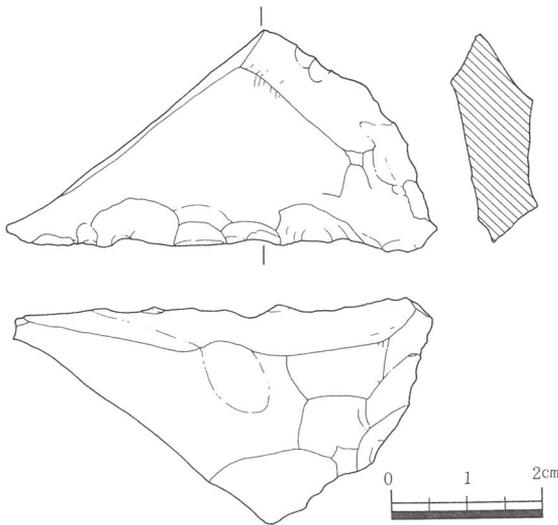
第32図 7号住居址平面図

は同じであり、本来は円形であったと推測される。径は東西壁で測ると4.6mである。

埋土は3層に分層ができる。視覚的には5号住居址のと酷似する。1層は10Y R 5 / 8 (黄褐)、2層は10Y R 5 / 6 (黄褐)の共に礫混粘質シルトである。3層は5 Y R 5 / 8 (明赤褐)で床面直上の焼土である。

壁はやや粘土質の地山を掘り込み、ほぼ垂直に立ちあがる。残りの良い南壁で約30cmを測る。直下には幅10cm、深さ3～4cm程度の壁溝が存在するが二ヶ所で切れている。他の住居址のものと比較してやや小ぶりである。

床面はT.P. 70.9m前後であるが北側では削平のためやや下がっている。床面はそれほど硬く締まっていない。床面積は推定16㎡の規模を有している。中央には1.2×0.93m、深さ41cmの楕円形を呈する炉を有し、僅かに炉堤の痕跡も残る。炭の範囲は炉内にとどま



第33図 7号住居址出土遺物

らず炉堤の外側にも広がりを持っている。

柱穴は6個検出している。柱穴の規模は径32cm、深さ15～20cm前後のものが多い。P6だけが若干深く約30cmある。各柱穴間はP1～P2が1.85m、P2～P3が1.65m、P3～P4が1.7m、P4～P5が1.83m、P5～P6が1.65m、P6～P1が1.6mを測り、ほぼ等間隔である。P6の傍には川原石を用いた台石も出土している。

#### 出土遺物 (第33図、図版52)

遺物については、土器は細片であり図化できるものはない。石器は、サヌカイト製スクレイパーと剝片がある。

図はスクレイパーで、横長剝片を使用し、背面末端縁辺に刃部調整を施す。腹面左側縁にも調整を施す。長さ2.78cm残存幅(刃部長)5.82cm、厚さ1.27cm、重量15.8gを測る。

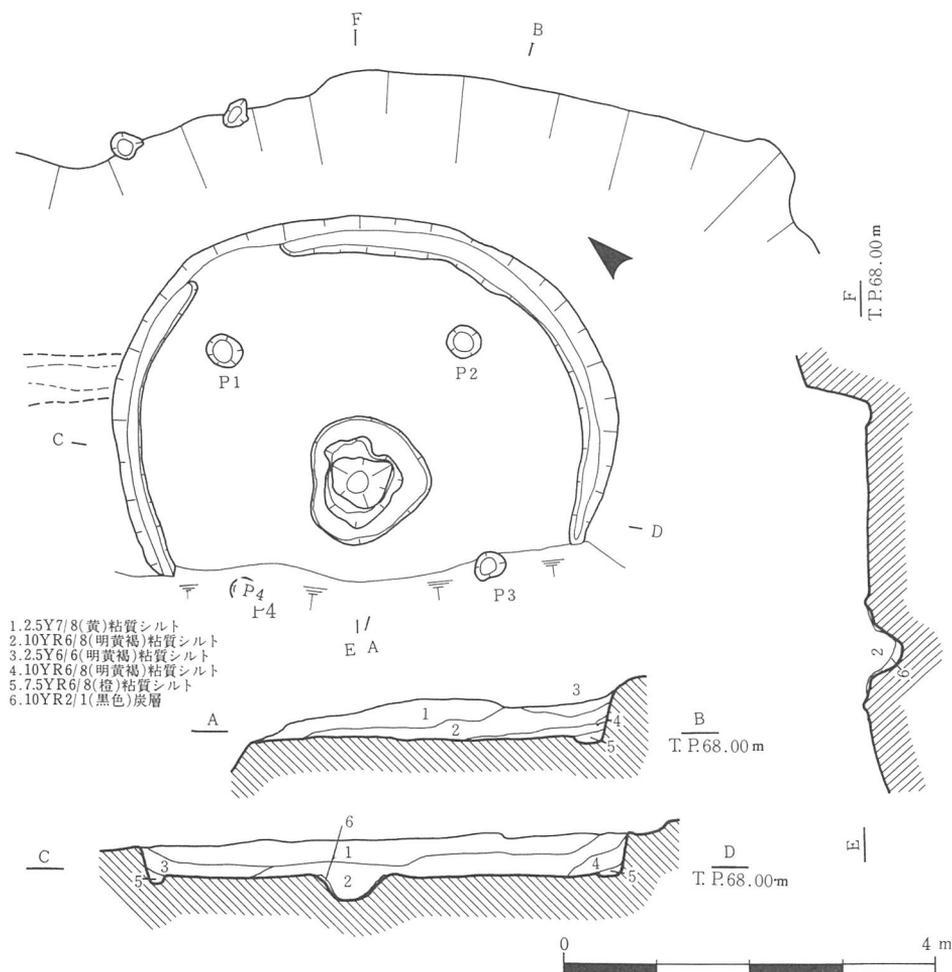
#### 8号住居址 (第34・35図、図版14～16・36)

山頂部から西側へ下った斜面に位置している。住居址は、地山を「L」字に掘りこみ、構築している。プランは半円形を呈し、斜面の低い方は流失したものと考えられる。径は南

北壁で 5.3mを測る。埋土は 6層に分層が可能である。山側からの風化礫の流入が比較的  
多く認められる。

壁は地山をほぼ垂直に掘りこみ、東壁のたちあがりは60cmを測る。住居址の後背には馬  
蹄形状に若干の凹みが認められ、テラスの役割を果している。

壁直下には幅30cm、深さ10cm前後の壁溝が巡るが、一部長さ0.9 m にわたって存在しな  
い部分もある。床面のレベルは T.P. 68.0 m 前後でほぼ水平である。床面は硬く締まってい  
る。床面積は復元すると約18㎡の規模を有し、中央には径0.9 m、深さ0.5 m の円形を呈  
する炉を持ち、囲むように幅15~20cm、高さ数cmの炉堤が巡る。炭は炉堤の内側から炉底  
まで「U」字形に検出された。炉底では約10cmの厚みを持っている。炉の焼けた痕跡は認  
められない。柱穴は 5個検出している。そのうち主柱となるのは 4本分である。柱穴はそ

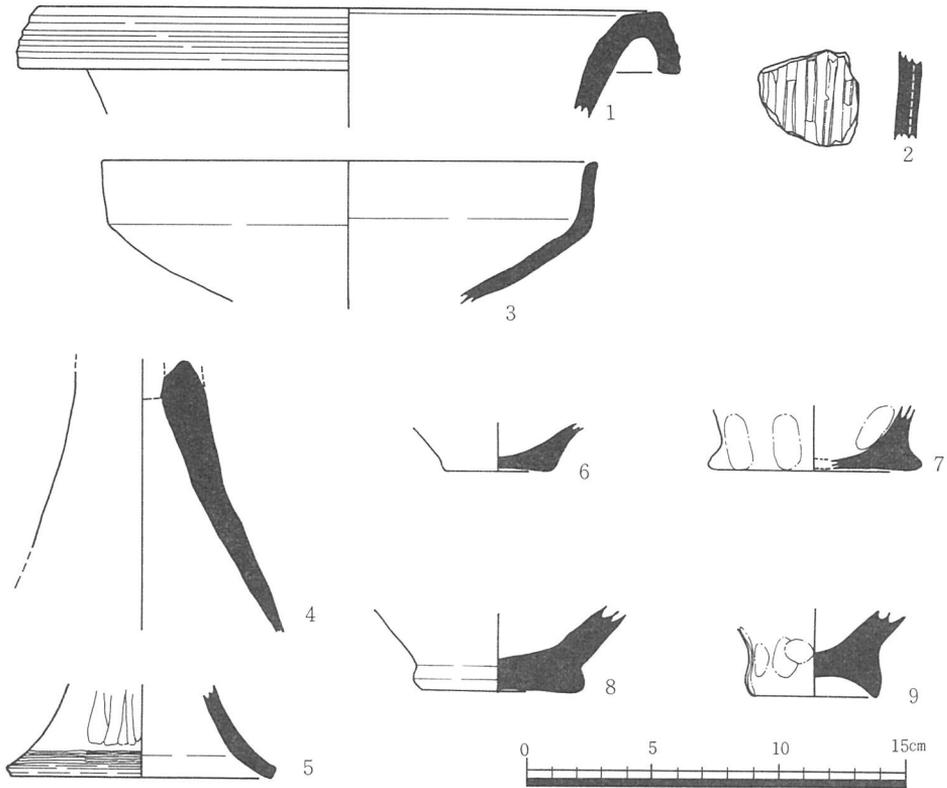


第34図 8号住居址平面図

それぞれ30cm程度の規模を持ち、深さは最も深いP1を除いてはほぼ同様である。各柱穴間はP1～P2が2.55m、P2～P3が2.4m、P3～P4が2.6mを測る。P1内には砥石かと思われる川原石が1点出土している。

**出土遺物**（第35図、図版36）

床面からの出土はなくすべて埋土からのもので、壺・台付鉢・高杯・甕が出土している。1は端部に凹線文を持つ広口壺で、口縁部径は25cmを測る。色調は淡い橙色を呈し、胎土

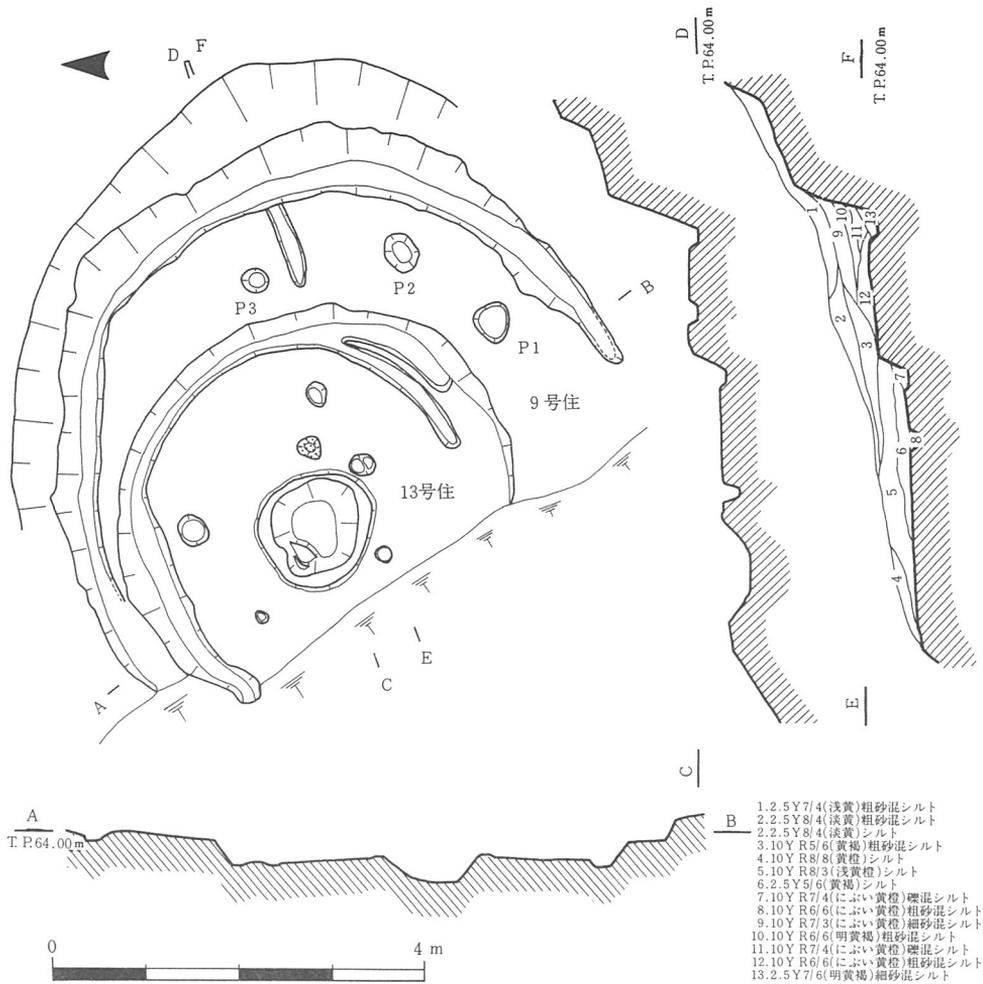


第35図 8号住居址出土遺物

中に白色・褐色・黒色粒をわずかに含む。2は5本の棒状浮文をもつ台付鉢の破片である。3は口縁部が屈曲してたちあがる高杯で口縁部の径は19.8cmを測る。4・5も高杯であるが3とは同一個体ではない。6～9は甕の底部と考えられるが、8・9は他の器種の可能性もある。

**9号住居址・13号住居址**（第36～40図、図版17・18・36・37・52）

8号住居址のやや南下方の斜面に位置している住居址で13号住居址と重複する。新旧関係は13号住居址が新しい。



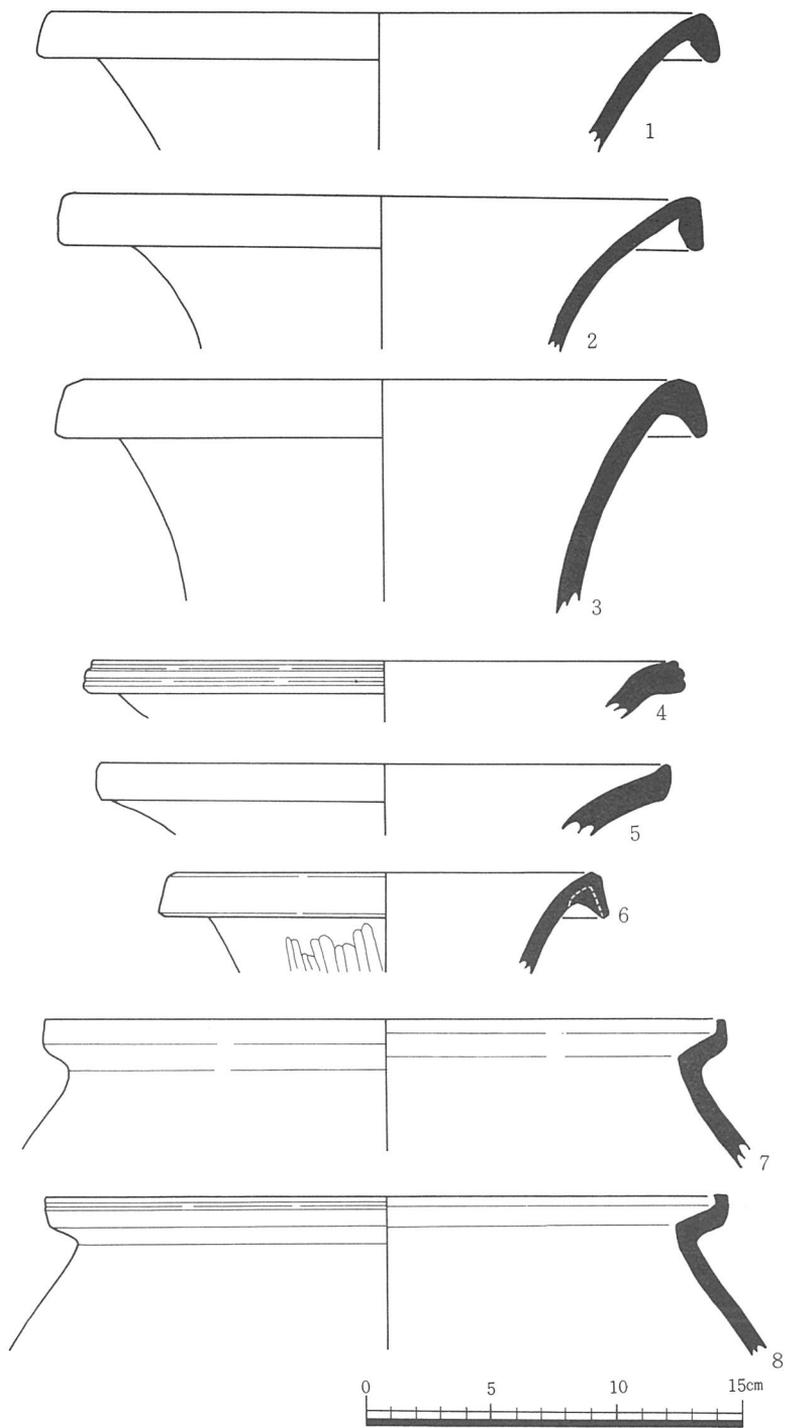
第36図 9・13号住居址平面図

住居址は山側が残り、プランは検出時は半円形を呈していた。壁は流紋岩の風化土である地山を「L」字形に掘り込み、後背には8号住居址と同様の凹み程度のテラスを設けている。住居址のプランは円形で径6.3mを測る。

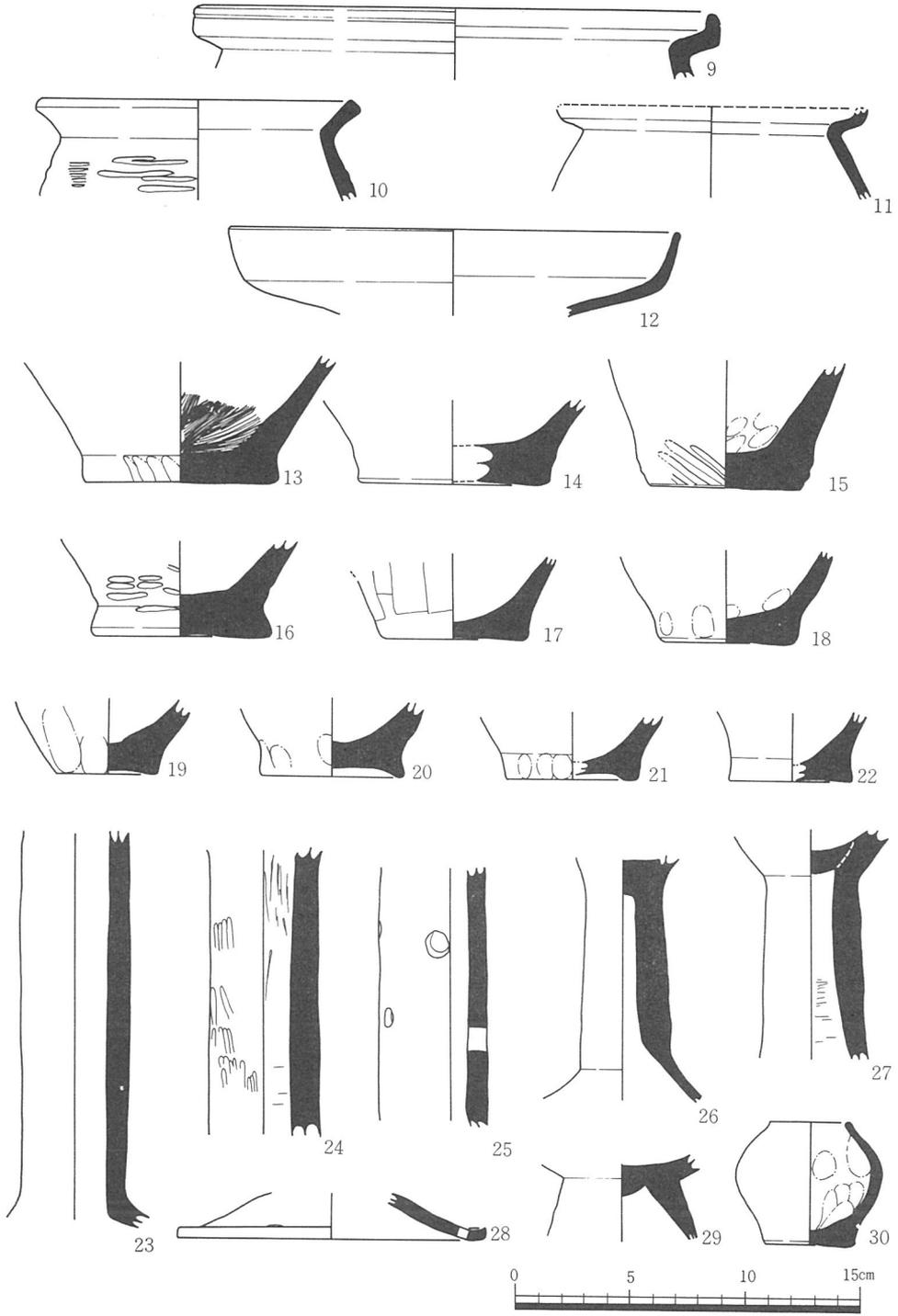
壁はほぼ垂直に近くたちあがり、最高で約84cm残存している。9号住居址の存在する斜面の傾斜角は約16度とかなりの勾配を示すためか、壁直下の壁溝は幅が30cm前後、深さも10cm前後と他の住居址と比較した場合、ひと回り大きな溝が巡っている。

埋土は高位所からの流入が多く5～10cm大の礫の混入が顕著であり、それは上層に集中して認められる。

床面のレベルはT.P. 64.1mで13号住居址と重複しているため僅かしか残っていない。当



第37図 9号住居址出土遺物(1)



第38图 9号住居址出土遺物(2)

初13号住居址のテラスではないかと考えていたが、北・南壁で両住居址が極めて接近することと、炉の痕跡が認められたので住居址と判断した。

炉跡は径28cm、深さ20cmが残っている。規模は不明であるが、本来の深さは、床面の高さと同様に残存具合から約60cmと推測される。柱穴は三個検出している。P1は径38cm、深さ14cm、P2は径40×33cm、深さ40cm、P3は径25cm、深さ10cmを測る。P3に隣接して東西に延び、壁溝につながる深さ4～5cmの溝を検出している。埋土は細砂である。方向から見て1号住居址や3号住居址のように炉に取りつく溝の可能性と間仕切りの可能性が考えられる。

13号住居址は9号住居址がある程度埋没した段階で埋土を掘り込み住居址を構築している。

住居址は9号住居址同様、山側が残り谷側は消失している。径は復元すると4.3mを測る。

壁は9号住居址を切り込んでいると考えられるが、確実に壁として把握できるのは、9号住居址の床面の高さまでで約30cmである。壁の直下には最大幅25cmの壁溝が巡る。さらに南壁では内側に幅20cmの溝が巡っており、13号住居址は拡張されていると判断できる。規模はかなり小さく、仮に13-b住とすると径は4mを測る。床面は両者とも同レベルでT.P. 63.74mでほぼ水平で、比較的硬く締まっている。中央には径約1.4m、高さ5cm、幅約18cmの炉堤を持つ炉が位置している。炉は長軸60cm、短軸46cm、深さ26cmの不整形で北西側には13-b住の炉の一部が残っている。底には炭が厚さ約4cm堆積している。

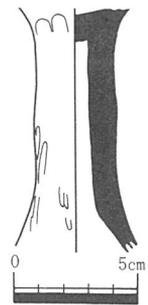
柱穴は6本分検出したが、このうちP1・P2は13-b住に伴うが他の柱穴は不規則でどの住居址に伴うかは判断できない。

#### 出土遺物（第37～40図、図版36・37・52）

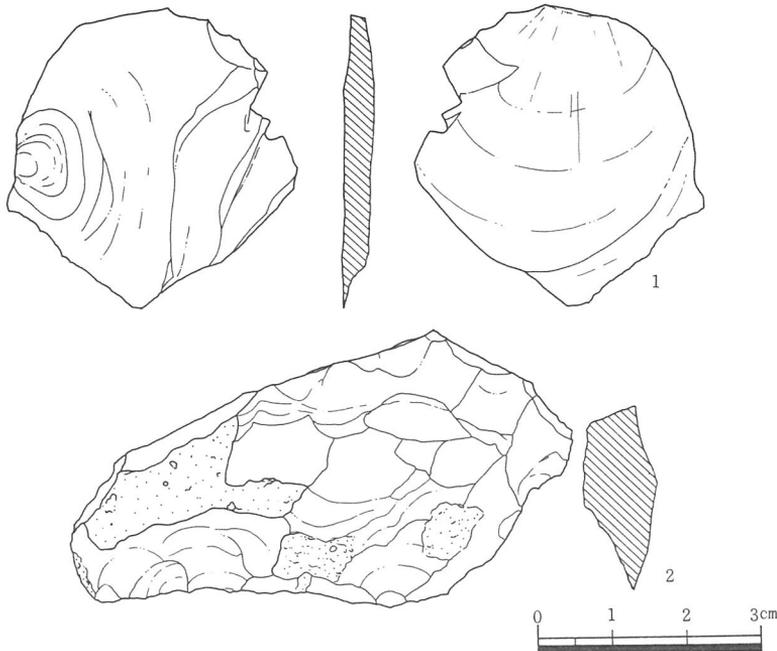
土器は主に埋土中からの出土が多い。8号住居址と9号住居址の間に設定したセクションの観察からこれら出土遺物の中には8号住居址出土のものも含まれる可能性もある。しかし、形式学的には分別が不可能であり、一括して取り扱う。

広口壺（1～6）1～3は口縁部径が24～26cmの広口壺で端部を垂下させたタイプである。3点とも角閃石を含みチョコレート色の色調を持ったいわゆる生駒西麓産の土器である。4は口縁端部に凹線文を持ち、5は端部をつまみあげる形状を持つ。6はやや小形で、垂下口縁を持つ。甕（7～11）大型の甕と中型の甕の二種がある。

7～9は大型に属するもので口縁径が23.0～27.2cmまでである。胴部は欠損しているが、口



第39図 13号住居址出土遺物



第40図 9号住居址出土遺物(3)

縁部の形状は短く外反し、上方へちあがる。3点とも角閃石を含むチョコレート色を呈し生駒西麓産と考えられる。10・11は中型に属し口縁径12～13cmである。10は口縁端部が肥厚し、11は受け口状を呈している。

高杯(12) 杯部は浅く口縁部が直線的にちあがる。口縁部径19.4cmを測る。

底部(13～22) 13～16は壺の底部で中にはあげ底のものもある。外面には指頭痕・ヘラミガキが施されているものとタタキメが施されているものがある。17～22は甕の底部で外面はヘラケズリされているものが多い。

高杯脚柱部(23～29) 棒状を呈するものが多くバラエティに富む。すべて中空である。

ミニチュア土器(30) 手捏ねによる土器である。内面に指頭痕が顕著に残る。

13号住居址の遺物は埋土中に含まれているものが多い。破片が多く図化できたのは高杯だけである。脚柱部は棒状を呈するがやや裾広がりである。胎土中には白色粒及びクサリレキを含む。色調は橙色を呈している。

石器はスクレイパー、剥片がある。

1は背面・腹面で打点を約90度転位した剥片である。両面ともヒンジーフラクチャーを呈し、素材剥片とは考えられない。

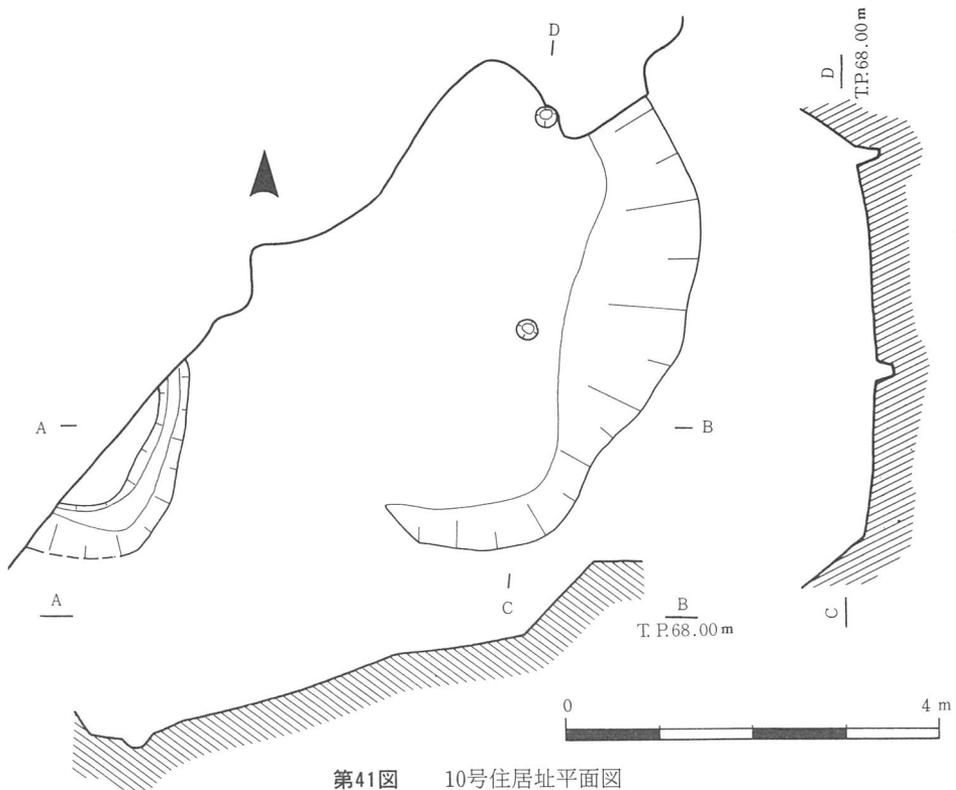
2は縦長剥片で、ファーストフレックである。両面とも調整剥離が施され、原礫両側の

側縁の一部に階段状剥離が見られる。刃部作出を意図したものと考えられる。剥片の長さ6.8cm、幅3.22cm、重量28.3gを測る。1・2ともサヌカイトで、壁溝からの出土。

10号住居址（第41・42図、図版19・35）

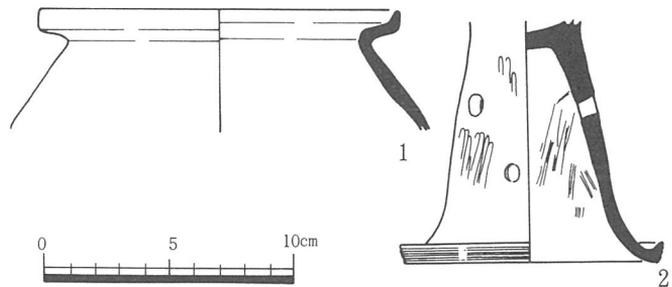
T.P. 68.56m～T.P. 66.72mの間で検出した。かなりの斜面上に位置している。

竪穴住居址については大部分が調査区外であるため一部を検出したに過ぎない。埋土は7号住居址等と類似し、10Y R 5 / 8（黄褐）で粘質シルトである。壁は削平によって消失し、壁溝の検出にとどまった。壁溝は幅約47.5cmで深さ12cmで弧状に巡る。当住居址の



第41図 10号住居址平面図

後背には伴うと考えられるテラス状の遺構を検出している。他のテラスと比較すると、不明瞭なものが多い中で深さは約0.8mを測り、明確な段状を示してい



第42図 10号住居址出土遺物

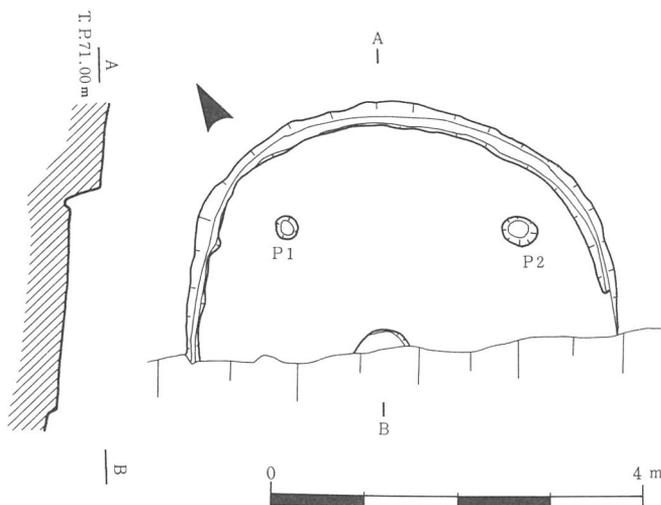
る。規模は調査区外にも広がるため未確認であるが、おそらくプランは「┌─┐」を示すと思われる。埋土は炭・灰を多く含む。

#### 出土遺物（第42図、図版35）

壁溝内からは高杯、壺、甕等の破片が多く出土しているが図化できたのは甕1点である。口縁部が「く」の字に外反し、上方へたちあがる形状を呈し、径は14.4cmを測る。肩部はやや張りをもっている。テラス状遺構からも土器は出土しているが細片が多く図化できるものは高杯だけである。肩部からは扁平片刃石斧が出土しているが、テラスに伴うか否かは判断できない。

#### 11号住居址（第43図、図版19・20）

山頂部平坦地の南西隅に位置し、6号住居址とは対角線にあたる。住居址の西半分は中世の堀状遺構によって切られ、したがって検出したのは東半分である。径は6号、7号と同規模で4.6mを測る。



第43図 11号住居址平面図

埋土は壁溝を含め2層に分層ができる。1層は10Y R 5 / 8（黄褐）、2層は10Y R 7 / 3（にぶい黄）で共に細砂である。壁溝内は炭化物を多く含む。

壁は垂直に近い角度で掘り込まれ、東壁で約40cm残っている。壁直下の壁溝は幅15~20cm、深さ約6cmを測る。壁溝は東側半分では巡っているが、南壁側では徐々に浅くなっている。

床面はT.P. 70.7mで硬く締まり、焼土塊が僅かではあるが存在する。床面積は復元すると約15m<sup>2</sup>である。中央にはかろうじて炉の痕跡が残っている。径は推定で60~70cmで深さ18cmである。炉の底には炭が堆積している。西側寄りでは床面近くまで上面が削られてい

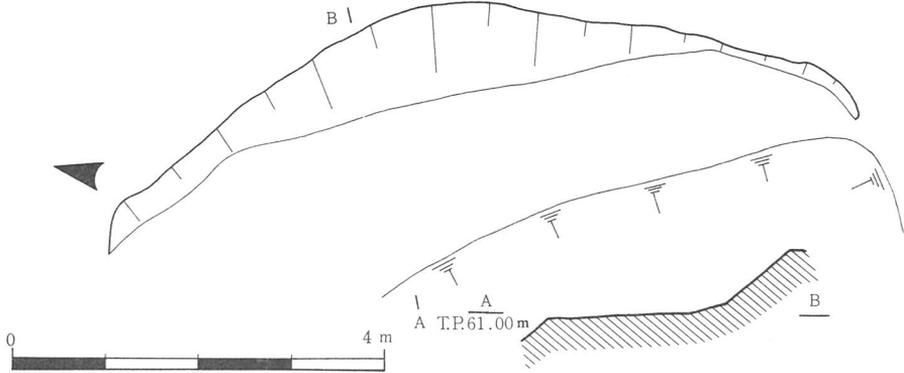
るため、炉堤は検出できなかった。柱穴は2個検出している。P1は径22cm、深さ30cm、P2は径33cm、深さ27cmを測る。柱間は2.5mで、支柱穴は4本であったと推測される。

**出土遺物**

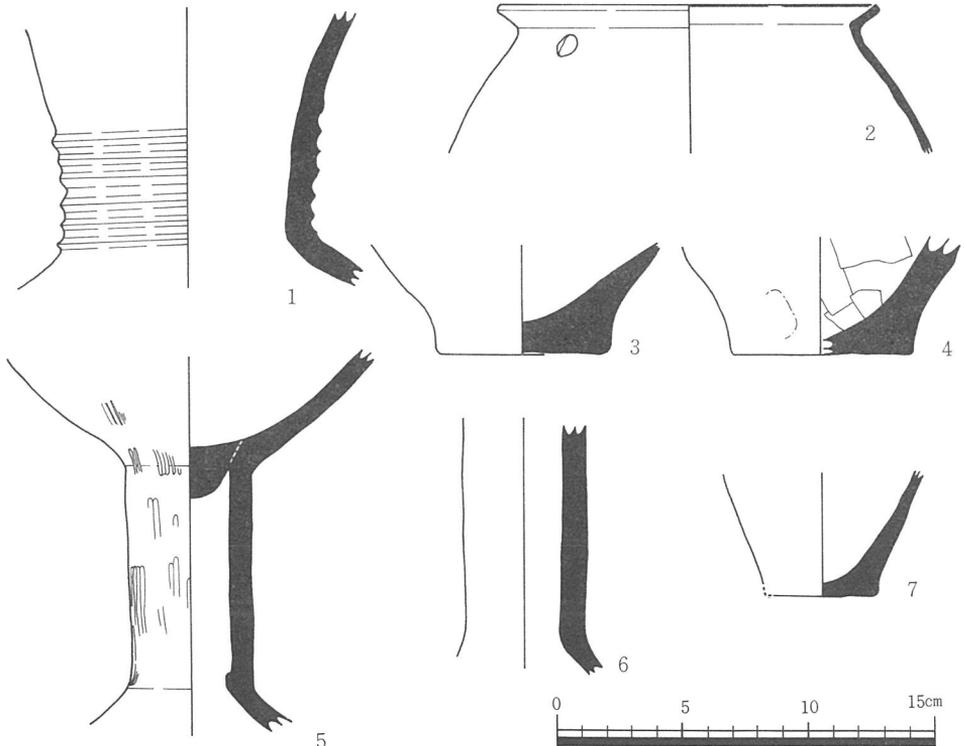
埋土中から甕・壺の細片が出土している。図化できるものはない。

**(12号住居址) テラス状遺構 (第44~46図、図版20・38・53)**

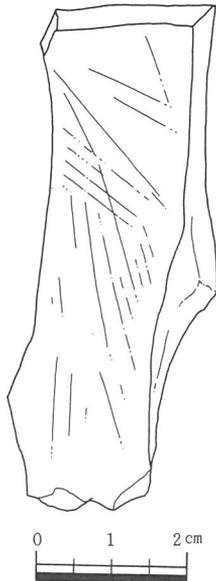
9・13号住居址の斜め下方に位置する弧状を描くテラス状遺構である。現状は開墾によ



第44図 12号住居址テラス平面図



第45図 12号住居址テラス出土遺物(1)



第46図 12号住居址テラス出土遺物(2)

1は壺の頸部で、6条の突帯を持っている。調整は内外面とも丁寧なヘラミガキによる。2は口縁部径15.0cmを測る甕で、短く外反する。端部はややつまみあげている。調整は不詳である。3・4は壺の底部である。3はややあげ底で、4は平底である。5は棒状の脚柱をもつ高杯で、杯部は塊状を呈する。外面には縦方向のヘラミガキが認められる。色調は橙色を呈し、白色砂粒を含んでいる。6も5と同様の高杯である。7は比較的薄手の甕である。

石器には、サヌカイト剥片および砥石がある。図に示したものは砥石で、一面を残して他は欠損している。擦痕は明瞭で、シャープである。石質は緻密で、鉄器の仕上げの研磨に使用されたものと考えられる。厚さ 9.7mm。埋土中から出土。

#### 14号住居址・15号住居址（第47～55図、図版21～23・39・40・53・54）

14号住居址は、斜面裾部の傾斜変換点に位置している。15号住居址と重複する。新旧関係は14号住居址が新しい。

住居址は流紋岩の風化土を「L」字形に掘り込み構築している。斜面上の住居址であるため検出時は半円形を呈している。径は南北壁で測ると5.4mである。

壁はほぼ垂直に近くたちあがり、壁は最高で24cm残存している。後背にテラスが認められるところから本来の高さに近い値を示していると考えられる。壁の直下には幅25～30cm、深さ7～8cmの壁溝が巡る。

床面は西側部分が現状では傾斜するもの本来は T.P. 64.7m前後で水平であったと思わ

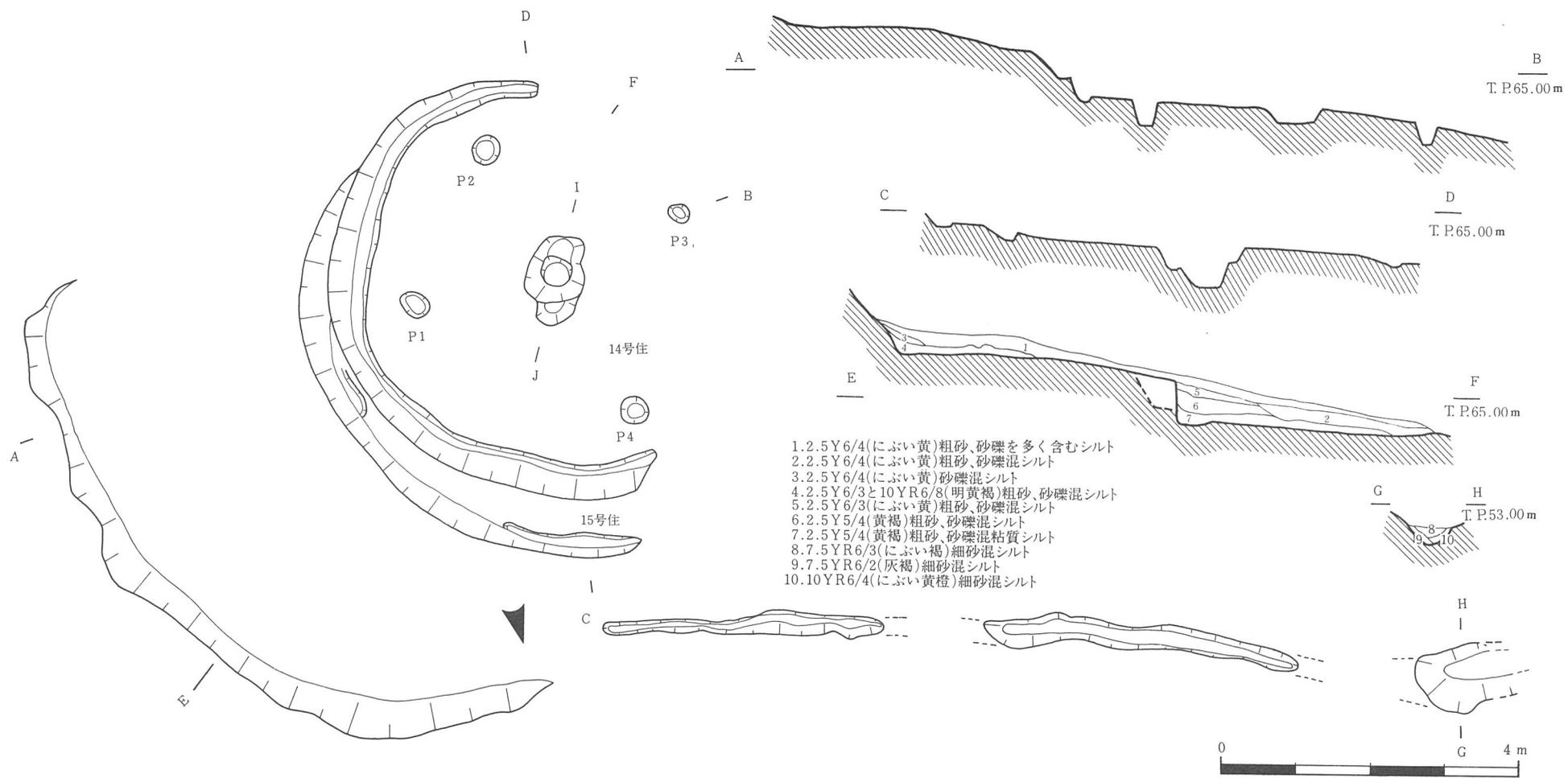
って削り取られ、1.5m程の段を成している。

従ってテラスしか現存しないものの、他との比較・検討からかつては住居址が存在したと考えた。

遺構は比較的急斜面を「L」字形にカットしたもので、長さ約8m、幅約1.3mにわたって検出した。たちあがりは最高で約50cmである。埋土は単層で5cm大の礫を含み、色調は10Y R 8 / 8（黄橙）で9号住と類似する。

#### 出土遺物（第45・46図、図版38・53）

埋土中に含まれるものが大部分で、その検出状況からは上方から流れ込んだとも考えられる。仮にそうした場合、位置、斜面の傾斜方向から考えて9・13号の遺物が含まれている可能性もありうる。



第47図 14・15号住居址平面図

れる。床は硬く締まっているが壁溝付近はそれほどではない。床面積は約19m<sup>2</sup>の規模を有している。中央の位置には長軸0.9m、短軸0.77m、深さ55cmの楕円形を呈する炉が存在する。

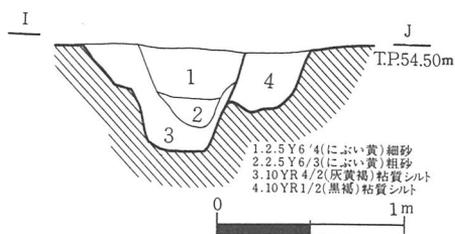
この住居址には他の住居址に認められるような炉堤は存在しない。炉内には厚く炭層が堆積し、その厚さは15cmを測る。

柱穴は4本分検出しており、その位置、規模から考えて主柱は4本であったと判断される。P1は40×28cm、深さ32cm、P2は径35cm、深さ39cm、P3は29×27cm、深さ28cm、P4は径37cm、深さ35cmを測る。それぞれの柱間はP1～P2が2.3m、P2～P3が2.73m、P3～P4が2.69m、P4～P1が最も長く3.24mを測る。

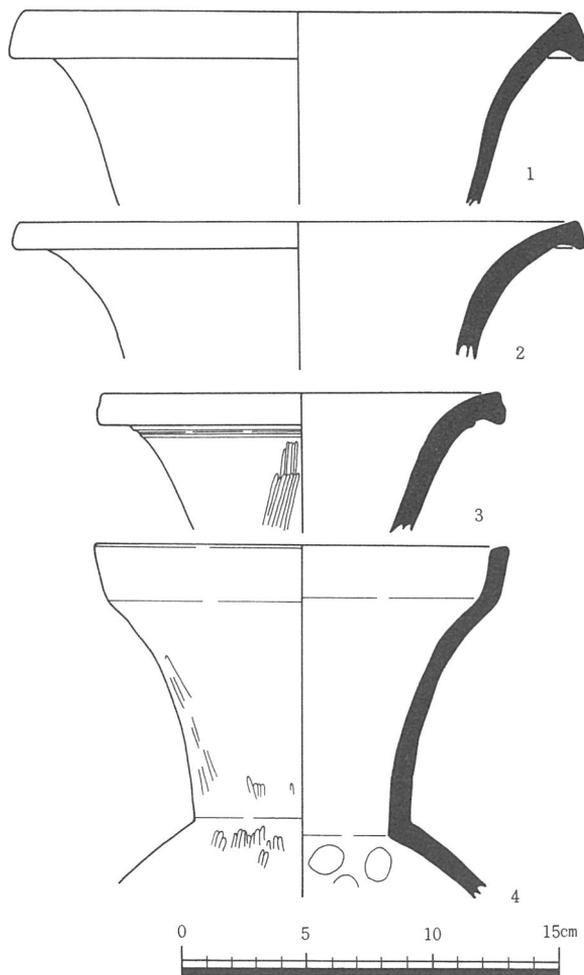
埋土は4層に分層が可能であるが、巨視的に見ると黄褐色の粗砂・砂礫混粘質シルトといえる。

15号住居址は僅かに東壁と床面の一部が残っているだけである。径は推定すると約6.7mで14号住より大きい。壁直下には幅34cm、深さ8cmの壁溝が僅かに残る。床面は14号住居址より約15cm高い位置にある。炉は14号住居址の炉に切られた状態が残っている。深さは現

有で30cmを測り、堆積はすべて炭層となっている。埋土は2層に分層が可能で色調は黄褐色系を呈し、14号住居址に比べるとやや硬く、粘質シルトである。

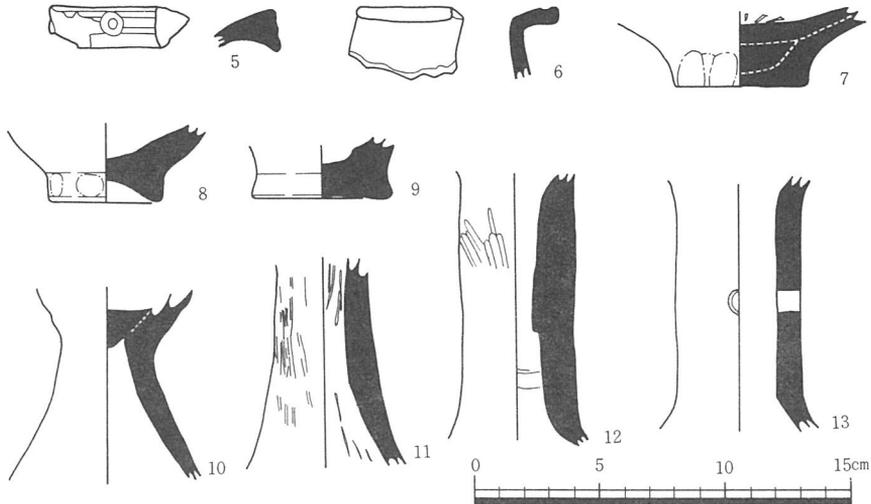


第48図 14・15号住居址炉断面図



第49図 14号住居址出土遺物(1)

両住居址の後背には前記したようにテラス状遺構が存在する。規模は約10mあり、最大幅は約3.7mを測る。規模は最大のものである。テラスは住居址側でやや下るもののほぼ水平で、テラスの東側には下方へ流れ落ちる幅約32cm、深さ約5cmの溝を検出している。テラスの規模が他に比べて大きいのは住居址を新たに構築した際、前者のテラスを再利用し、拡張したためと考えられる。

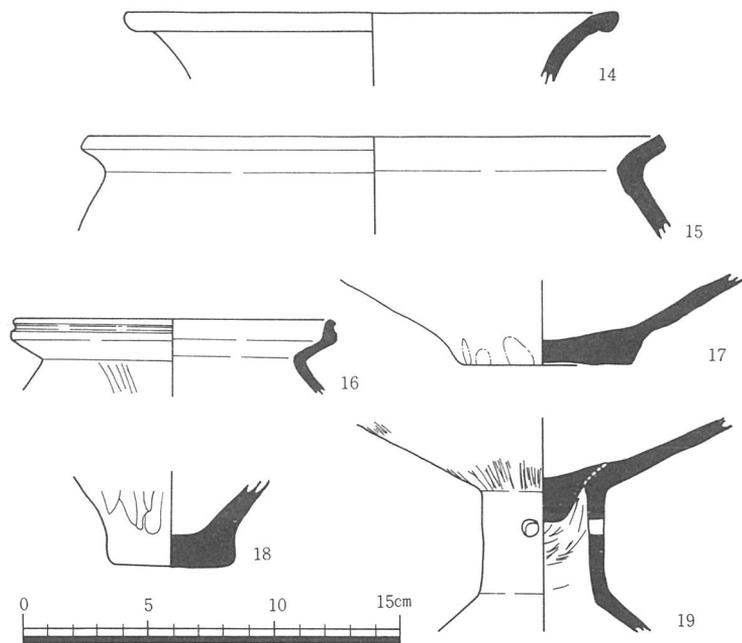


出土遺物 (第49～  
55図、図版39・40  
・53・54)

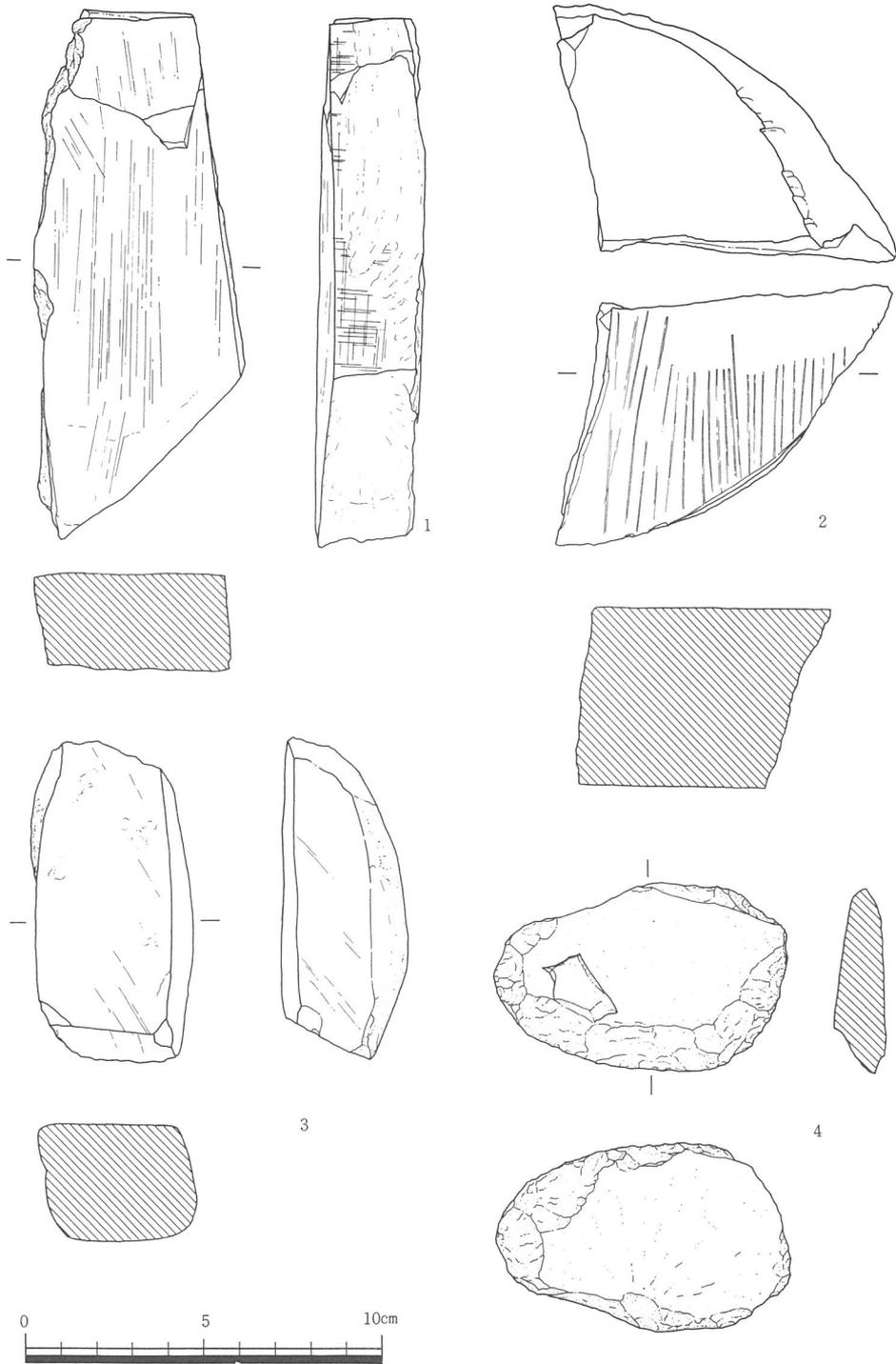
14号住居址からの  
出土は主に埋土  
中からのもので、  
その多くはテラス  
寄りのやや上層か  
らの出土である。  
器種としては広口  
壺・甕・高杯があ  
る。

広口壺 (1～5)  
1は口縁部径22.0  
cmを測り垂下した

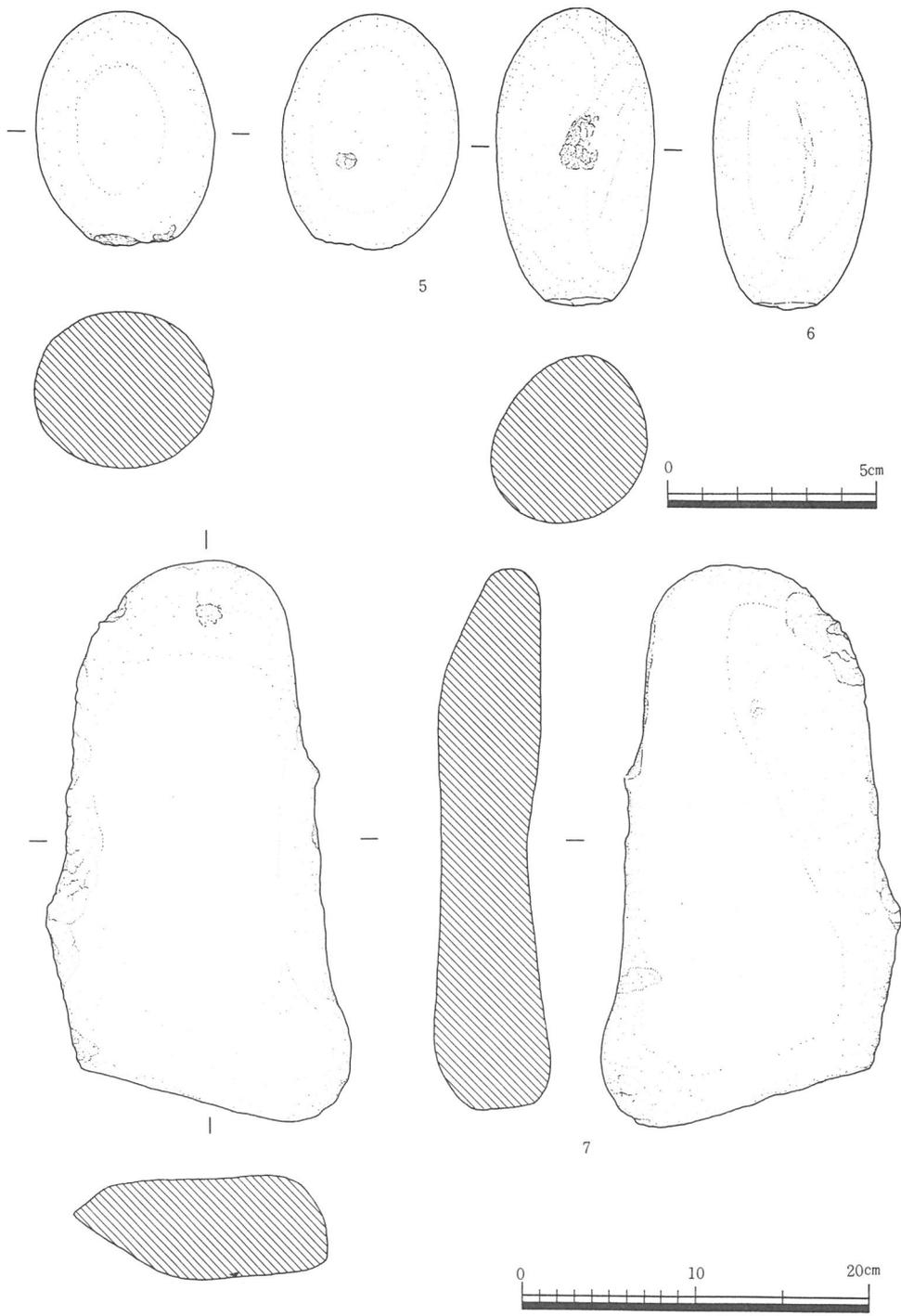
第50図 14号住居址出土遺物(2)



第51図 14号住居址テラス出土遺物

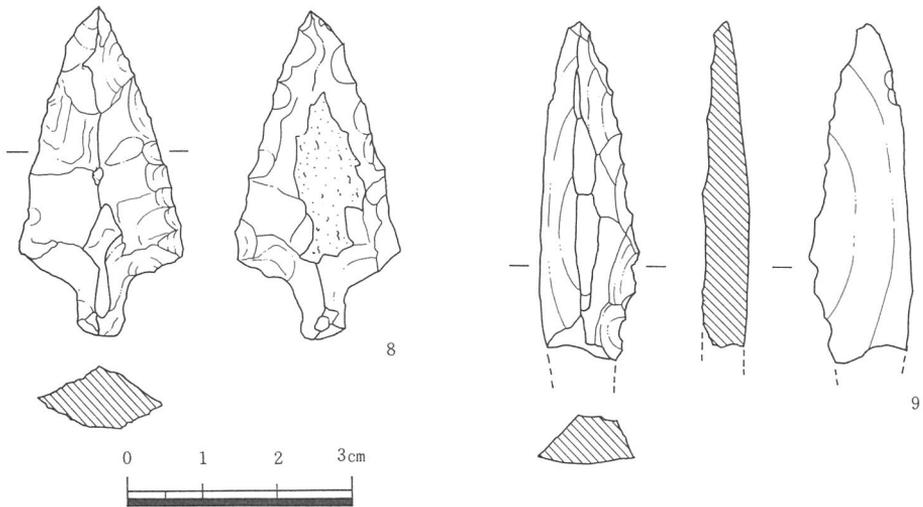


第52図 14号住居址出土遺物(3)



第53図 14号住居址出土遺物(4)

口縁端部が「ハ」の字形に開くタイプである。胎土中には白色・金色粒の他、角閃石を含み、生駒西麓産のものと見られる。2は口縁部径が22.4cmを測り、1に比べると垂下の度合いが低い。胎土中には多くのクサリレキと僅かな片岩を含んでいる。色調は黄褐色を呈しており胎土、色調から紀伊(紀の川流域)産の可能性が高い土器である。3はやや小ぶりである。4は口縁部径16.4cmを測る。形状は口縁部が不明瞭な稜線をもつ受け口状を呈している。器表面にはヘラミガキが僅かに残っている。胎土中に白色粒を僅かに含み、色調は灰褐色を呈している。5は端部に凹線文をもち、その上に円形浮文によって装飾されている。胎土・色調とも2に酷似する。甕6は口縁部が大きく外反するタイプである。高杯10~13は中空の脚柱で円盤による充填法を用いている。脚柱は棒状のもの12・13、裾広がりなもの10・11、さらに円孔の穿たれたものもある。底部7は壺、8・9は甕であろうと思われる。



第54図 14号住居址出土遺物(5)

15号住居址からは敲石が1点のみ出土しているだけで土器の出土はない。

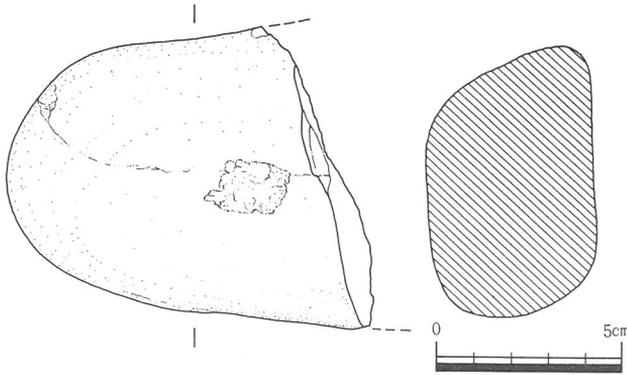
テラスからは広口壺・甕・高杯が出土し、とりわけ石器類の出土が顕著である。

広口壺14は口縁部が外方向に開き、端部が肥厚する。径は19.8cmを測る。

甕は口縁部径が22.9cmの大型品15と口縁部径12.8cmで端部に凹線文をもつ受け口状の中型のもの16がある。

高杯19は短い脚柱部をもち中空である。接合は円盤充填法で3ヶ所に円孔が認められる。

底部17は壺の底部であげ底を呈し、18は甕の底部で平底を呈している。



第55図 15号住居址出土遺物

石器は全住居址中、最も多量に遺存していた。(第52～54図)

1～3は砥石である。

1は、長さ14.73cm、厚さ2.7cmを測る平面台形を呈するもので、石質は緻密である。側面

面は一部分を除いて欠失している。擦痕は図示した面および裏面、両側面の計4面に見られる。シャープで直線的な擦痕で、鉄器の使用を推測させる。

2は周囲がすべて欠損するため全体の形状は不明であるが、やや大型のものである。石質は1に比べ、やや粗い。厚さ約5cm。擦痕は顕著で、最大のもので幅約1mmを測る。

3は正面および一側面を使用するが、裏面にもわずかに擦痕が残る。擦痕は細かい。長さ8.9cm、幅4.4cm、厚さ3.4cm、重量72gを測る。

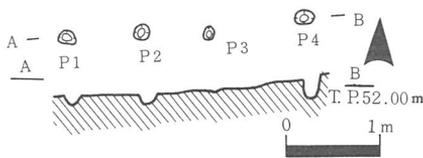
4は扁平な礫の周縁を打欠いて整形したもので、スクレイパーを意図したものと考えられる。長さ5.3cm、厚さ1.65cm、重量60gを測る。

5・6は叩石で、5は一端に顕著に、他端にはわずかに敲打痕がある。長さ6.8cm、厚さ4.5～5cm、重量196g。6は小型の円礫の側面部に敲打痕が認められる。また、一端には中央に稜を持つ2面よりなる磨痕があり、磨石として使用されたものと考えられる。長さ8.6cm、幅4.5cm、重量244gを測る。

7は大型の扁平な礫で、テラス部から図左側の面を上にして検出された。置砥であろう。

8は凸基有茎式石鏃。片面中央には素材剝離面を残す。長さ3.5cm、厚さ8mm、重量5.6g。

9は横長剥片を使用したナイフ形石器で、旧石器時代に属する。長さ4.5cm、幅1.36cm。15号住居址の石器には叩石、およびサヌカイト剥片がある。(第55図) 図は叩石で、亜角礫の一面に集中した敲打痕が見られる。欠損しているため、全体の大きさは不明。厚さ



第56図 掘立柱建物跡1平面図

4.8cmを測る。

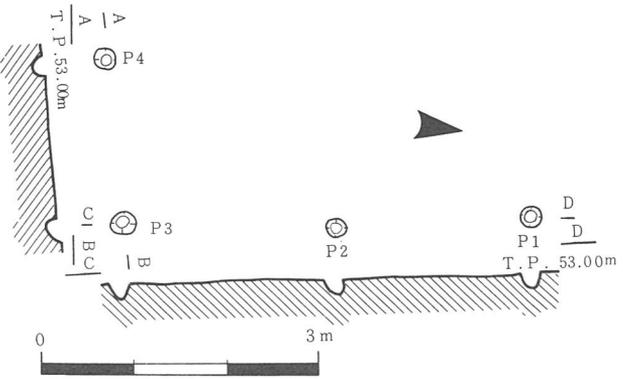
#### 掘立柱建物跡1 (第56図、図版23)

2号竪穴住居址の北東約5mに位置し、東西方向の梁行のみを検出した。梁行は3間以上である。柱穴間距離は柱穴1～2間1.2m、柱穴2～3間0.7m、柱穴3～4間1mを測る。推定桁行方向

はN-10°-Wである。柱穴プランは円形で、径0.1~0.3m、深度0.11~0.25mとばらつきがあり、掘方底面レベルも一定ではない。掘方から遺物は検出できなかった。

**掘立柱建物跡 2 (第57図、図版24)**

2号竪穴住居址の東側10mの位置で検出したもので、丘陵斜面から緩斜面に至る傾斜変換点に近い位置にあたる。梁行1間以上、桁行2間以上で、梁行間1.7m、桁行間は柱穴1~2間2m、柱穴2~3間2.3mを測る。桁行はN-10°-Wを示す。



第57図 掘立柱建物跡 2 平面図

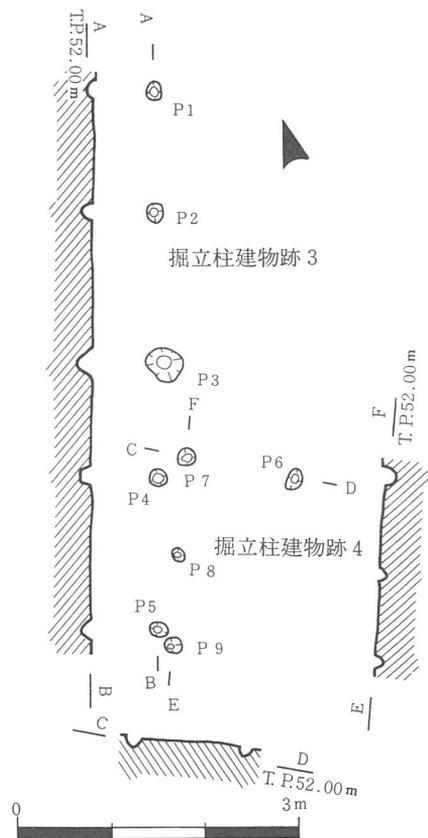
柱穴プランは円形で、規模は径

0.2~0.25m、深度0.13~0.25mである。

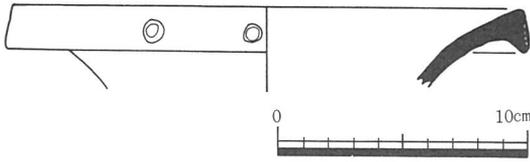
柱痕、ならびに掘方からの遺物は検出できなかったが、柱穴2・3・4の掘方埋土には炭片が含まれている。

**掘立柱建物跡 3 (第58・59図、図版24)**

3号竪穴住居址の北東約5mに位置し、南北方向の桁行のみを検出した。桁行は4間以上である。柱穴間距離は、柱穴1~2間1.26m、柱穴2~3間1.6m、柱穴3~4間1.2m、柱穴4~5間1.6mを測る。桁行方向はN-15°-Eである。柱穴プランは円形~不整円形で、規模は径0.16~0.35m、深度0.12~0.37mとばらつきがあるが、掘方底面レベルは柱穴3を除き、ほぼ一定している。柱穴2を除く4基の埋土からは、弥生土器の小片、細片を検出している。いずれも接合は不可能である。また、すべての掘方埋土には炭片を含んでい



第58図 掘立柱建物跡 3・4 平面図

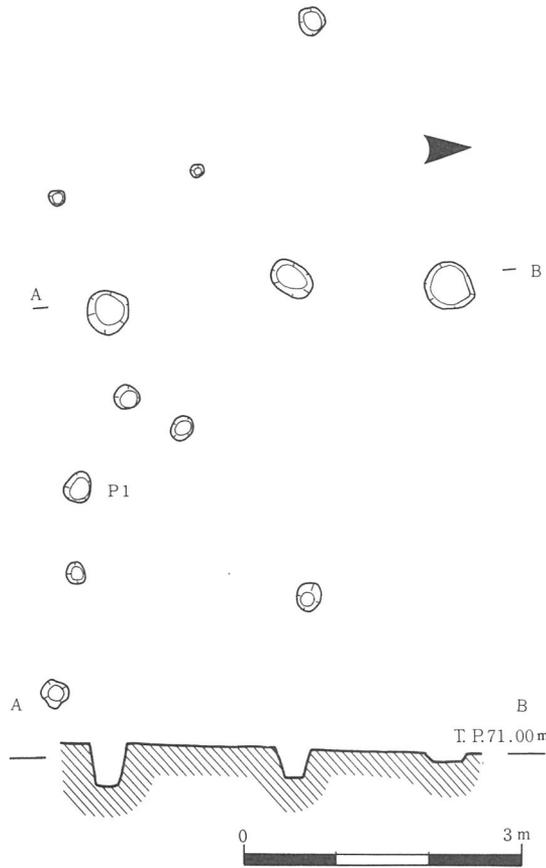


第59図 掘立柱建物跡3出土遺物

していることから判断すると時期差を考えるべきであろう。桁行2間以上、梁行1間以上である。桁行方向はN-20°-Eである。柱穴プランは円形～不整円形で、規模は径0.14～0.2 m、深度0.11～0.31mを測る。柱穴間距離は、柱穴6～7間 1.2m、柱穴7～8間 1.04m、柱穴8～9間 1mを測る。遺物は、柱穴8から弥生土器の小片を検出している。

**掘立柱建物跡5 (第60図、図版25)**

7号住居址と11号住居址のほぼ中間に位置する。柱穴跡は山頂部には少なく、この区域に集中している。当建物跡の柱穴は他に比べると大きく、径が約45cm、深さ約42cmを測る。



第60図 掘立柱建物跡5平面図

る。

**掘立柱建物跡4 (第58図、図版24)**

掘立柱建物跡3と接して、あるいは重複して存在するが、軒が近接

二間分検出しており、そのうちP1からは砂岩質の叩石が1点出土している。

本集落址は、土器型式から見れば1文化小期にあたる短期間のものであるが、住居址の拡張が見られたように、掘立柱建物についても3・4のように2段階を考えることができる。また、関連が明確でない他の柱穴群に関して考えると、2号竪穴住居址と3号竪穴住居址間に存在する柱穴群では、多数の柱穴の埋土から弥生土器の小片を検出している。これらは掘立構築時に混入したものと判断できるもので、構築時にすでに包含層が形成されていたと推定できる。単純に遺物の有無で判断できるものではないが、掘立柱建物1と2の柱穴からは遺物は検出されておら

ず、また主軸方向も同一であることから、集落成立期の同時併存の建物と考えるもよいだろう。

なお、各掘立柱建物の柱穴出土遺物のうち、図化し得るものは1点のみである。第59図は掘立柱建物跡3の柱穴3から検出した壺の口縁部で、復元口径21cmを測る。口縁端部は下方に垂下させ、外面に竹管刺突文を施している。色調は、内面、外面、断面とも10Y R 6 / 4（にぶい黄橙）を呈し、焼成は良い。胎土中に角閃石を含むことから、河内の土器と考えられるものである。

#### 溝1（第15図、図版25）

山裾の傾斜変換点に掘られた南北方向の溝である。溝は直線的に延びるが北端部では谷側に彎曲する。全長は25mで、幅約40cm、深さは深いところで約11cmである。埋土中からはサヌカイト片が出土している。

#### 溝2（第61図、図版26）

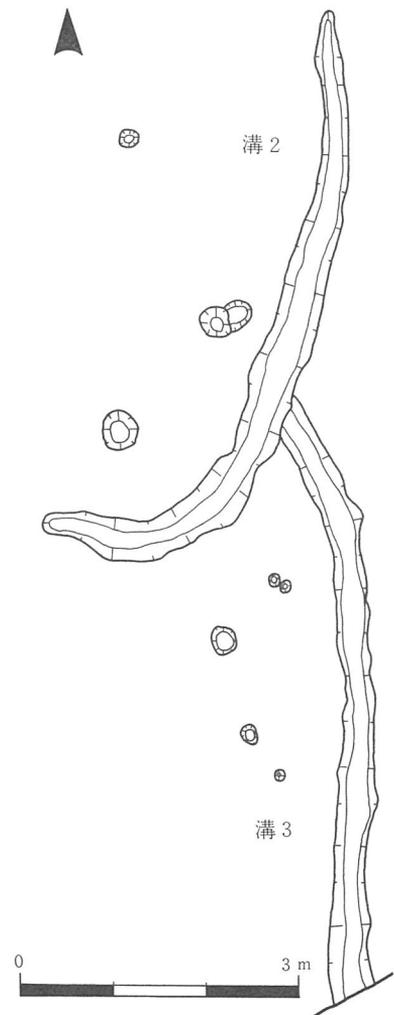
緩斜面のT.P. 52.90mのところ掘られた溝である。幅は最大で56cmを測り、深さは8cmである。埋土は10Y 8 / 1（灰白色）を呈し、粗砂混じりのシルト質である。溝3と重複するが溝2の方が新しい。

遺物は弥生土器が34片出土している。その多くは細片で図化できるものはない。

#### 溝3（第61図、図版26）

溝2によって切られている溝である。最大幅42cm、深さ11cmを測り、南北6.3m分検出した。埋土は10Y 8 / 1（灰白色）を呈し、土質等も溝2と酷似する。溝底には径5cm前後の杭跡状のピットが不規則にみうけられる。

遺物は弥生土器が全てで溝2に比べて破片数も多く103片出土している。器種としては壺・甕・高杯・鉢等がある。



第61図 溝2・3平面図

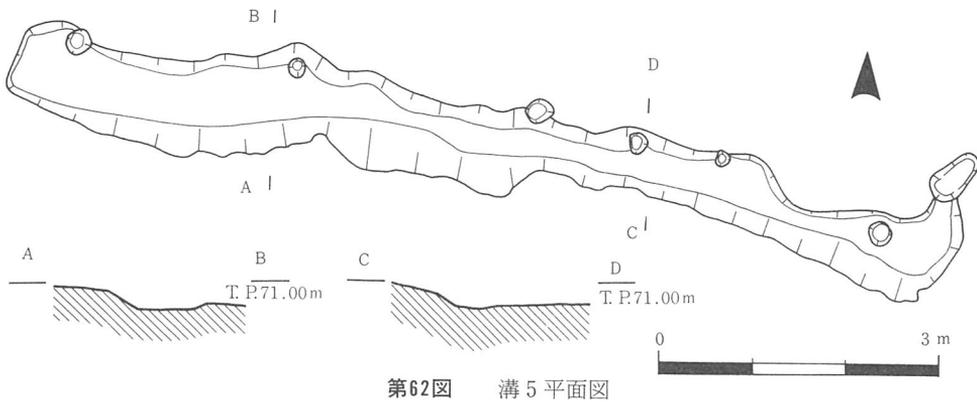
**溝 4**（第15図、図版26）

東西方向の溝で約3.3m検出した。幅は最大で59cmで、深さ約24cmを測る断面「V」字形である。埋土中には弥生土器片が出土している。破片が多く図化できるものはない。

**溝 5**（第62・63図、図版26・40・54）

山頂部7号住居址の西側に隣接して位置する。緩斜面を横切るように掘られた溝で全長10.3m、幅60～80cm、深さ約20cmを測る。

低所にあたる北肩には6個の柱穴が溝に並行して検出された。柱穴は径20cm程度のもの



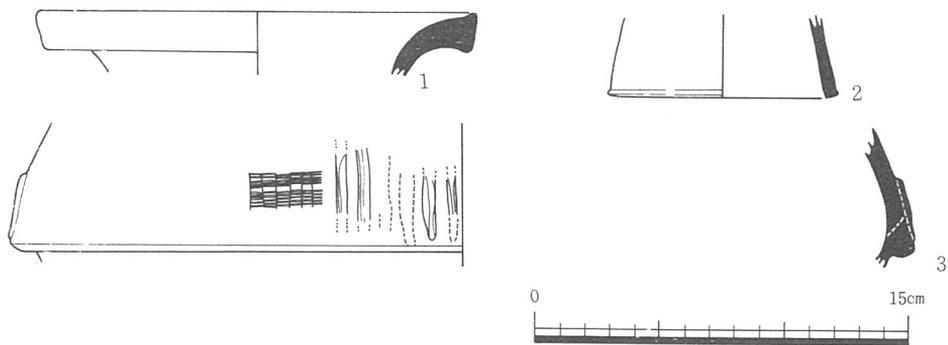
第62図 溝5平面図

が多く、柱間は2～2.6mを測る。溝内の埋土は砂質土で、焼土塊を含んでいる。

建物に伴う溝である可能性も考えられる。

**出土遺物**（第63図、図版40・54）

埋土中から広口壺・脚台部・大型の無頸壺等の弥生土器と叩石が1点出土している。無

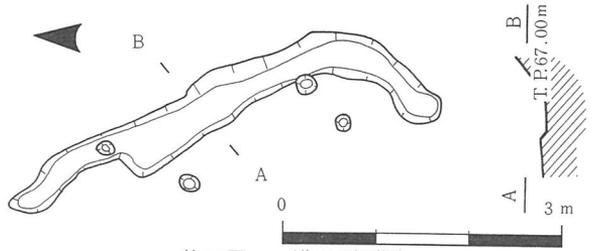


第63図 溝5出土遺物

頸壺は体部に簾状文を有し、5本以上の棒状浮文を持ち、他の土器よりは遡る土器である。色調は黄褐色を呈している。

**溝 6**（第64図、図版27）

山頂部西端からやや下ったところに位置し、8号住居址の南に位置する。ほぼ同じ高さにある。全長約5m、幅0.5m、深さ約15cmの「L」字に曲る溝で



第64図 溝6平面図

ある。溝5と同様低位所側に柱穴が3個検出されている。柱穴は径約20cmである。

埋土は若干の弥生土器片を含む黄色の砂礫土である。

溝7 (第65図、図版27)

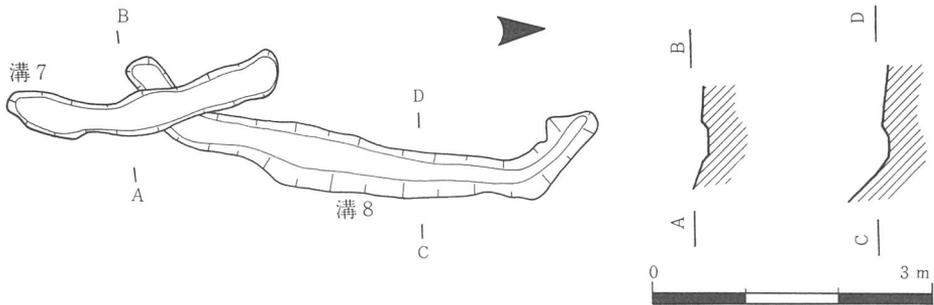
10号住居址の南に位置する溝で、溝8と重複する。新旧は溝7が新しい。長さ2.9m、幅0.5m、深さ10cmを測る。埋土中からは若干の弥生土器が検出されている。

溝8 (第65図、図版27)

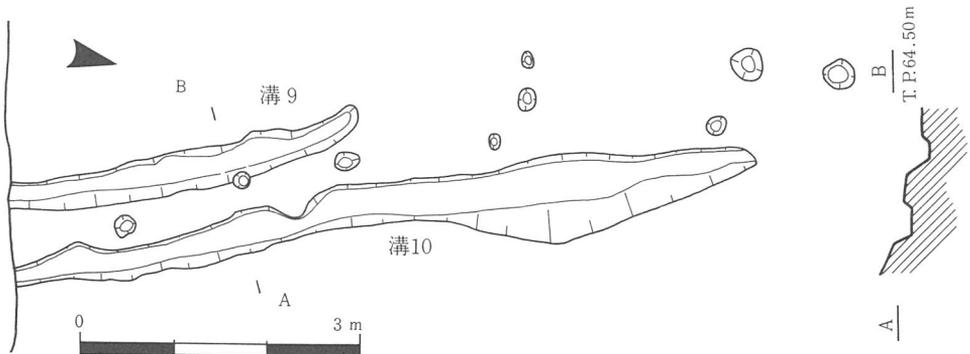
長さ5m、幅約60cmのやや弯曲する溝である。溝7と重複する。埋土中からは若干の弥生土器片を検出している。埋土は黄色の砂礫土である。

溝9 (第66・67図、図版27)

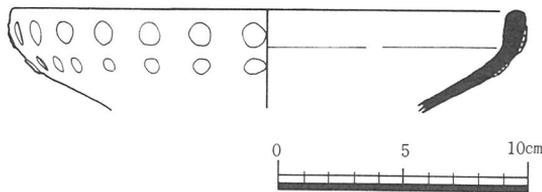
T.P.64.5mに位置し、斜面に直交する溝である。検出したのは長さ3.8m、幅40cm、深



第65図 溝7・8平面図



第66図 溝9・10平面図



第67図 溝9出土遺物

さは約20cmである。埋土は黄色の砂礫土である。

**出土遺物（第67図）**

埋土中から杯部器表面に円形貼付浮文を持った高杯が1点出土している。色調はチョコレート色を呈している。胎土中に角閃石を含み、生駒西麓産と考えられる。

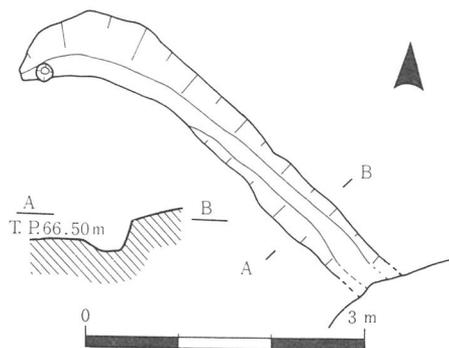
**溝10（第66図、図版27）**

溝9と平行し、やや高位に位置する。同レベル上の遺構としては9・13号住居址があり、近接している。検出した長さは約8mである。北側部分の方が残りがよくたちあがりは約16cmを測る。低い方には5個の柱穴が肩部に並ぶ。柱穴は径約20cmで、柱間は不揃いである。埋土は溝9と酷似し、埋土中に弥生土器を含む。

**溝11（第68図）**

8号住居址と重複する溝である。新旧関係は8号住が新しい。

溝は長さ4.5m、幅約0.5m、深さ10cmにわたって検出したが、北側で「L」字に屈曲する。断面は「U」字形を呈し、埋土は8号住と酷似する。土器は破片が多く、8号住との時期差はない。あるいは8号住居址に付設された溝であるかもしれない。



第68図 溝11平面図

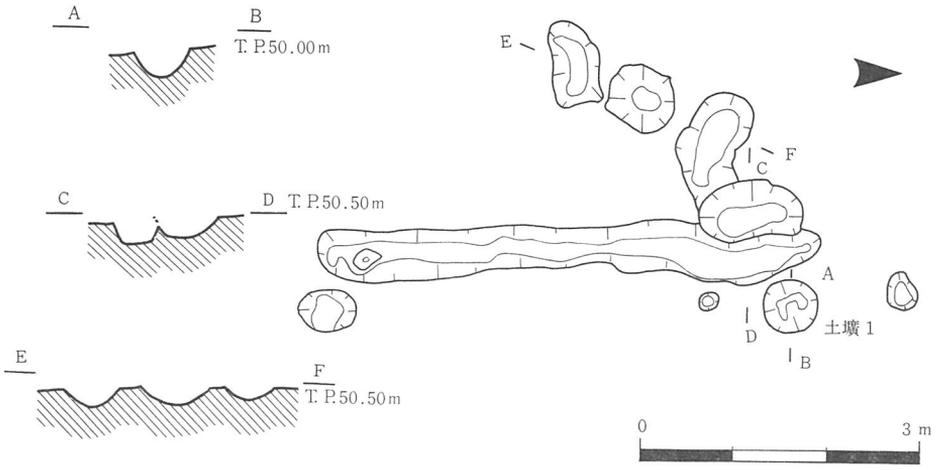
**B地区土壌群（第69・70図、図版28・54）**

4号住居址の下方で検出している。埋土は砂礫土で弥生土器を若干含んでいる。この中で円形土壌1は径58cm、深さ35cmの規模を有している。遺物には大型蛤刃石斧がある。石斧は完形で、長さ16.8cm、幅7.04cm、厚さ4.6cm、重量910gを測り、丁寧に研磨されている。

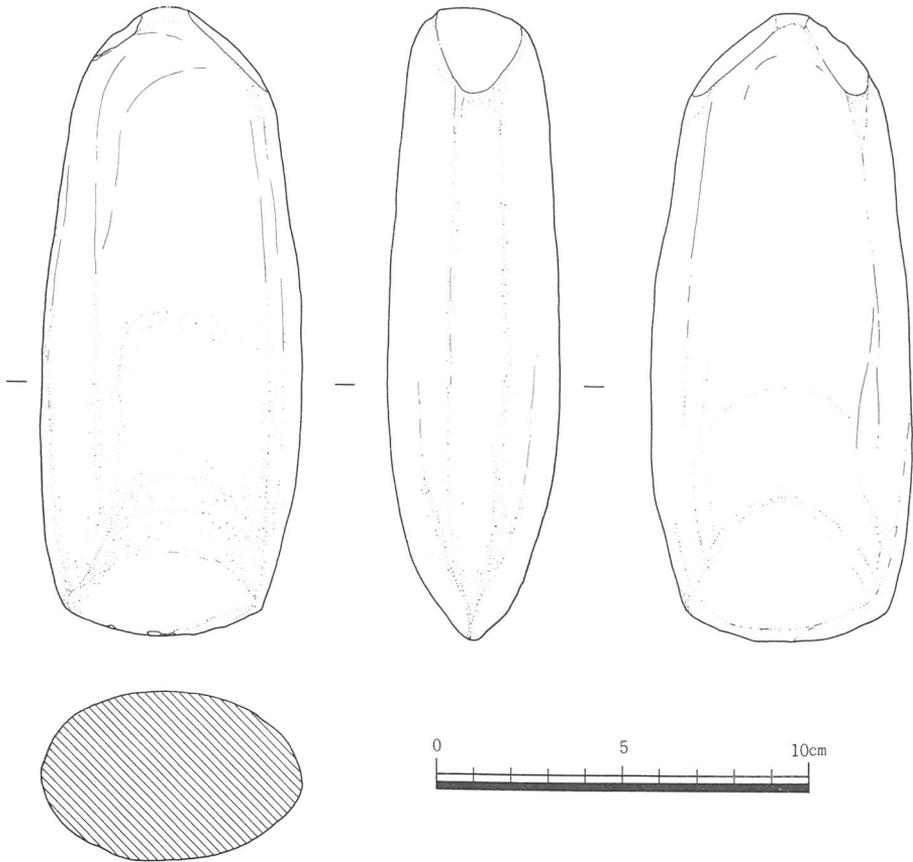
土壌1は自然埋没と考えられるもので、埋納したものではない。

**土壌2**

山頂部東端、6号住居址の南側で検出した長軸1.6m、短軸0.7m、深さ42cmの不整形の土壌である。埋土は焼土による単層である。遺物はないが、検出状況から弥生時代と思



第69图 B地区土壙群



第70图 土壙1出土遺物

われる。

#### 自然流路（第15・71～96図、図版29・41～50・55・56）

東西の丘陵に挟まれた谷状地形の中に自然発生的に出来た流路である。周辺の地形は南が高く、北に低い。従って流路も同様の傾斜を示し、下方の金熊寺川へと続いている。流路底のレベルは調査区南端でT.P. 49.88m、北端でT.P. 47.92mを測る。

流路幅は南で約4m、北で約8m、深さはそれぞれ約0.8m、約0.5mである。上流部では流路幅に対して深さがあることから人為的に手を加えている可能性もある。流路底の形状は一様ではなく凹凸が激しい。一部基盤層である流紋岩の岩盤が露呈している状態である。流路の肩は上流では視覚的にとらえやすいが下流では自然地形の傾斜との境が不明瞭である。流路の断面の形状は強いて言うならば浅い「U」字形を呈している。

流路内埋土は基本的にIX、X、XI、XII、XIII、XIVの6層に分層が可能であるが、遺物については各層から満遍なく出土している。それらの遺物を挙げれば弥生土器・石器である。

#### 出土遺物（第71～96図、図版41～50・55・56）

土器では壺（広口壺・短頸壺・細頸壺・無頸壺）、甕、高杯、鉢、器台、蓋、ミニチュア土器、異形土器（蛸壺？）の8種がある。

広口壺A（1～3）垂下した口縁部に凹線文を施したものである。1は端部が上方へつまみあげられており、この中ではやや古い様相を示している。肩部はややなで肩を呈している。口縁部径はそれぞれ18.0cm、22.2cm、19.6cmで、胎土中に白色・黒色・褐色系の砂粒を含み、色調は灰白色を呈している。

広口壺B（4～12）口縁端部が短く下方へ拡張されたもので無文である。端部は強くナデている。前者の壺に比べると口縁部径が短いものが多い。9はチョコレート色を呈し、胎土中に角閃石を含むところから生駒西麓産とみられる。他は前者と同様で大差はない。

広口壺C（13～15）前者のタイプに装飾文様を持つもので、13は竹管文、14は内外面に円形貼付浮文を、15は頸部上方にドーナツ状の浮文を施している。口縁部径はそれぞれ21.9cm、27.2cm、15.0cmである。このうち14が径が大きく、かつ胎土中に角閃石を含む生駒西麓産の土器である。

広口壺D（16～21）口縁端部がやや外方向へ垂下するタイプである。口縁部径はバラエティに富み、最少12.4cmを測る18から最大24.1cmを測る19までである。尚、この19は生駒西麓産と考えられる。

広口壺E（22～37）口縁端部が外方向へ短く開くタイプである。口縁部径が17cm前後のも

のが多いが、**28・30**は20cmを超えるもので共に生駒西麓産とみられるものである。**35**のように装飾を施されたものもある。**36・37**は口縁部が欠損しているが、口縁部が短く開く同タイプと考えられる。

短頸壺 (**38~44**) 口頸部が開きぎみに直線的に延びる形状を示している。**38・39**は長頸壺であるかもしれない。口縁部径は10cm前後である。**41・43・44**は口縁部径が13cm前後を測る。胎土中に白色砂粒を多く含むものが多い。**40**は生駒西麓産と考えられる。

細頸壺 (**45**) 比較的器壁が薄くシャープな感じのものである。口縁部径 5.5cmを測る。調整は剝離のため不詳である。胎土中には1~2mmの白色砂粒を含む。

無頸壺 (**46~50**) 口縁部径はそれぞれ13.4cm、11.2cm、16.1cm、13.0cm、13.9cmを測る。前者3点は無果実形を呈す。このうち**48**は体部中位に三条の凹線文を施されている。**47**は生駒西麓産と考えられ、他の4点は白っぽい土器で在地産と考えられる。

甕A (**51~60**) 大型の甕で口縁部径が20cmを超えるものである。端部の形状はバラエティに富む。傾向としては肥厚するものが多い。上方へつまみあげているもの**51・54・58**と平坦面をなすもの**52・55・59**、擬凹線をもつもの**54・56・57**がある。器表面が剝離しているものも多く、詳細は不明であるが、タタキメが観察できるのは**57**の1点のみである。胎土は2mm前後の白色および黒色粒を含むものも多く、色調は黄褐色のものよりは灰褐色系の方が多くみられる。

甕B (**61~65**) 短く外方向へ屈曲するかなり肉厚な口縁部を有している。端部に沈線を施して擬凹線風にしたもの**61**と端部を強くナデることによって凹線文を呈するもの**62~65**がある。体部にはタタキメを施しているものが3点あり、タタキは右下りと平行がある。内面をヘラケズリによって調整しているものもある。胎土中には2mm前後の灰色・白色の砂粒を含んでいる。色調は灰白色のものが多い。口縁部径は14cm前後のものから20cm未満である。

甕C (**66~77**) 口縁部の径が13~20cm前後のものがある中型の甕である。口縁部の形状は端部を強くナデ凹線文風を呈しているものが多い、さらにつまみあげているものが多い**66~71・73・74・76・77**。端部は上方に従って肉厚なものが多い。**66・67・72・74・75**を除いてはやや内弯ぎみの形状を有している。器面にはタタキメを持つものも多く、口縁部にまで認められる例**75**もある。内面は剝離のため詳細は観察できないが**73**にはヘラケズリが認められた。胎土中には1~3mm大の白色・黒色・灰色粒を含んでいる。色調は灰白色のものが多い。

甕D (78~80) 口縁部が「く」の字形に屈曲し、端部が垂直ぎみにたちあがる甕である。口縁端部には明瞭な凹線文が認められるもの78・80とナデられただけのもの79がある。78の体部には平行タタキが認められるが他は不明である。80には内面に指頭痕が残っている。ヘラケズリは不明である。胎土中に1~2mmの白色・灰色粒を含んでいる。色調は灰褐色系を呈している。

甕E (81~97) 口縁部径が13~17cm前後のものが多い。口縁部は「く」の字に外反する。上方に従って肥厚し、端部は強くナデられ、平坦面をなすものが多い。中には97のように内弯するものも含まれる。器壁はA~D類に比べて薄く、肩部はナデ肩で、やや長胴である。器表面にはタタキメが通常認められる。タタキは平行タタキである。この中で代表的な例は83で、それによると、体部上半にはタタキメによる調整が行われるが、下半は粗いヘラケズリによって削られている。内面においても同様のことがいえ、上半はナデによって丁寧に仕上げられているが下半はヘラケズリによって削られて器壁は薄くなっている。底部はやや突出ぎみの平底を呈している。このタイプの甕には2mm前後までの砂粒を多く含んでいるのが特徴である。色調は暗灰色を呈したものが多い。

甕F (98) 全体的に厚手の甕で外反する端部がやや肥厚する甕である。器表面には平行タタキが認められる。胎土中には1mm前後の砂粒を多く含んでいる。色調は黄褐色を呈している。

甕G (99~105) 口縁部の形状は変化に富むが径が11cm前後の小型の甕である。体部は剝離しているものが多く詳細は観察できないがタタキメをもつものがある。

高杯は7種に分類が可能である。

高杯A (106) は口縁部径17.1cm、器高は19.2cmである。半球形の杯部を有し、脚柱部は「ハ」の字形に直線的に開く形状を有している。接合部は円盤充填法による連続成形手法によっている。胎土中には砂粒が比較的多く、色調は灰色を呈している。

高杯B (107~118) 口縁端部が外方向へ開く皿状の杯部を持つ高杯である。109は端部に凹線文をもつ。口縁部径は20cmを超えるものも多く、端部が肥厚するものが多い。器表面はヘラミガキによって調整されている。1mm大の有色砂粒をわずかに含んでいる。色調は黄灰色および灰白色のものが多い。

高杯C (119~124) 口縁端部が直立ぎみにたちあがる高杯でB類に比較して口縁部が長く、杯底面と口縁部境の稜線は明瞭であり、屈曲部が肉厚で上方では細くなり端部が外方向へわずかに開く。口縁部の径は20cm前後のものが多い。中でも120は24.8cm、124は23.2cmの

口縁径をもつ大型の高杯である。

高杯D（125）皿状の杯部から大きく外方向に開く高杯である。口縁部径が18.0cmを測る。調整は剥離のため不詳。胎土中には1.5mmまでの白色・灰色砂粒を含んでいる。色調は灰白色である。

高杯E（126）口縁部径28.8cmを測る大型の高杯である。杯部は口縁部～体部まで連続して成形してはいない。胎土中に2～3mm大の白色・灰色砂粒を含み、片岩とみられる砂粒もある。色調は淡橙色を呈している。

高杯F（127・128）内湾ぎみにたちあがる高杯でA類に近い。127は端部がやや内傾する。128は上半部が横方向のヘラミガキ、下半が縦方向のヘラミガキによって仕上げられている。色調は127が淡橙色、128が灰白色である。

高杯G（129）逆「ハ」の字形に直線的に開く杯部をもった高杯である。端部はやや内傾している。色調は灰白色を呈する。

鉢A（130）大型の鉢である。体部に4本以上の棒状浮文を持つ。胎土中に1～2mmの白色・灰色砂粒を含んでいる。色調は淡黄色を呈している。

鉢B（131）口縁部径10.4cmを測る半円形の鉢である。端部には一条の沈線がみられる。

鉢C（132・133）口縁部径約14cmを測るやや外開きの鉢である。

鉢D（134）口縁部径14.5cmを測る。口縁部は「く」の字形に外反する。器表面にはわずかにタタキメがみられる。

鉢E（135）半円形の小さな鉢である。

器台A（136・137）大型の器台で136は口縁部径29.4cmを測る。137は口縁部径が31.4cmを測り、体部に1条の突帯を有している。胎土は白色・黒色・褐色の微砂を含むが密である。色調は淡黄色を呈している。

器台B（138）器台の裾部である。5条の凹線文を有している。胎土はやや粗で砂粒を多量に含んでいる。

器台C（139）器台の裾部と考えられる。円孔が6ヶ所に穿たれている。白色砂粒をわずかに含んでいる。色調は浅黄橙色である。

蓋A（140）径19.6cm、高さ5.4cmを測る蓋である。つまみ部分は平坦で低く、裾端部は上方へ突出している。紐穴の痕跡もみられ、器表面はヘラミガキによって仕上げられている。胎土中には白色・灰色粒の他に角閃石を含む。色調はチョコレート色を呈し生駒西麓産とみられる。

蓋B (141) つまみ部分が外方向へ開き、頂部は凹面をなす。

蓋C (142) つまみ部分から裾部へは「ハ」の字形に開く蓋で頂部は凹面をなす。

蓋裾部 (143～146) 裾部径が13.1cmのもの143から16.9cmを測るもの146までである。

ミニチュア土器 (147～152) 147・148は比較的丁寧なつくりである。149～152は手捏ねによる土器で指頭痕が顕著に残る。

異形土器A (153～158) 「ハ」の字形に開く土器である。下半部が欠損しているためプロポーシオンは不明である。153・156のように体部にタタキメを残すものも2例ある。いずれも内面に指頭痕が残る。口縁部径は13.6cmのものから最大は158のように23.5cmを測るものまでである。胎土は緻密で、色調は灰白色を呈している。

異形土器B (159) 吊手状の破片である。飯蛸壺と考えられる。

壺底部 (160～189) 壺の底部は多種多様である。160～167はやや丸みを持った底部である。168～174はやや外開きの平底を呈している。174～182はあげ底の底部である。その他183～188の平底のものや、189のように突出したタイプのものまでである。

甕底部 (190～234) 甕底部については壺同様多種多様である。大別すれば190～201・225～232のようなあげ底のものと202～224・223・234のような平底のものがある。中には192のように大型の甕の底部とみられるものは器壁も厚いが、他は概して薄く、特に200～209にかけては内面を粗いヘラケズリによって薄く仕上げたものまでである。

甕底部 (235～237) 235のように「ハ」の字形に開くものもある。全体に底面は薄い。

高杯脚部A (238～244) 中空で棒状を呈する脚柱部で、その長さが約15cmと比較的長い。円孔が穿たれた例はない。中には244のように中ぶくらみのものもある。杯部と脚柱部の接合面は円盤による充填である。

高杯脚部B (245～254) A類に比較して脚柱が短いタイプである。平均約10cmぐらいである。中空で前者同様円盤による充填である。円孔を穿った例254が1例がある。

高杯脚部C (255～259) A・B類に比較して更に短いものである。中には259のように14個の小孔が穿たれたものもある。

高杯脚部D (266～280) 「ハ」の字形に開く脚部である。278～280のように円孔を穿つものとそうでないものがある。

高杯裾部 (260～265) この裾部はA～C類の高杯脚柱部に取り付くものと思われる。

鉢底部 (281～286) あげ底で外面には指頭痕が顕著に残る。

脚台A (287～292) 台付鉢のものと思われる。脚台の高さが比較的低い。胎土中に白色・

灰色砂粒を含んでいる。色調は浅黄橙色のものが多い。

脚台B（293～301）A類に比べて脚台が高い。台付鉢のものと思われる。特に299の胎土は片岩を多く含んでいる。色調は橙色を呈し、胎土・色調から紀伊産の可能性が強い。

自然流路から検出した石器には、柱状片刃石斧、太型蛤刃石斧、横型石匙、スクレイパー、砥石、叩石、剝片等がある。

1は柱状片刃石斧である。基端部は欠損している。全体に丁寧に研磨されており、刃部は長軸方向に対してわずかに斜交している。残存長14.6cm、幅3.16cm、厚さ4.14cm、残存重量420gを測る。

2は太型蛤刃石斧である。刃部を含め約 $1/2$ が欠損している。残存長13.7cm、幅6.28cm、厚さ5.03cm、残存重量560gを測る。

3は横型石匙である。長さ3.34cm、末端刃部長6.06cm、重量12.3gを測る。背面・腹面とも素材剝離面を大きく残しており、縁辺に両縁加工を施している。形態からみて、縄文時代に属するものと判断できる。サヌカイト。

4は背面・腹面とも全面に調整剝離が施されたもので、横長剝片が素材となっている。明確な刃部の作出は確認できず、とりあえず両面調整石器としておきたい。長さ2.65cm、幅4.95cm、厚さ1.1cm、重量13.8gを測る。サヌカイト。

5は試掘調査のさい検出した石器である。横長剝片を素材とするスクレイパーで、末端に背面からの片縁刃部調整を施している。刃部は欠損しているが、全体的に見れば外弯刃と言える。長さ4cm、幅6.5cm、厚さ1.2cm、重量30.6gを測る。サヌカイト。

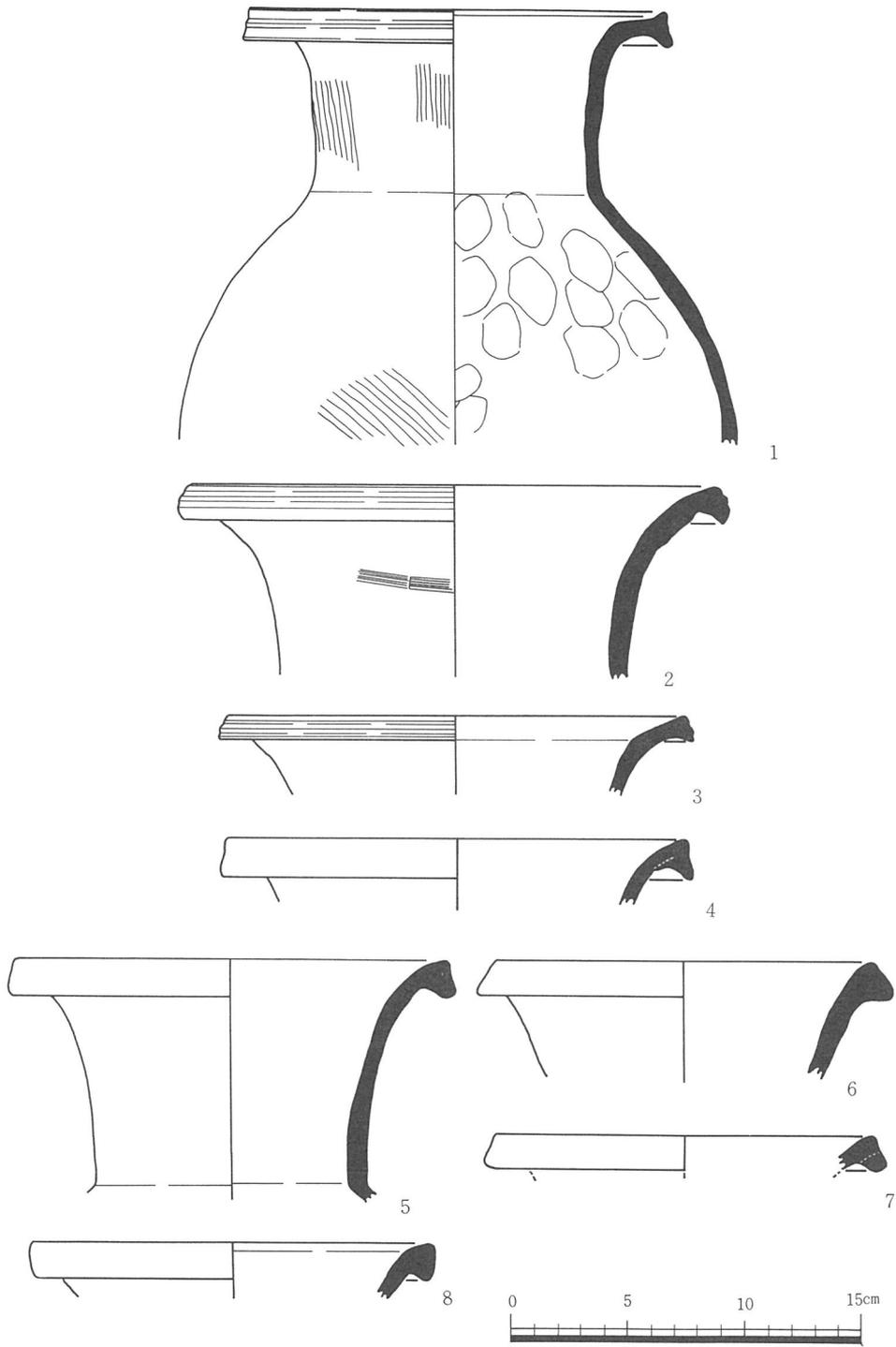
6はサヌカイトの剝片である。図化したのは背面である。上端は原礫面で、原礫面を打面として数度の打撃を行い、小型の縦長剝片を作出したのち、打点方向を変えた打撃により剝離された剝片である。

7～10は砥石である。

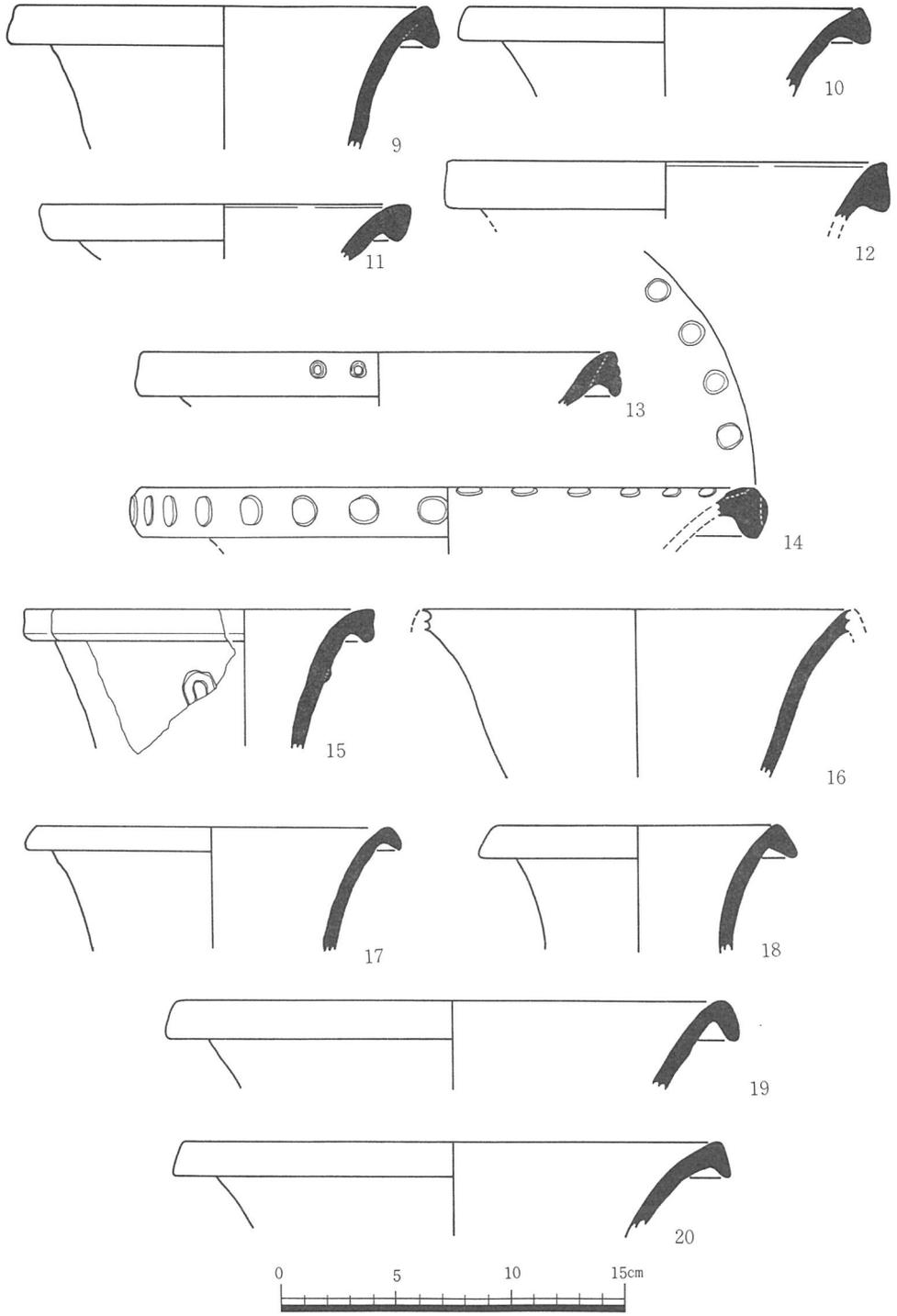
7は長さ20.3cm、幅6.29cm、厚さ4.9cm、重量775gを測る。両側縁および一端に磨痕が認められ、端部の磨痕（図右端下部）は丸い凹面を呈している。磨痕面に擦痕は認められない。

8は長さ10.66cm、幅2.65cm、厚さ2.99cm、重量138gを測る。約 $1/3$ を欠損するが、磨痕面の見られるのは図示した一端部のみである。軸を斜交する細かい擦痕がわずかに認められる。

9は長さ7.93cm、幅4.76cm、厚さ2.35cm、重量180gを測る平面長方形の扁平な形状



第71図 自然流路出土遺物(1)



第72図 自然流路出土遺物(2)